Caesalpinia sappan (蘇芳)

茜 新衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Caesalpinea sappan (蘇芳)

【Nコード】

N0997X

【作者名】

茜 新衛門

【あらすじ】

地方で開かれたロッキューゼン選抜大会で優勝したラティーフはレイステン都市の闘技場で選手として出場することになる。

ロッキューゼンの発案者オーケシユストは統率者、演出者、スカウトマンとしての力を発揮し大成功。

アルヴァー・ルーサー・フォルストロムは敷かれたレールの上をひたすら走ってきている。

勉強に勤しみ身体を鍛え自分の見た目と添うように完璧に振る舞い演じていたが

国ではルーサーを帰国させる評議会は開かれず先送りにされ苛立っている。

レイステン市長に招かれたロックイーゼン競技会でラティーフを見て大ファンになった。

一途なルーサーはラティーフが選手生活を辞めたと知り後を追いかける。

峡谷の町バッファロー

良く晴れわたった空の下。

いつもは村の子供の遊び場になっている広場にはごろ石に板を渡しただけの簡単な台ができて

迷路を作るようににわか露天が立ち並んでいる。

都会から遠く離れた山間の集落では月に一度の市場が村民の社交場でもある。

国の北側に聳えるカヤンデル山脈は氷河が溶けていく筋もの水の流れが岩と土を削り下へ下へと流れ深い深い峡谷をあちらこちらと作り、谷の僅かな傾斜地に点点と分散して人々は住み着いている。

比較的住人の多いバッファローの村では一ヶ月も前からこれまで村民が見たこともない珍しいポスターが市場の軒先の柱に巻きつけられて話題になった。

3

ポスターには都会で有名なロッキューゼンの競技者が美しい肢体を跳躍させて見せ付け村人の目を引く。

バッファローではレースと言えばは牛や馬が時には鶏や豚アヒルがするものだと思っていた。

村人は人が走り飛ぶスポーツに驚きスカウトされる参加者を募ったポスターの噂はとんでもない速さで村から村に伝わり自他共に認めるすばしこい若者達が集まり市場を一層賑わしていた。

ポスターを貼った興行主オーケシユストはレイステンの大都市で有名な男。

土地の有力者をおだて上げロッキューゼンの宣伝と選手獲得を約束し

ロッキューゼンに出られるだけの運動能力の有る人間を発掘するのが目的で来ている。

だが広い荒地と山並みを越えすぎて人間のいない秘境にまで足を伸ばしたのではと後悔し始めてもいる。

確かに村長は絶景の美しい村だと電話では言ったが

絶壁の崖の道は緑色の苔に覆われて美しいが人が歩く場所ではないというのがオーケシユストの感想だ。

「顔は望んじやいねえ。必要なのは体力だ。跳躍力だ。瞬発力だ。パワーだ。こんな田舎まで来たんだ一人ぐらいましなのがいるだろう？はん？顔が良くて運動能力の優れた奴なんて都会にはごろごろいるさ、だかな奴らはすぐに故障しちまう。それによ顔だけがい奴つてのはすぐに飽きられちまう。色々と普通なのから不細工なのまでいなきや顔の良い奴が目立たないだろう？まったくもってここには文明の利器つてのは無いのかね。サウナにでも浸かってる気分だぜ」

段々畑の真ん中に大きなキャンピングカーを止めて

ターフの影で折りたたみ椅子にふんぞり返って市場に来た人々をオーケシユスト等は見下ろしている

手持ち無沙汰を説明するようにじつとりと汗ばんだあごを拭い緑深い山並みをあきれ返って眺める。

都会に無い奇想天外の顔を期待していたのに集まったのは素朴で冴えない容姿を持った若者ばかりである。

オーケシユストの問いかけに取り巻きのひとり、ディレクターであるビルは愛想笑いを浮かべてうなずいて見せた。選考会が終わるまでは自分の意見は控えているつもりだ。

左右の山が押し寄せている峡谷の中腹には珍しく平たい土地がありその一番上の見晴らしの良い場所に陣取って募集要項を満たした若者達の予選会を観賞する。

いまだき秘境に行っても猿人のような村人など望めるわけが無いとビルは思っけていても万が一面白い素材があれば競技にメリハリが出る来ると淡い期待もある。

が並んでいる候補者はしゃれた服装は一人もない、誠実そうな普通の若者が緊張した顔つきで待っている。

ざわざわとしている人の固まりは道からはみ出るほど膨れ上がり、列の中を村長の手下が駆け回り必要な書類を提出させては書き足らぬ箇所を呼び戻しては尋ねて書類の穴を埋める・・・を繰り返している。

人の固まりは歯並びと首の太さ、身長で選り分けられて半分以下に減り、案内人の号令で百人足らずの人間が市場を突き切り段々畑の間をぬって登って行き

一塊にまとまると鋭い笛の音に合わせて駆け下る。
市場を一周して沢への道をひたすら全速力で駆けおりていった。

「おおお。着物の裾を翻して走っていったな。磨けば光る原石が何人居るだろうか。これだけが楽しみでキャラバンについてきているんだが」

オーケシユストの言葉にかかるくうなづいて手元の書類からテントの中を吹きぬける風と峡谷の向こう側にビルは目を向ける。
村長の手下が泥だらけになりながら集めた書類を持ってきている。

谷は春を迎えて木々の緑が迫ってくるように美しい。

市場では沢に下りていった参加者に注意を払う者はわずかで皆久しぶりの市に集まってきて品物の値踏みに余念がない。

「なあこれもうちよつとないか？あとな五本あればちゃんまとまっつて一つの瓶に一杯になるんだがな」

「すまねえな。今年の春はこれで精一杯だで。なんと言つてもものう山族が下りてこねえからの話にならねえわ」

「そっぴやあー最近姿見ないなあ」

「わしん所も欲しいものがあるだが。もう手にはいらねかなあ」

「うんだなあ」

二人の村人の視線の先は峡谷の奥。険しい山肌が連なりその奥に又ケラスの峰々が続いている。

恐らく山族の村はその向こうにあると思われた。

市場の喧騒に負けない騒がしい声が下の沢から大きくなってきている。

耳ざとく村長が、

「ほう！もう帰ってきたがや。早いがな」と叫び、腕時計を見て満面の笑顔になる。

市場にいる人々は沢から上がってくる人影の登場を待った。

「何！もう戻ってきたか。おい又コーディネーターが走路を短くしてるんじゃないのか？」とはオーケシユスト。

テントの中で椅子から立ち上がったオーケシユストに合わせてビルやその取り巻きもぶっつりと絶ち切れた市場の端を見つめる。

参加者の身内の叱咤激励の大声がはつきりきこえる。

その声にひきつけられて市場の人々も手を止めて道路の縁を見つめている。

人々の見守る中に先頭を走る農作業着の一人の女性が現われた。その後からつばを飛ばしながら声援している人が現われ一步一步と大地を踏みしめる足元の怪しい男達が駆け上ってきていた。

広場の中央の壇上に村長の手下に誘導され優勝した女性が汗まみれの顔を手で拭いている。

「あんた！いいね！一番だよ！」と村長の明るい声。街から来たキャラバン隊に優秀な人材を提供できると村長は鼻が高い。

村長は参加者全員に順位をつけて戻ってきた手下に指示を出して小さな板舞台の周りに集めると

仰々しく一番に戻ってきた女性を横に村長は彼女の功績を讃えてこれからの可能性を繰り返し返し大声で力説した。

参加者が戻ってきたと同時にテントから出てオーケシユストが急場造りの壇上にあがると

上気した顔の村長が田舎臭い女性の手を取って万歳の音頭をとる。それに合わせてオーケシユストも満面の笑顔で村長にお礼を言い市場に居る全員を、村民の全てを、そして女性を育んだ交通機関の乏しい峡谷を褒め称えるスピーチをした。

壇上では儀式として一枚の紙が女性の前に差し出されそれに女性がサインをすると村長はその書類を広場全員に見せるように高く上げて胸を張った。

オオーツという声と羨望のまなざしがその書類に送られ満足そうに村長と優勝者が壇上から降りると

広場に居る人間の関心事は又来年のコンテストの候補者に向けられていた。

オーケシユストが村長との挨拶を終えてキャンピングカーに戻る頃には山の間にお日様が傾き始める。

「何とかまともな奴が居たじゃないか。田舎の雰囲気も存分に味わったし。次は何処だ？後何箇所回ればいいんだ」

キャンピングカーのステップを踏みながら後ろの秘書に尋ねる。車にエンジンをかけさせて革張りのソファアに腰を落ち着ける。ベタバタしていた肌が乾燥していく。

秘書が日程を告げるとオーケシユストの愛想の良い笑はどこかに消えて、

一番に戻ってきた女性の書類と契約書を見て新しく編成しなおすメンバーの選考を始めた。

基本一チーム二十四人で（途中で八人に分けられる）最初は個人戦このときに個々の資質を吟味する。

次が総当りのリーグ戦。そこから上位八組をトーナメント方式で競わせる。それぞれを賭けの対象とし優勝チームのタイムを予想させるのだ。

オーケシユストは親の代から興行師で地方では古くからの家畜を対象にしたレースと賭博がありその一つを受け継いだオーケシユストは大都市で家畜を走らせるより人間を競わせたほうが金になると考えた。

それは個人技も見られればチームとしての団結力が必要になる新しい競技。

人数が多ければスターを作るのさえ難しくくない。

幸い様ざまな競技で些細な故障で第一線を退く選手の多さが問題にもなっている。

その受け皿にもなりえる競技ロックイーズン、闘技場のフィールド

で練り広げられる選手達の悲喜こもこもの葛藤を絶対に客は喜ぶに違いない。

選手も一年を通しての成績で高い年棒が決まる。

オーケシユストにとってフィールドの選手たちをスターにのし上げることは簡単なことで人気が出なければすぐに裏方に回すか新しい活路を（他のスポーツに戻す）提示してやんわりと退場を願う。

オーケシユストの手法は競技の解説者にスターにすると決めた選手を美麗美句で持ち上げて観衆のイメージを膨らませるにつきる。

一ヶ月を通して、半年を通して、そして一年を通してのスターを作り上げるそのシナリオが大切なのだ。

スター性を生まれ持ったスポーツ選手や努力と経験を積みファンを磁石のように吸い付けて行く様ざまな競技の選手と違い、確実にシナリを通り短期間でスターを育て上げることができる醍醐味を味わうとこの商売はやめられない。

どんな大衆の好みにもブームを作るのにオーケシユストは労をいとわない。

大衆は選手の汗とあわよくば懐に大金が舞い込むのを望み、さなぎから美しい蝶に変身する様を見たいのだ。

観衆の気持ちを煽るためには小さな仕掛けを作る。その作業には細心の注意が必要なのである。

興行主オーケシユスト

豪華なキャンピングカーのテーブルに広げた

紙の資料を反対側の椅子に放り投げ、

脇のパソコンを真ん中に据えてこれまで獲得した選手のプロフィールを画面に呼び出す。

小さな画像に眉根を寄せて気になる選手を何度も違う角度で撮った画像を大きくし見比べては次の選手のプロフィールに移る。

ピックアップした選手をチェックし並べ替えて表示させると満足な笑みがオーケシユストに浮かぶ。

「今年は大きく変動する。スターは決まった。夏から秋にかけての盛り上がりは半端ないぞ」

と、自分の言葉に酔いしれる。

「新人にいいのが居るんですか？それとも誰か又故障したんでしょうか」

オーケシユストとは逆の壁側に一人用の椅子で細かい箇所をパソコンでチェックしていたビルが聞く。

パソコンを閉じて顔を上げればにやけたオーケシユストの顔が目に入る。

よほど自分の立てた計画が気に入っているらしい。

「あいつ等の身体には強靱なバネと筋肉しか入っていないんだ。小さな故障ぐらいでびびるな。ありやお涙ちょうだいのパフォーマンスなんだ」

けらけらと笑ってみせるオーケシユスト。

車内にはオーケシユストとビル以外居ない。皆移動準備にかかりきりで物資調達に奔走している。

パフォーマンスで故障する選手などいないと咽元まで出掛かるがビルは分別をわきまえてオーケシユストの機嫌を害う言葉は使わない。ビルはオーケシユストの指先でスクロールされる画面の具合で考えを読む。

早い、疲労がたまっている証拠だ。

これまでオーケシユストのシナリオにそぐわない選手は故障を理由に競技から遠ざける傾向が頻繁にあった。

気に入らない選手は何かと理由をつけてたとえば足の曲がり形が変だとか腕の筋肉のふくらみに異常があるとか他愛ないことで医療室に追いやり精密検査を受けさせるのだ。

その間に自分の思うようにレースを変えるのがオーケシユストの姑息な手である。

ロックイーズンの運営で何役も仕事をこなした中の、たぶん今のは観客側の気分で言ったものだろうとビルには思われた。

仕事柄選手を大事にしているイメージが強いのに今のオーケシユストの言葉はいただけないと心の中で反論した。

確かに商品としての一面はあるが運営者がそう言ってしまうと巨大なフィールドがクツキーの紙箱と同じレベルに思えてしまう。

ビルの冷めた目つきに気がつきオーケシユストは自分の言葉に人間味の無さに気がついた。

「サポート体制は万全なんだ君が心配する必要は無いって事。しっかりしたシナリオさえあれば誰も怪我などしないさ。そうだろう？」あまりに自分の作ったシナリオが素晴らしかったので人形のように動かしていたことがばれたのではないとビルの様子を伺うがビルはいつもと同じ人の良い笑顔に戻っている。

人間は態度が大事だとオーケシユストは思う。

言葉は正直に舌から滑り落ちてしまいがその後のフォロー次第でどうとも受け取ってもらえる。

失言も身内のようなビルの前だと完璧に挽回できるのだ。現にビルの顔はにこやかな仕事モードに変わっている。

「そうですね。良いシナリオが思いつたのなら箇条書きで結構ですから書いてください」

このビルの言い回しがオーケシユストは好きだった。

オーケシユストが馴れ馴れしくしてもビルは節度ある態度を崩さないのだ。この関係は非常に仕事をする上でやりやすい。

「ライターに任せるのは七ゲーム分でどうだろう？後の三ゲームは通常の実況中継だけでガチでやらせるとかっつてのは迫力満点だろう。ふっふっこうなると解説者の力量が問われる」

素晴らしい思いつきのように一人悦んでいる。

オーケシユストは二人掛けの椅子に足まで乗せ腕組をした。

ピックアップした選手が走り回る姿を熱狂したファンが硬質ガラスを叩いている様子が目に浮かぶ。

「良いですね。ライターの候補は良いのが居ます。がずっとこれまではシナリオ通りやってきたので本物をそのまま言わせるとなると意外とアドリブが利かない実況中継になる恐れも覚悟しなければなりませんね」

オーケシユストににこりと微笑んでみせ会場の仕上がり具合に目を通す。

又砂のことでメールが来ている。

役所からは選手が万が一落ちた場合の砂の深さで折り合いがつかない。厚さ六十センチのマットレスを引けと最後にはある。

いつものことだが前日も前々回の答申にも同じことで回答したのに新しくファイルを作るのも時間の無駄で事務所に保存してあるファ

イルを転送するように指示のメールを出す。

ビルの目の端ではオーケシユストがニューフェイスを前ににたにた笑が消えない。

「う〜ん。やはり選手一人ひとりに面白いシナリオが必要」と突然思いついたようにオーケシユストが言うロツククイーゼンが始まった頃一人ひとりの選手にモチベーションを上げるためにもライターをつけたがシナリオの使用頻度が低く金ばかり使ったと言われた事を忘れていたようだ。

「時間のあるときにでも作ってくださいればよろしいですよ」
笑顔を決やさずにビルは言った。

シナリオを書くのが大好きなオーナーに頼むのが一番だとビルは心得ている。

実際はライターが全部手直しするがオーケシユストが手出ししていればその試合の結果はなんとわれようと編集に時間をかければ最高に盛り上がり視聴率も取れる。

TV用に編集しすぎるのは良くないが、試合途中で怪我をした選手は競技場まで足を運んだ観客だけが知り、次の掛け金をかけるときは情報提供不足として何度もこの不平等を槍玉に上げられて居るがTVはショーとして観るものと主張するオーケシユストの意見が勝ち番組の最後で本日の故障者としてテロツプで名前を出すことお茶を濁している。

日頃レイステンで都市の役人や国の役人からの苦情、に対処しロツククイーゼンを広めるため幅広いろんなパーティーにも顔を出して多忙なオーケシユストが息抜きのためにこのキャラバンに参加しているのだがどうもその態度からだと思抜きというより、より以上にめりこみロツククイーゼンをショー化して高値をつけて別会社にも

売り飛ばす気ではないかと思えるくらい最近はやメディアへの露出度が激しい。

しかし故障した選手の賠償金額は大きいし、都市の条約、規約に触れていないか地域の住民に対しての苦情も全てオーケシユストは矢面に立ち裁判所から役所地元民の説明会にまで顔を出している姿は横についているビルが見てもロッククイーゼンへの熱意で溢れている。この娯楽競技ロッククイーゼンも何人もの政治家を抱き込んで始めた事業である。

興行主としての支出もかなりの額を出してもいるし政治家への献金も半端なく大きいこともビルは知っている。

目の前のオーケシユストを見る限り会社を売る心配よりもロッククイーゼンの全てに君臨し牛耳るのが彼の最終目的ではとチラリとビルの頭をよぎる。

ビル

バッファロー地区優勝者ラティーフの名前が

プレロッキューゼン出走メンバーの中にアネルとして書き込まれ
中央の電光掲示板に華々しくお目見えしたのはそれから二カ月後。

ロッキューゼンの競技場はレイステン市に本拠地を持つ巨大なレジ
ヤーランドの隣にアスレチック部門を担当する円形闘技場として増
設された。

冬場には一般人に解放されて安全器具をつけたロッキューゼン体験
希望者が競技アトラクションを利用し

春から夏にかけては総勢二百人のアスリート達が難解なアトラクシ
ョンを個人のためチームのためにクリアしていく姿が見られる。

広い闘技場の観客席を埋め尽くすのは純粹に選手の躍動する肉体を
觀賞する目的と

賭けた金が自分の予想通りにそれ以上に膨らむことを望んでいる人
間である。

ロッキューゼンが映像で放映されると地方にまで場外券売り場が設
けられ

闘技場の許可を出したレイステン都市、地方の市町村とオーナーの
オーケシュストとでこの競技のうまみを吸い上げた。

金のなる木だと解ると他にも様ざまな参入者、雑誌や新聞、関連グ
ッズ商品、主に公認されたプロマイドと際どいアングルから写され
た写真集も収入源となりTV画像の切り売りも多く出回って経済の
流通に一役買っている。

観客が最初に巨大な競技場を見上げた時に必ず目に入るように作ら

れた

電光掲示板の映像モニターを見て機嫌が良いのはーケシユスト。

足元から部屋の天井まで届く硬質ガラスの向こうに闘技場の全容が肉眼でも見える場所。

設置した全部のカメラの映像をも見られる特等室・主調整ルームの椅子に座りそっくり返っている。

見ているのはスカイカメラのリハーサルで映像が変わるたびに選手のない壁を見ている。

「いいだろう、今年の新人は育てがいの有る選手が多い。このネーミングいい。やたら長いのもいけない短すぎるのもダメなんだ。ンフツ、ファンが勝手に短くして呼ぶのはOK」

外の電光掲示板と連動して動くホールの映像に選手の名前が順に映し出されるとフンふんと鼻息が荒くなる。掲示板の調子は最高にいい。

隣に居るビルはチラリとモニターを見て、からかつて気になる短い名前を言ってみた。

「アネル？を短くしたら??」

ビルは塗り替えた壁に変な影はないか切り替わる画像を見てチエツクしている。

「そんなのはファンが考えるさ。Aから始まっているからってそれだから聞くな。素敵な名前の選手は何人も居るんだぜ」

アネルは適当につけらしいとビルは予想した。

オーケシユストの中ではニツクネームで呼ばれる選手は全て決まっている。

本人だけがお気に入りの選手だけだが。

しかたなくオーケシュストの機嫌をとるために長い名前を選んで言う。

「レフティハルメス」

これは綺麗に言えるとビルは思う短くすることは無い。

嬉しそうにつぼにはまったオーケシュストが答える。

「レフティー！いいだろう！レフティ~~~~って伸びる感じがいい！」

オーケシュストの趣味は一般受けするように考えているらしい。

「マルティンカウツピ」

これはビルにも解る。解らないのはなぜ後ろに変なカウツピをつけたかだが。

「マルティン~~~~」

金切り声で叫んでみせる。

名前だけで想像するのは悪いがかなりオーケシュストとしては力を入れてつけたようだ。

顔がいいだけでは人気者にはなれないのとオーケシュストに見えない顔半分で苦笑してしまう。

「ミリーマキ」これもビルには想像できる。

「ミリイ~~~~」

と、どすの利いた男の声。

可愛子ちゃんを呼ぶ男性の野太い声を実演しているようだ。ということはかなり魅力的な女性に違いない。

さあこれはどうか？と帰ってくる返答を予想して聞く。

「ナルバントグル」

これはナルと呼んでもグルと呼んでもぱっとしない。

「バントウ~~~~！う~~~~んこれはちょっと無理があるな」とオ

オーケシユストの返事にこの選手は十人並みの顔の持ち主だと想像出来た。

オーケシユストは自分でつけた名前なのにそのときの気持ちが思い出せない。

ビルは疑問が浮かんだ。

「新人は皆この名前を気に入ったのか？」

と笑いながら聞いた。特に最後のナルバントグルは名前というには無理がある。

「さあ。ロックイーゼンのショーで使う名前だからどうでもいいんじゃないか」

涼しい顔で答えるオーケシユスト。まったく悪気がないだけ始末に終えない。

「そうか・・・」

無駄な質問をした。

今回はかなり新人に力を入れてシーズンを盛り上げようと考えていることだけはビルには解った。

掲示板には新人戦とタイトルが光り始めその下に並んだ名前の列はレイステンでは聞いたことのない名前ばかりだ。

そういえばオーケシユストの新しい彼女はトリンゼイ国の移民だと思いつく。

それで馴染みのない名前ばかりが浮かんだと思うと適当な名前をつけられた選手たちに同情する。

ミルレンブランド

こちらは選手の控え室。

ブレロックキーゼンのために集められた中堅の選手と新人達がお互いの名前を覚える場所である。

緊張した顔で近づいてきた男に立ち上がり挨拶をする。

差し出された手と衣装の下の筋肉のつき方で中堅の選手たちは新人が何処でへたれるかを予測出来る。

「ラティーフですよろしくお願いします」

近づいてきた男は美しい逆三角形の身体に緑のフルボディースーツ。

「やあ僕はジリアスク。ラティーフ？すまないがフィールド名じゃないね。君はアネルだ今日からアネルと呼ばれるから覚えておくように。オーナーの趣味なんだロックキーゼンだけで使う名前だと割り切ってくれ」

とジリアスクは片目をつぶってみせると

周囲の緑色のフルボディースーツ姿の数を手元のパネルにチェックを入れる。

これで同じチームの新人が揃った。ジリアスクがチーム全員と顔合わせを済ませてミーティングルームへと去っていった。

ジリアスクがアネルのそばを離れるとその後姿をじっと見つめて視線を下にやりほくそ笑む女性が居た。

女性は時々苛苛した目で周囲を見ては壁一面の鏡に写った自分の顔に気がつき

口角を何度も上げては可愛らしさを誰にとも無く振りまく。

確か控え室にもカメラがあり緊張した様子の新人達の顔色が放送されたこともあったと鏡から外した視線を床に向ける。

こうすれば顔に影が出来て不安げに映る・・・かもしれない。

アネルは何人かの顔見知りを探してみたが広い部屋に散らばっていて近寄ることが出来ない。

黙って足元の椅子の足だけを見つめるのにも飽きて顔を上げるときらきらした目がアネルとぶつかる。

アネルの運動能力を量り自分が上だと確信して隣の女性が声をかける。

一応同じ色のスーツ同じチームになる確率も高い。

「あたしはロククイーゼンの選手になりたくてさ、憧れていたんだけど。この服とこの化粧は無いよね薄くない？身体のライン丸見えよシヨkker」

TVで見ていたときはウェットスーツのような丈夫な素材に見えた。

カウンター座席のように一本のポールで支えられた腰高い椅子にお尻の端だけに乗せて見事な脚線美をみせて居る金髪の女性がリラックとした表情で答える。

「あら会場に来ている観客になら私たちは動いている小さな色にしが見えなくてよ。期待していいのはTV中継だけど、よっぽど良い動きをしないと私たち新人は映して貰えないわ」と美しすぎる笑顔。今日のレースは新人戦でいわば新人のお披露目会だ。

誰に対してのお披露目かというと周辺の地域の住民とコアなロククイーゼンのファンに対するサービスである。

「本当？新人ってTVに写らないの？困ったわ私家族や友達に思いつきり見てって言って来たわ」

美脚の女性と自分とを見比べながらプロポーションで勝てないとわかると勝てる相手アネルを見つめる。

大体アネルに声をかけたのになぜこの女が返事をしたのだと不服に思う。

他の新人に目を向ける。アネル同様緊張して固く口を結んでいるものが大半だ。

色分けしたスーツを着ている選手たちはざっと見ただけでは男女の区別もつかない。

大きく息を吐きながら背の高い男が会話に参加してきた。話をしている二人は飛びつきり魅力的だ。

「一時間の放映だからな、俺達は集団シーンでなら写るかもな」と過去の放送シーンを思い出して見る。

新人はスタートから飛び出した色の集団だ。

「編集されるからね」と美脚の持ち主。

「えー！ライブじゃないの。ずっと私ライブだと思っていたわ」尖がった口元が可愛い。

「ちゃんと書類を読んだかしら。木金は予選。土曜日が準決勝、日曜日が決勝戦よそれらを編集して日曜に放映されるのよ」

いらつとした気持ちを隠して微笑んでみせる。誰もが皆スタート前で緊張しているのだ。

「今日は木曜日でもプレオープンだからTV収録もないわよきつと」につこり笑って隣の飄々した顔を見るとなぜか安心する。まったくアネルは緊張した風情に見えない。

控え室の片隅でラティーフことアネルは近くに居た新人達との会話の中に居る。

長い髪の毛を頭頂部でまとめた美しい女性、本名ビーレル。

フィールド名をダンジェルマイア通称マイアーになる予定の選手がチャーミングな笑顔のアネルに向ける。

幅五センチのチームカラーが鼻でばってんになったペインティングがなければ花がほころぶように彼女の笑顔は美しいに違いない。

笑顔に吊られて小声でラテイーフは聞いた。

「ここってそんなにすごいところなの？オーケシユストさんは楽しいゲームをしてみせて人間の運動機能の素晴らしさを世の人々に再確認させるのがこの趣旨だって言っていたわ。ロックイーゼンって新しいスポーツだって。違うの？」

ダンジエルマイアが答える前にミルレンブランドとオーケシユストに名付けられたミリーが含み笑いをかみ締めながら言う。

今は誰かと話しているほうが心が落ち着くのである。

「ロックイーゼンは人間のレースよ。ちよつと仕組みは複雑であたし達は賭けることが出来ないけれど今は16各国で開催されてる世界中で一番人気のレースよ。カヤンデル山脈から向こう側では別ねあちらでは家畜なんかのレースが主よ。最初はねいろんなスポーツ業界の受け皿だったんだけど今じゃね・単純な運動よりロックイーゼンのほうが認知度が高いのよ。うふん」

あたしはその中のスター選手になるの、とミリーは会話に入っている全員の顔を見回す。

ライバルになるのは色は違うがアネルの隣の女性だと思っている。他の男女は異常に胸郭を鍛えていたりとかかなり無駄の多いバランスの悪い身体付きばかり。

同じカラーのアネルはスタイルはまあまあだがほっそりした印象で頼りない。

「おれホイジンガー。ホイって呼んでくれそれじゃそろそろスターラインに行こうか」

アネルとミリーとの間に同じカラーのスーツの男性が割って入って

きた。

ビルがこの呼び名を聞いたらオーケシユストに再考求めたろう。残念なことにビルが目にするのは選手の本名であっても通称名は関係ない。ロックイーゼン競技が始まりこのシーズンを無事に問題なく終わらせる事が彼の仕事である。

係員がスタートラインの手前で誘導燈をふって

耳につけたヘッドフォンの声を真剣に聞き右往左往して選手らに指示を出す。

「八番、七番、四番、違う！アマリジヨの周りばかりうるつくな！アスル・マリノ六番を前に、終わったらさっさと引っ込め！選手の最初の顔だぞ。ここをとっておかないと特番が組めない。足元の自動力メラ寄ってよって！目の動きを追って！そう！いいぞ！手足を動かしている奴も。そうだ！時間一杯撮るんだ。空中カメラスタンバイOK？頼むぜいいアングル狙ってくれよ」

矢継ぎ早に係員の耳にはディレクターの声が飛ぶ。

ミリーがアネルの横に立つとアネルの胸を見て顔をしかめる。

「あんたそれ本物？やだーかっこわるいいー」

「どうして？」

「ロックイーゼンに胸は必要ないのよ。うふふ邪魔なのよ。ほら後で胸が無かったらッて思うことが多いわよウフン」

隣でフックスベルガーが女同士の鞘当に口を挟むべきか考え閉じるほうを選んだ。まだ軽口を叩き合えるほど知り合っていない。

「気にすることないわ。でも気をつけてねその胸が本物ならね」

何か含みの有る言葉を残してダンジェルマイアは笑った。

おっとりとしたアネルに同じカラーでもないのについっい声をかけてしまう。

ミリが口元を引き締めるがすぐに左端に口が歪む。
胸は身体を鍛えれば鍛えるほど脂肪分は落ちてしまう。すなわちア
ネルの運動量はその程度と言ふことだ。
同じカラーでもここに居る全員が一応ライバルである。弱点は早く
掴むに限るのである。

アルヴァー・ルーサー・フォルストロム

セデル国レイステン市は千五百万人もの市民を抱える大都市である。都市を挟んで北と南には大きな工業地帯が広がりその賑わいを支えている。

もう一つの賑わいの源はレイステン都市が抱えるクスト湾。

クスト湾には多くの交易船が行き交いここから各国に向けての工業製品が送り出され入荷されるのである。

都市は空からも人を集めて内陸部に二つの飛行場を持ち航空機も人の流れを都市に集中させる要因になっている。

その集まる人間の数に目をつけたのがオーケシユストグループである。

オーケシユストグループはクスト湾の一部を埋め立て大きな遊技施設を造った。

それだけでは飽き足らず公的に認可された賭博とスポーツを掛け合わせたロツクイーゼン競技場をその隣に増設した。

人が集まれば金が落ちる・遊技施設と競技場を取り巻くその周囲にはたくさんのホテルがひしめき立ち並び交通の便も無数に伸びて地下鉄の駅まで引っ張ってきている。

グループは市と協定を結び広大な遊戯施設クストーランドと全天候型の競技場の間に緑豊かな広い公園も設けている。

公園の緑はロツクイーゼンで熱くなった観客の熱気を冷まして家に帰宅させるには丁度良い静けさを保ち公園を取り囲むように立ち並ぶ高層のホテルからは

昼間は公園の緑と湾の海の色の美しいロケーションを提供し

夜は港の奥に行きかえう船明かりと遠くに見える眠らない街の明かりが売り物になっている。

その絵葉書のような景色を独り占めにした、遠くから見れば尖がり屋根がシンボルのホテル・シュストーの最上階から豆粒にしか見えない人の動きを楽しんでいる人間が居る。

高所恐怖症の人間なら絶対に近寄らない

ガラス張りの窓辺に腰かけ地上を眺めているのはアルヴァー・ルーサー・フォルスストロム。

地上の喧騒から離れて広い部屋の入り口ドアのそばで立っているのが従者のフォークステット・テットと呼ばれている。

テットは年齢に似合わず地味な色のスーツで勤めである警備の仕事に徹し無表情を貫き通す。

「ストロム様・・・」

テットはこれまで同様に言い慣れた言葉を使い窓辺の青年の父親の名前の一部を口にした。

この言葉でテットは一日に何度も自分を戒めている。

声をかけられた青年は地上を歩きかう人々から目を離さない。

ドアが閉じた音は聞こえているのにルーサーは完全にテットを無視していた。

忍耐強くテットは言う。

「フランスマン教授から伝言でございます。明日の授業を短くしていただけないかと。学会に行く準備をしたいのだそうです」

抑制の効いた声音にとげのある声が答える。

「学会？他人の事等何も興味もないくせに。大きな研究会にだけは顔を出しておかないと忘れ去られると思っっているのだらう。自分なりの証明もしてないくせに権威ばかりにしがみついている輩だ」

ルーサーのフランスマン教授への個人的分析である。

感情を表さない顔がテットを見つめる。

「あんな男の授業なんぞこっちからお断りだ。口先だけではフェルマーの最終定理を解くといっているが

もう歳だ。頭の中にはカビが生えている。代数も全部知っているのか怪しいからな」

と頭から数学会では有名な教授をこき下ろす。

ルーサーが誰をどのように酷評しようともテットは動じない。

「では社会学の後に三十分入れておきましょうか」

顔色も変えずに素早くルーサーは声を荒くする。

「断れと言っている。もう僕は大学の博士課程カリキュラムは終えている。これ以上詰め込ませてどの道に進めばよいのだ。生物学が医者になって欲しいか、細菌学者か、毎日菌の培養を調べて論文を出せばいいのか？もう充分だろうそれとも学士の資格しか僕は持っていないのか」

テットを嘲笑しているのか教授を嘲笑しているのか両方をあざ笑って口の片端を上げて見せる。

「それとも・・・まだこれからずっとあの男の卑猥な視線に耐えなければならぬのか。あいつの頭の中は夜の伽をする男娼の事だけ、僕を見るたびに妙な笑で僕からなにかを言わそうとするあの卑劣な男との時間などもういらぬだろう？テット・・・お前を見るあの男のこびた視線に気がつかないのか。いかにも僕とお前等が夜な夜な如何しいことをしているのを知っているぞと笑った卑しい目だ」

フランスマン教授が男色家なのは学会の人間ならずとも有名な話である。

そもそもルーサーが他国の人間であるのに面接だけで個人教授を引き受けたのはこれが理由だとルーサーもテットも周辺の人間ならすぐに理解できることだ。

運良くルーサーが母親に似て絵画のように美しい青年だったばかりにその知性ではなく美貌にばかり誰もが関心を持つ。

フランスマン教授も例に漏れず

出会った頃は少年だったが教授はルーサーを一目見るなり小声でス
ポルス・・とつぶやいた。

言わずと知れた美少年で有名な名前である。

教授の驚いた顔と赤らんだ顔は見なかったことにし、そしてつぶやいた言葉も聞こえなかった振りをしたがその場にいる全員が聞き逃さなかった。

美少年から美青年へと育ったルーサーに躰け係としてテットは客を待たせることは教えていない。

「そろそろ階下におりませんかとトーマスベルグ市長が待つておられます」

忍耐と節度有る態度・・これがテットの信条である。

「僕は市長の胸を飾る花か？僕は人の目を集めるだけの飾り物の役目をするだけ為にわざわざここから目と鼻の先に行く程度で正装してあの卑しい言葉を聞きながら歩くのか？その後は市長の家族と食事。」

次は？何処の王侯貴族がクストーランドに人目を忍んで遊びに来てるんだ。僕はそのたびあいつ等の飾り立てる花でなければならぬ

んだ」

苛立った目が冷たくテットに注がれる。

ルーサーの苛立ちはテットの苛立ちでもあるが二人でケンカをしてもこの場は始まらない。

ここは年長者のテットが二分・・我慢すれば良い。

「参りましょう」

辛抱強くルーサーを促す。

長身のルーサーが窓辺から離れて動き始めると冷たい冷気が人間の身体をもって移動する。

「くソツたれ！市長も議員も死んじまえ！偉そうに裏では汚いことばかりして正義面して何が家族愛だ。スローガンに嘘ばかり掲げるな。刺客も僕なんか狙わずあいつ等を殺せば世の中が明るくなる」

美少年スポルスと表現されたルーサーは口汚い言葉を吐きながら棚から目の色と同じグリーンのスカーフを取ると器用にカラーの下に巻きつけ横に結び目を置いた。

渋い灰色のスーツにスカーフは首元に良く映えている。

二十年ルーサーを見てきたテットはルーサーに同情しつつも気持ちには顔には出さない。

ずっと彼には言い聞かせてきている。

ガイネス王国の準備が出来次第道は開けると。

エレベーターから降りるとルーサーは何事も無かったかのようにホテルのエントランスで待つ市長に微笑んだ。

市長はあらゆるコネを駆使してパーティーにディナーにとルーサー

を招待したが

何かと理由をつけて断られている。

ルーサー達は逃げ口上も尽きてしまい特権意識の強い市長の招待を受けて開催式に同席することになった。

開催式典はVIPルームのバルコニーで参加し競技観戦の後市長の家族と共にホテルでのディナーが待っている。

ホテルの客が引きつけられる様にルーサーの歩みを見ている。

ルーサーが立ち止まり市長と話し始めるとを夢を見るように客もボーイも見つめている。

「トーマスベルグ市長、今日は忙しいお体を私のために空けてくださって嬉しく思います。楽しみにしていたんですよ。いつも競技の有る週にレイステンに居たことがなくて」

握手を交わした手をエントランスのドアに向けて市長をそれとなくエスコートする。

ここで立ち話をしても何の实りもない。

満面笑みの市長は軽く背中を押されるまま雲の上を歩く。

「そうでしょう！そうでしょう！プリンスも若い青年の一人こんな面白い競技は滅多にない。老若男女全てが楽しめる我が都市が誇る娯楽です。今日はプリンスと同席して観賞できるなんて夢のようです。ああなんと美しいその微笑お写真や絵画では表現できない！あなたのご尊顔を・・・」

ドアボーイに軽く会釈をしてテット等警備の人間が先の歩道で目線でOKを出す。

なかなか進まない市長の歩みをもう一度速めるために言葉をかける。「そこまでですよ。スタート時間が迫っています」
わずかに頭を傾けて市長の言葉を遮る。

ルーサーの容姿を褒め讃える言葉は物心ついた頃から数限りなく聞いている。

誰でも人は例外なくルーサーに見惚れる。

絵画の中の人物のようだ神話の世界から光臨してきた神の一人だと
言った人物も居た。

外見の見てくれなどたぶんルーサーの母親が隣に居れば賞賛の声の
半分は母親に囁かれたと思う。

残念なのはルーサーを生んだ母親はルーサーを産むため力んだのが
元で脳の中の血管が破裂してルーサーを一目見ることもなく亡くな
ってしまった事。

当時王の愛人だった母は死んでから妻という位は付いたが後の冠は
貰えず逝った。

王の正式な后となればその嫡男はそのまま王の跡継ぎとみなされるが
正式な后に子供が居ない場合公平な詮議が評議会によって行なわれ
る。

ガイネス王国は似非民衆主義と王権国家とを併用し王を選出す際、
慣習によって後の嫡男を選ぶ場合と嫡男が居ない場合王の血筋を引
く者、

系譜に載っている者の中から様ざまな試験を行い秀でた王を選ぶ。

この方法は王族間の血縁関係を強固にすると同時に

固執した一つの勢力を退け新しい風を吹き込む事で流れを活性化さ
せる効果がある。

ガイネス王国を受け継いだ時王は将来自分の子供がこの椅子に座ることに疑いを持たなかった。

誰よりも賢く強靱な肉体の持ち主だったからだ。

美しい女性と恋をして子供を授かり後にはその女性を評議会で后に引き上げ順風満風の人生を思い描いていたのである。

VIPルーム

ロッキューゼンとは、あらゆる競技・・・陸上競技、格闘技、武道、などの戦いのための技術、術に秀でた者、並びに平和な時代に自己防衛や自己修練を積んだ人間なら誰もがこのフィールドで走る権利がある。

誰もが自分の得意分野で力を発揮すること勝利に貢献することが出来る、

多種多様な競技の第一線で活躍し小さな故障で第一線を退いた者、将来を有望視されていて才能があると認められていても大会に調子を合わせられず不調のまま沈んだ者などを救済するためにこの競技はある。と、役所や国に出した申請書には有る。

厳格な規律とスポーツをする醍醐味と感動を与えるという意義を振りかざして認可された。

実際には少ない掛け金で誰もが楽しんで出来る公共事業にして広く大勢の人間から金を集めるシステムがここに誕生した。

ブレオープンはTV放送は無いがこれからのロッキューゼンを占う前哨戦だ。

ファンならば是非とも見ておきたい最初の個人戦である。

全身タイツに包まれたスーツ姿の身体を消毒薬のにおいの残る選手控え室から三十メートル離れた、車庫の出入り口のような傾斜のついた坂を上るとスタートライン。

選手が一同に並ぶとさらに天井やサイドの照明が明るくなる。ラティーフは目を細めて辺りを眺めた。

始め入り口近くのライトの向こう側にたくさん色の波が見え、そのうねりの一つ一つが人の顔でそれらが全て高台の出走口を見ていると分かったのは一人ひとり選手の名前が読み上げられている中盤。

そつとラティーフは選手の陰に隠れて前進し

左横の覗き窓からこれから駆けるアトラクションを見下ろした。

まばゆいライトの隙間に浮かび上がるのは波一つ立たない水面がギリと光って見える。

右に目を移すと手前の出走口から飛び出た後十五メートル真下の砂地に落ちる。こつちが最初のルートだ。

砂地を五十メートル駆けると反り返った壁が見える。

一般人ならばその手前に反り返った壁を見たら啞然とし立ち尽くすに違いない。

しかも背丈の三倍は軽くある。

その壁越しに空中に浮いたような円盤に飛びついて立てた丸太に太いポリウレタンを巻きつけた振動棒がゆっくりと動いている。

その後は・・・と見えているものとコースを頭の中で組みあわせているとスタートのサイレンが鳴り響いた。

市長を道路に残していきそうな勢いでルーサーは歩き闘技場に着くと待ち構えていた係員と

コンコースからエレベーターで直接VIP専用のラウンジを通過しVIPルームにアルヴァー・ルーサーとトーマスベルグ市長は案内された。

一般市民の目から隔離された一角には先客が居て飲み物を片手に談

笑をしている。

一人は市議会の議員であとの二人は大手企業の専務と親の金で会社を興して肩書きだけは社長の三人である。

「今入ってきたの・・見たか」好奇心旺盛の目が笑う。

褐色の髪の毛が飲み物を口にして新しい入室者を観察している。

「ああ、市長が珍しく笑顔で入ってきた。それがどうした家族サービスだろう？」

この男は市長の顔は確認したが連れまで見なかった。

「今日はちよつと違うらしい。あれは・・プリンスを連れている」親に会社運営の資金援助を頼みその資金も完済するぐらいの勢いの儲けがある男は事情通を気取った。

「プリンス？何処の？」

聞きなれない言葉に幾つかの有名な王権国家を思い出している。

「ガイネス王国だ。まあ王位継承権はかなり下だろう。こんな所にいるくらいだから」

実はそのガイネスに工場を建てさせて品物を輸入し儲けている。

「ガイネス？あの頑固者ばかりが集まっている国だな。この時世にあいつ等とは肌が合わないな」

市議会の議員は国交を結ぼうとしないガイネス国として知っている。

「フン、美人だ」

男の目は市長の連れから離れない。

「美人？」

プリンスには興味は無いが美人には一言挨拶を交わしたい。

プレオープンをわざわざ観に来るご婦人方は少ない。

「男でも女でも美しいければ全て美人というのだ。絶世の美人だ。市長でなくても口が開いたままになる」

オペラグラスを持ったままの市長は口を開けて隣のルーサーを見つめている。

「今度の国の予算案ではガイネスの武器を買うことに可決されそう
だ。ガイネスのほら何とかって將軍と」

企業の専務になった男は国家の買物にアンテナを立てている。

「ああ有名な女の將軍か。確か・プラテアド。北の海にプラテアド軍あり手を抜かないからな、少しは手加減って物を知ればいいのに事前に申請した船、航空機以外は領海侵犯として追ひ払われるらしい」

「最近じゃすぐにその映像を公開するからこっちのほうも文句が言えない。扱いにくい国だぜ」

と議員の男。

「失敗したのか？」

社長は思い当たることがあるらしい。

「何が？」

質問をした男がどんな情報を欲しがっているか考えて返事をする。

「カット財団が着手したプロジェクトだよ」と社長の男。

審議の中心人物ではなかったがうまみのある話だと興味があった。幾つものプロジェクトを立ち上げては横滑りに計画が売られていくのを何件も見ているが

横取りしたカット財団が自分の建設会社を総動員させて望んだだけにその結果に男は多少の溜飲がさがっている。

「カヤンデル山脈の地下資源開発か。荒地を五百メートル直下に掘って南に向かったが出てきたのは温泉だけ、暫らくその湧き出た水の勢いが収まるのを待ったがセイラー地区の湖の水量が減って湖の

底が陥没して坑道は埋まるし湖の水が無くなって地域住民がカット財団を相手取って訴訟を起こしている」

市議は終わった事だと簡単に情報を洩らした。

「地核は我々の方角に口を開けていたのか」

地質学者の意見を聞くまでも無いかと遠い目をする。

足元には宝は埋まっていないと確認しただけである。

「そういうこと。今朝のニュースにちょっとだけ扱われていたな。

湖の底を元通りにすることとそれまでの住民の水を確保することを条件に和解したらしい」

「骨折り損か。本当にまだガイネスには希少金属があるのか？」

市場にガイネスが参入してくると厄介なことになると男は思う。

でもなぜ向こう側にあつてこつちの麓には鉱脈が無いのかとまだ疑問に思っている。

「宝石の国ガイネスだ、カヤンデル山脈のどこかを掘れば少しは出てくるかもしれん。広大な未開拓地持つて居る。うわさじゃ掘りつくして何も無いって話になつてゐる」と笑つてみせる。

その広大な土地にただ同然で工場を建てさせて安い賃金で働かせて儲けている。

掘るものがなければ地上を活用する。ガイネスの賃金はこちら側の市場の十分の一。

父親が買い付ける高額な武器の取引に乗じてガイネスで工場の新設を果たし

勤勉実直なガイネスの人間を使えば金儲けは容易い。

「おーお、市長の鼻の下。伸びてる伸びてる」

このまま話し込めば自分の金儲けのマジックを話したくなる。

咽元まででかかった言葉を飲み込み話の矛先を変える。

「ここじゃ市長が一番偉いからな」

チラリと赤ら顔の市長を盗み見て嘲笑する。

市長の手元の飲み物だけで酔っているのでは無さそうだ。

隣の美青年は脂ぎった市長の顔で見えない、残念だ。

「お、始まった」

美しい色とりどりの人形が横長の口からあふれ出てふわりふわりと落ちていく。

「今年は・・・お、好み！あの娘残ってくれないかな」
砂を撒き散らして駆け始めるる真剣な表情の選手たち。

「だめだめ！今年のスターは口ホの彼女だ！絶対だ！」
もう美しい女性選手を見つけて口元が緩む。

「お前の予想は外れっぱなしだからな。うっ、確かに良いプロポ
ーションだな。どの競技から来てる？」

双眼鏡から目を外してVIP専用に配られたパンフレットを見る。
カラーで刷られた印刷物には配当の予想と大きなマルが幾つも書き
込まれている。

「あれ？今回は個人名で賭けるのかか？やめとけやめとけて色で
選んだほうが手堅いぞ」

この友人の予想は良く当たる。

隠れて個人予想で賭けることにしたこれは彼女へのご祝儀だ。

「そうなんだが・・・男はどうする？」

女性の場合は好みで決めるが男は印象が薄くいつも髪形で決める。

「うづんと・・・筋肉のつき方からだとアスルマリノの奴が一番良さそうだ」
躍動する素晴らしい肉体美の中から引き締まった無駄の無い柔軟な筋肉をみつけている。

「どれどれ・・・まあまあかな」

言われて探し出してみたが他の選手との違いは男にはわからない。

フィールドに走り出した選手に勝手な妄想と夢を抱き何かに追われて高い壁や複雑な骨組みの中をカラフルな色が通り抜けていく。

「今年は選手の当たり年ですな。なかなかいい動きの新人が多い」
目の前を走りぬける選手よりも隣のルーサーから市長は一瞬も目が離れない。

「そのようですね」

市長から渡された無骨な黒い双眼鏡をルーサーは顔から離さずに答える。

空調で室内の温度は調整されているはずなのに
市長のシャツカラーは顔から流れ出た汗で濡れ
握りしめたパンフレットも滴り落ちた汗を吸収し

市長の席からは汗と香料が混じりあい嫌な臭いが漂い始めている。

プレオープン

色彩豊かな色の集団が触手を伸ばすように
灰色の壁の突起（ホールド）を掴み昇っている。

選手の足や腕がスライムのように伸びては縮みぶつかり合い（実際にはぶつからないが観客にはそう見える）

一時も同じ模様にはならないが華やかで不思議な壁絵を作っている。

突き出た部分が五センチに満たないの握りを奪い合いたどり着いた
頂上で

次に飛ぶ前のアネルにマイアーは声をかけた。

かけずには居られなかった。

「ありがとう、アネル、でもあなたベルデよ。いいの？」
と小声で。

マイアーは手を伸ばし掴もうとしたホールドを水色の選手に取られ
左手右足だけ引っ掛けて宙に浮いた。

あと少して壁の頂上というところだったから

ここで落とされては砂地からのやり直しはかなりきつい。

マイアーはホールドを取られ悔しくて惨めな気分になった。

右足の小さなエッジから離れて落ちる・・・と思った瞬間

マイアーのお腹付近にあるエッジにアネルが足を伸ばしマイアーの
落下を防いだ。マイアーはアネルの足に右足を乗せ狙っていた上の
ホールドを掴み危機を脱した。

アネルは笑顔を見せて奇怪な人工的障害物までの距離を測りちらっ
とだけマイアーを見て

次のアトラクションへ急ぐ。

色の流れが坂道をボールの様に跳ね転がる。

ドンガと命名されたの壁をよじ登りまた急な下り・・・今度はそのくだりを利用して小川を飛び越えて直立にたった岩肌に手足の指先だけ引っ掛けて昇る。

アネルとマイアー、二人は同時にそのアトラクションに取り掛かる。良いポジションをとろうと他の選手が次の岩に張り付き右へ左へと腕を伸ばしている。

「くっそーどけ！邪魔だ」紺色の巨体が器用に昇っていく。負けじとアネルマとマイアーが後を追う。

マイアーの上気した顔がアネルに微笑む。見晴らしの良い天辺では選手らが自分自身の息を整えながら作戦を立て、思い思いの場所でゆっくりと空中で動き回るアトラクションを見ている。

礼を言われたアネルは恥ずかしそうに笑いアマリジヨ（黄）のマイアーを見る。

「だって平和は友情、助け合いは人間の基本・・・でしょう？」
やっとマイアーに答える時間が出た。

マイアーのありがとこの意味を込めた美しい微笑みを見ることなくアネルはポジション取りに動いた。

アネルが言った言葉はロッキーズンの掲げるスローガンである。

岩肌を登り詰めるとくるくると回るコマが三個、地上十メートルの

位置で旋廻している。

「あれに飛び移るのね」隣に来たマイアーの言葉にうなずくアネル。付かず離れず二人はアトラクションをこなしてきた。

コマはモメンセ河の浮石を模している。

「助走をつけなきゃ飛び移れないぜ。邪魔だ！」

水色の男は次々と昇ってくる選手たちを睨む。威嚇もありだ。

数人の選手が目標を定めて飛び、コマの端に手をかけそこなって落下した。

落ちた先には土色の水が待っている。茶色の水しぶきが高く上がる。あの中に浸かると美しい色のフルボディースーツはその役目を果たさなくなる。

アネルも狭いコマの上に自分の場所を確保できるか一瞬考えたが旋廻してくるコマが目の前に来た途端跳躍してすぐにコマに飛び移っていた。

コマに足をつけると素早く反対側に回るとアネルと同じに潔く飛び移ってきた選手たちにぶつかるのを回避した。

コマはくるくると回り向こう岸近くまで来た。

次は半径二メートルの高いポール。さながら空中に浮かぶきのこだ。

数箇所取っ手のついた場所目掛けて飛び張り付くと取っ手の数だけ人数を感知するとポールはその場で回りだし選手を振り回し始める。回り始めたきのこに振り落とされる選手が続出する。

「フオーイ、今度はあの網の中かよ。おらよつと」

と、黄色のウエアの男は軽々と空中に浮かび四本の支柱に張られた大きなネットの中に落ちていった。

「フンツ！」とアネルも真似して飛んだ。

網の上を器用にアネルは歩いて木で作られたピラミッド型のジャングルジムに入り込む。

ピラミッドの天辺に設置されたパネルにタッチして入り組んだ木をかいくぐり、

ハンマー海峡と名前をつけられたアトラクションに足を踏み入れる。空中に十五センチ幅の橋が二本四十五メートルの長さで対岸に架かっている。

自分の体重と後からやってきた選手の揺らす振動を起用に利用して一歩一歩進み橋を渡り終わるとここからスピード勝負だ。

ジグザグに置かれたランプにタッチして落ちてくるハンマーの下を潜り抜ける。

ハンマーにたたき出されるとスタート地点の砂地に戻されるから大変だ。

ハンマー海峡の向こう側は当然海という設定で深いプールが待っている。

ここは高さがあり水に届くまで長いので耐空時間があり落下している間に回転やひねりを入れて個人技を競う。

プールの先には水中から気泡と一緒に大きな岩を模した突起が浮かび上がる。

岩と泡の水の障害物乗り越えて海峡の高い岩壁を登り詰めるとラストランである。

見通しの良い平たい場所に高さ一メートル弱の障害物が五メートルおきに設置されて選手の行く手を阻む

地上を走るには全速力は出せないし障害物の上を飛ぶには目測を誤れば突起物の上に乗ってスピードがダウンする。

しかもここはただっ広く他の選手の行動が全部視野に入るように作られている。

「ほうほう！今年の新人はいいのが揃ってる。そう思うだろうビル。よし明日の会議はランチと一緒にやるう。いいシーズンになるぜ！」軽くウインクをするオーケシユストにビルは笑顔で答える。

確かにスターを作るのはオーケシユストは長けているとビルは思うがあまりにシナリオを作りすぎて彼の押す選手はそこその人気しか得られない場合が過去には数多くある。

集中してこれ見よがしで画像を配信し名前を連呼してもファンの頭の中のストーリーは作れないし、オーケシユストの推す選手の名前を覚えるのは年寄りと子供だけだろうとビルは思う。

会場の嬌声の中、ゴールラインに一番で飛び込んできたのはミルレインブランドことミリー。

じつにTV映りの良い汗に濡れた顔で清清しい魅力溢れる笑顔が会場に設置された大画面で大きくクローズアップされる。

ミリーがゴールラインを踏むと赤外線で感知し天井から金色の紙ぶきが舞い降りてくる。

隣に居るオーケシユストに気を使って、

「決勝戦じゃないんだぜ」と小声で言う。

オーケシユストの今年の新人戦への意気込みはわかるが又アルバイトを雇ってあの紙ぶきを回収しなければならぬと思つと気が滅入る。

会議

レイステン市の新しい名所になりつつあるのが
競技場から五キロ離れた場所に総合スポーツ施設である。

大きなスポーツ大会競技に向けて集中して練習を行なうために
埋め立ての際オーケシュストが進言してトーマスベルグ市長に作ら
せたものだ。

陸上、水中、水上、空まで想定した巨大な設備を整えたスポーツ施
設である。

各競技の選手たちは快適な宿舍が提供され

身体を整えるためと鍛えるための設備と事故を想定した医療設備を
兼ね備えた場所で

心いくまで大会に向けて身体を最終調節できる施設である。

スポーツ選手の育成に力を注いでいるという健全な施設と、

一般スポーツと違い特別な要素を持った、国公認の・・・賭け事の対
象になっているロツクイーゼンの競技者は一般施設利用者からは隔
離されて生活している。

公共賭博であるロツクイーゼン競技者に接触する

全ての人間、郵便物やファンレター、ファンからの贈り物

差し入れなどなど全てに厳重にチェックされ出入りする人間にも制
約がかけられ

当然競技者からの一般人への連絡は監視対象のトップに位置づけら
れ、

建物は厳重なセキュリティに守られて、徹底した管理がロツクイー

ゼンの競技を神格化させ人気を集める要因の一つになっている。

施設は道路沿いの高い塀に金網にまきついた蔦が二重にも三重にも膨れ上がり長い緑が取り巻いている緑の壁が突然切れ入り込んだ場所には

大きな巨木が左右に二本この施設の来訪者を迎える。

コンセプトは自然界との繋がり、を示し建物の正面には神々しい威厳を表現して作られた金ぴかのエントランス。

自動ドアが開き一步中に入ると真っ赤なカーペットが

樹木の幹と枝を表して各部屋へ赤く伸びているが二階から上が選手達に与えられた居住空間である。

カメラ片手に門だけを撮影して帰るファンが後を絶たたず

ファンが門の前で長居すると大木の陰に有る守衛室から大きな身体の警備員が

親切に選手の予定表を持ってファンの身上調査を始める。

他愛ない話から名前を聞き出し何度も通うようであれば

ピックアップされ要注意人物として名前が書き加えられる。

又宿舎から出てくるロッキーズの選手のペイントの無い顔をカメラに収めたいファンや記者は駐車禁止の表示を気にしながら周辺をぐるぐる回りシャッターチャンスを常に狙っていた。

三階から上は選手の個人用の部屋がある。

帰ってきたばかりのミリーは二階のラウンジは無視して部屋に入ると同時に携帯電話を取り出した。

ソファに座り込むと同時に最初の呼び出し音が終わらず出た相手に向かって微笑んだ。

「ハアィー愛しいハニィー私の成績聞きたくない？そうよ私は一番で入ったのよ。最高に運が良かったわ。来月の本戦では今日の映像

が使われると思うから楽しみにしてね。映るわよなんとたって一番よ！これで映さなきゃ私文句を言っただけよ。うっふっふっ愛しているわ、ハニーー」

言葉尻に甘ったるい含みをたっぷり乗せて言うと相手も嬉しそうに愛してるよと返答する。

手術の途中だと電話の相手にもっと褒めてもらいたい気持ちを押し込めてミリーは携帯を切る。

出だしはまあまあだわ及第点よ自信に満ちた笑顔を壁に張り付いた鏡で確かめる。

何処から見ても完璧な顔、元々目鼻口と変則の三角形の位置にある、それが彼の手で何倍も魅力的になった。

コンコンとミリーの部屋のドアをノックする者が居る。

「フロステルだ。ラウンジに行かないか」

大勢居た選手の中で最初にミリーにちよっかいをかけてきた男だ。

「いいわよ」

男友達は何人居てもかまわないと携帯電話を閉じて可愛く肩をすくめる。

情報はあればあるほど良いと彼に言われている。最初の個人情報収集は彼から始めることにした。

「うふん。おまたせ」

選手が住んでいるビルから離れて樹木に遮られた場所にロッキーズンに関連する従業員並びにスポーツトレーナーが住む建物がある。

一階部分は会議室、地下にはセキュリティシステム全ての情報が集められているシークレットルームがある。

地下の区割りされた部屋にはこの大きな施設の全容が映し出された

モニタールームが次の部屋には選手の使う携帯電話通信で使われる電波は

ここを經由して本来のラインに乗る。

集積回路に集められた音声はスーパーコンピューターで分析される。たとえば言葉の中に暗号を隠して伝えると選手と会話をした相手は五年間ロックキーゼンの掛札を買うことが出来ない。

ナチュラルな物を好むオーケシユストが室内をデザインした豪華な応接間はもとい会議室は

たつぷりあるカーテンの生地を湿気を含んだ生暖かい風が吹き込み重たいカーテンを揺らしている。

さつきメイク係に決めてもらったヘアースタイルが風に負けてオーケシユストの頭の地肌を見せている。

一人掛けの椅子に座り足を組み替えて揃った顔ぶれを一巡する。

「で、昨日の保安部の報告は。皆ちゃんと規則を守っているかな？ここん所は重要だから市の要望は健全な遊技場だ。些細なことでも市には報告しとかなきゃな」

部門別に二十人がテーブルに付き古いメンバーはスミスとビルとオーケシユストだけである。

実直な元警官だという保安部の部長は砕けた感じのオーケシユストの態度を完全に無視している。

背もたれに背中に預けることもなく前のめりで役所に出す予定の書類と同じものに目を通しながら報告をする。

古顔のスミスである。

「ええ、ではまず建物内で聞き取ったものを。選手同士の会話は他

愛もないものでした。通話は五十二件、今回の新人は通話回数は少ないようです。相手のナンバーから割り出した職業と名前です。今のところマフィアがらみの人間は居ないようです。気になる・・・というか整形外科医が一人。患者が縁で付き合った可能性もなくは無いから、調べてみる必要がありそうです」

書類をオーケシユストのほうへ滑らせる。

保安部のスミスがコピーした資料にオーケシユストはざっと目を通すとオーケシユストの口元に下品な笑いが浮かぶ。

他人の秘密を覗き見る喜びを満面に出すオーナーに保安部長は沈んだ気持ちになる。

好き好んで他人の電話を盗聴しているわけではない。

オーケシユストの隣でちらりと笑い顔を見て不快な感情がわきあがってくるのをビルは押さえる。

「さっきのは注意事項に入れてもいいのかな」とスミスに尋ねる。

ビルの落ち着いた態度にスミスは気が弛む。大事な個人情報を目白半分で見られたくない。

「んー、私としては入れたいのですが、如何でしょうか？」

とスミスはオーケシユストの隣にいるビルに安堵の笑顔に向けたが

その笑顔はオーケシユストがすっかり受け取って偉そうにそっくり返って答える。

「いいだろう！俺達が些細なことにも気を配っていると市長も思うだろう。まあ清廉潔白な奴なんか居やしないって、誰だって一つや二つ叩けば埃が出るってものさ。なあ」

と軽くスミスにウインク。

便宜上の報告だと高をくくっているオーケシユストに
保安部のスミスは自分の仕事かものすごく軽く見られていると感じ
る。

ロッキューゼンが始まって以来十年、毎年恒例の行事として市民に
は受け入れられている。

他の競技熟練者からも羨望のまなざしで見られているのは
徹底した不正の管理と支払われる多額の契約金とが保障されている
からだ。

専門誌も多数出回り雑誌には必ず数ページは特集を組まれシーズン
が始まれば紙面を賑わすのがロッキューゼンの選手たちである。
闘技場で行なわれるドラマチックな戦略と選手のひたむきな汗と涙
が幾度も観客の感動を呼び起こしシーズンチケットは必ず完売して
いる。

スミスは誇りを持って不正と戦っているつもりだが
オーナーであるオーケシユストは体裁さえ整えばOKという雰囲気
で本当に役所との規約を念頭に仕事をしているのだろうか疑問に思
うことがしばしば有る。

ロッキューゼンの知名度が上がるたび土地の所有者である市と
認可した国、もちろん発案者でもあり主催者でもあるオーケシユス
ト等の懐は潤うが、
洗練された個人技とチームの団結力を前面に押し出し清廉潔白なイ
メージが売り物なのに
現実にはゲームをコントロールして大金を手に入れようともがいてい
る人間が後を立たない。

体育館

いつもは体操競技で使われるフロアがロックイーズンの選手で埋め尽くされている。

初日、競技を終えた選手には中堅の選手やトレーナーがついて各アトラクションの攻略方法である身体の使い方をレクチャーしている最中。

「まず最初、スタート直後の砂地の走り方だが無駄に力を使いすぎる。新人は皆そうだがあの曲面を登るために加速したい気持ちは良くわかるが。砂地を大またで走れば腰に負担がかかりすぎるしスピードも思ったより出ない。ならどうした良いか。カスティル」とジリアスク。

マットレスに座っているのは三人、後の六人は専用の折りたたみ椅子に腰をかけている。

「足腰を鍛える」

屈託ない笑顔がジリアスクに向けられる。

苦笑しながらジリアスクは目のきらきら光る可愛いミリーに移した。

「そうだ。それも正解だ。君はどう思う？」

可愛さ全開のミリーは自分の存在が充分にジリアスクに伝わったのを確認して答える。

「あたし？あたしならいつもの歩幅より小さくするわ。ピッチを上げて駆け抜けるわ」

今年の新人は俺等の時と違つたと自信に満ちた目で見上げるミリーの魅力的な笑顔に見とれる。

「よし。いいぞ！いいか背骨の軸を意識して太ももを上げるように

して走れ。蹴幅を変えると左右にぶれたりスピードが弛んだり良いことは無い」

「それから次が意外と時間を食った場所だったな。ここでのロスタイムは個人戦では後の巻き返しも可能だろうが団体戦ともなるとちよつと辛い、二度も三度も駆け上ると団体戦では全員が揃わないといけないプログラムがある。君たちは優秀だから身体の使い方を見れば自分で方法を会得できるだろう。出来ないやつは個人的に俺かポールに言ってきてくれ。完璧に教えるから。じゃポール見本を頼む」

選手たちよりはるかに体重の軽そうな背の低いトレーナーが短い助走で壁を登り張り出した窓枠にぶら下がりマットレスの上に着地した。

その場全員の目がその程度の動きは子供にでもできると自信に満ち溢れた表情で見つめている。

新人レースが終り最初の段階で色分けされていた選手達が更にタイムで順位をつけられてチームの中でも三つに分けられた。

運動能力は拮抗していて分けた三チームに大きな違いはないと総監督は言うが歴然と三チームの差はあり優勝するチームは少し分析すれば予想が出来る。

長く活躍しているの選手ほどシーズンのシナリオを読み苦笑いしシーズン終りにある契約更新に上乘せが出来るようアピールできる自分の活躍場面多くすることを思い描き行動に移させた。

これは観客を喜ばせるショーである。

「悪いな呼び出して」
全力を出し切って疲れた頭で硬質ガラス越しの木々を見てみると身奇麗にしたジリアスクがラティーフの前のいすに腰を落とした。

「チームとしてはいい結果を出したな。まずまずの成果だ」

「その・・単刀直入に言おうミリーの事はどう思う？あ、答えなくとも解ってる君の日頃の態度を見れば

仲間として申し分ないと俺は思う。だがなもつとそのミリーを盛り立ててくれないか。彼女はベルデのスターだし見せ場を作って欲しいんだが。たとえばだが彼女の得意な場面では補助としてそばに寄らないで見守るとか。カメラの角度を考えてミリーが崖から落ちる時は他のチームの選手をさりげなく移動させるとか。君にならできるだろう？」

ジリアスクの言わんとしていることは解るが競技中にはかなり無理がある。

「補助が必要ないなら・・そうですね離れた所から移動します。崖の上では他の選手を押しつけることは不可能に近いと思いますが」
補助をしてくれと言ったのはミリーからであつてラティーフが進んでやろうと言つたわけではない。

「そうだよな。これは例えだよ。君は目が良いからカメラの赤い作動ランプが見えるだろう。そのときは出来るだけ彼女をカメラの前にやって君は映らないように心がけてくれればいいんだ。チーム一丸となってミリーを押しで行こうと思ってる」

晴れやかに言うジリアスクに無理に作った笑顔で答えると
「明日又体育館で動きをやってみよう」

と去っていった。

いつも全員集まる時には細かいことは気にするな全力で行こうとだけしか言わないのに
終わった後はちくちくとメンバーを呼び出しては個人的な動きを注意する

それがリーダーの役目だと思っている。

競技が始まるとロックイーズンを理解していない新人と

そろそろなんとなく胡散臭さを感じてきているがまだ勝負にこだわっている中堅の選手達とが

熾烈なトップ争いをフィールドで行ない、アネルはオーケシユストの思惑通り人の良い性格のままリーダーの指示通りに動いている。

ある日希望する者だけが集まった体育館では見本演技をするラティーフの周りに人だけがある。

「アネルもう少し解るように教えて」

そういつて食い下がるのはダンジェルマイア。

プレオープンからアネルの動きが気になってしょうがないマイアは試合が終わるたびアネルを通路で呼び止めてはアネルの解説に耳を傾けた。

最初何を聞かれているかわからなかったアネルも

素直なマイアの問いに答えられるようになり言葉で解らないものは実際に動いてみせ、向上心の強いマイアは貪欲にアネルの動きを少しずつ会得し

ロックイーズンの見せ場を作るため自分の運動能力の限界に挑戦していた。

美の女神のようなマイアーが食いるように見つめる。
その真摯な姿に皆見惚れている。

「落ちる時には砂地に向かつて足を踏み出すの」

もちろん身体は引力に負けて何もせずとも砂地に引き寄せられるが。

「イメージは壁を歩く・・かしら」

通常の一般的な運動能力の持ち主は想像はできて

無理があると解るがアネルはそれを瞬時にやっているから誰も異論は唱えない。

「真ん中ぐらいでひねりを入れて、壁を蹴って着地・・逆だわ壁を蹴ってすぐにひねりを入れるの」

自分の動きを言葉にして解説するのは難しい。

「地上では無理かもしれないけど。見てくれるやつてみるわ」

マイアーが集まっていた選手達の間をすり抜けて広い床の端に立ちダッと十メートル走りタンブリングをして空中高く舞い上がり着地した。

「うゝん今のはサルトパスだな（ひねりを入れない）マイアーが望んでいるのはツイストパスだろう」

「俺は床の上ではやれると思うけど、落下している途中ではそれも真ん中まで来てやるのはちょっと無謀過ぎやしないか？」

リドイは誰よりも目立ちたいのでアネルと違う回転を入れた降り方をする。

アネルに見えるようにマイアーは左の端から又走りタンブリングにひねりを入れる。

マイアーは大技よりも小気味良い切れ味のシャープなひねりを入れた着地を好んでいる。

これはマイアーだけが気がついたことでは無いが壁を走り中間で蹴りを入れることによって着地が早くなりしかもひねった勢いで両足着地ではなく片足が下りた時点でもうすでに走り出しているというマイアーに言わせると完璧な形なのである。

「今のでいいけど、出来ればせつかくのひねりを入れた勢いをそのまま使うために、回転軸を足に持ってきて身体が倒れこむようにしてみて。自然とどちらかの足が前に出るはずだから」
五十人近い選手達が見守る中晴れやかな笑顔がアネルに向けられるが笑顔はすぐに遮断されてマイアーに魅せられた男女がピンク色の言葉の口にする。

「綺麗に決まったね。でもさもう少し体の力を抜かないといけないね。これって結構身体に負担がかかる。後で疲れるの嫌だろう。だからさこの場合・・・」
熱心な目がマイアーだけを見つめる。

「いいねいい動きだよ。天から降りてきた女神みたいだよ」と賛辞の声。

「最高だね。出来ればもう少し腰を落とせばパーフェクトだ」
満面の笑顔でマイアーを見つめる。

「次にあたしが見てもらおうと思っているけど、先に完璧な演技みせられるとやりづらいわ」
とミリーマキ。

「そんなことないわ。私ちゃんと出来たなんて思ってないわ。アネ

ルにまだ聞きたいことがあるの退いてくださる？」

三重になった円の中心がラティーフに向かってが動く。

忍耐強くマイアーの崇拜者に邪険に扱われても

この場は怒り出すことも逃げ出すことも出来ない、

マイアーの顔が見える位置または声が聞えるまで彼女が近づいてくるのを辛抱強くアネルは待つ。

鉄女 バラデュール將軍

モラド半島の気候は暑さ寒さの気温の差はあるが一年間の雨量は少なくカヤンデルの麓以外は広い半島全土が乾燥した荒地と化したままだ。

バラデュールは窓の外に広がる薄茶色の砂漠を見ている。

モラド半島にプラテアド軍が本拠地を構えて百年を過ぎるといつの日に目の前の大地は緑に潤ったことが無い。

カヤンデル山脈の恩恵は視界の範囲にはないけれど乾燥した土地が宝を吐き出し希少金属の鉱脈にもなっているのは皮肉だ。

山側の傾斜地から引いた水路に添って土地の色と同じ屋根を持った工場が

砂漠と同化して地平線の向こうまで並んでいる。

ガイネスの歴史は西のプラテアド半島から始まった。

山肌に露出していた宝石の原石を研磨して北の港で売買したのが始まりだ。

船は他国の珍しい品々を積みこぞってガイネスの美しい腕輪や首飾りなどの宝飾品を求めてきた。

宝石の国ガイネスとして諸国に知られるとその宝石を独り占めしようと幾たびか他国の軍隊が送られてきた。

モラドが武器を生産するようになったのはプラテアド半島から上陸した侵略者に虐殺された事から始まった。

貧弱な武器しか持たないプラテアドの一族は港を離れ

カヤンデルの山脈の奥地から隣のドラドへ逃げ
ドラドの一族やブランコの一族に助けを求めプラテアドを何度も奪
還した歴史にある。

惨殺された記憶はガイネスを内に閉じこもらせ他国との国交を禁じ、
近代化する諸国を尻目にガイネス独自の政治や文化を今日まで推し
進めてきている。

一切外部の情報は国民には入れず一部の者だけが諸国に目を光らせ
て監視し

近代化の流れを読んで対処してきたがそれも限界が来ている。
時の流れはガイネス一の都だったプラテアドを以前の住民の三分の
二にし

半島に残ったのは港を守る僅かな兵士と漁民が住む街に変わってい
った。

近代になると産業はモラドへ移行して誰もプラテアドに見向きもし
なかつたが、

外貨を稼ぐためにもプラテアド一族の一人サガモアが審議にかけ
朽ち果てた都に手を入れてホテルとして整備し観光事業を始め、
当初は諸国の王侯貴族だけに限って上陸を許していたが

儲かると解ると外洋船や大型クルーズ船の寄港を許可するとサガモ
アの懐は多いに潤っている。

新しい情報はプラテアド港に航海して来る観光船からも齎される。
情報は口から口へ瞬く間に広がり違った方向性を持つ。

それを修正するために何度も会議は行なわれ近代化した情報機器を
ガイネスにも取り入れもした。

国民の要求に役職の決め方も公開されたが国民がその役職につくこ
とは難しく

富のある者だけが出題される問題を解くことができ、たとえ民が試験を高得点で通過しても適正試験で一般民は落とされる仕組みがきちんと用意されてもいる。

それが国民の不満でもある。要職は古くから支配してきた七つの部族間でだけで回っているに過ぎない。

インターネット情報の中では海の向こうの国々の人々は王制に反対するデモや軍国主義に対する怒りが爆発してクーデターなどが勃発している事をガイネスの民も同時期に知る事が出来る。

これまではガイネス国民はは統制の取れた発信源を信じストライキ一つ反旗一つ翻ったことが無い。

選別された電気機器はガイネス中に設置されたが国民には不評だ。

外貨獲得のために始めた観光船事業はひなびた港を三百年前と同じく活気ある風景に戻したが

そこで働くガイネス国民は世界情勢を知るたびに複雑な思いに駆られる。

水力発電で出来た電気は一番端のモラド半島に届けられプラテアド軍の兵器の為に使われる。

一般家庭に電力は使われず天然ガスだけがかるうじてきている。

ネット画面で見る他国の街並みは明るく美しく一方ガイネスは街灯はガス燈のみ

夜仕事もガス燈の明かりの下で行なうから

部屋の一角だけが明るく町全体が明るくなることは無い。

それがよいと観光客はこぞって寄港許可を申請しているのは皮肉という他ない。

百年の間に工廠は産業になり精密機械となった兵器を敵国に売りつ

けるまでに成長し、
国を挙げて兵器を作り上げ衛星を打ち上げて
世界中を監視下においていることなどガイネス国民は知らない。
国家間では内密に兵器の売買が横行して各国のバイヤー達は増え続け百カ国を越えた。

若干十八歳のバラディールを軍隊に引き入れたのはシャルボニエ將軍で

將軍が引退したのがきっかけでバラディールはプラテアド軍の將軍としてトップの位置に就いた。

齡五十四歳の今日まで鉄女將軍と影口を叩かれながらその采配にどの一族の長も一目を置く。

鉄女將軍が一番信頼しているのはサガモア王で若いバラディールの突飛な行動を

他の一族が非難する中、必ず言葉を尽くしてバラディールを援護した。

そのサガモア王も指針を何処に置けばよいか混迷している。

農地も放牧する家畜も無いモラド半島の人間には軍人になる以外出世の道は開かれては居なかったが

僅かな期間でガイネス一の金持ちになりその構図を作ったのはバラディール自身である。

膨れ上がったバイヤー達を前に緻密な情報を腹に仕込み
恐れおののかせて交渉の場に立ち会ってもいる。

成金となり七部族を牛耳ってはいるものの国民からの信頼度は無い。
国民は世界にも例を見ない馴れ合いの試験制度の王族を軽視し国民が決める民主主義を望み始めその声がバラディールにも届いている。

国を守るといふ正義感の塊であるバラディールは突っ走ってきた人生を振り返り憂いて居る。

ポスター

近代的な開閉式の屋根を持つ円形闘技場は厳めしい外見に似合わず一歩中に入れば豪華な広いエントランスが来訪者を迎える。競技場へは中央の二股に分かれて上に伸びる大階段を上れば人工的に作られた岩肌を模した壁と配置された植物によって鬱蒼と草木の茂ったジャングルを連想させる通路に出る。

空調で足元から風を起こし木の葉がゆれると気分は一万年も昔に闊歩した原人の気分をここで訪れた者に味あわせる。

しかし競技は先週に終り競技場は屋根裏バルコニーの見学通路を行き来するのみである。

したがって観光で立ち寄ったファンは豪華なエントランスに設けられたグッズ売り場と各チームに色分けされた選手のパネルを見学し設置された椅子に座り

週末に行なわれた競技の点数表が電光掲示板で流れる横の大画面の中で跳躍する選手の必死の形相を羨望のまなざしで見ている。

ベルデのミリーのアップの次にはアマリジヨのマイアー、ロサのレフティーと人気者が次々と出てきては変わる。

来シーズン活躍する選手をファンは賭けシートを片手に次の予想を練るのも楽しい作業である。

閉館時間が近づくと大勢居たファンの数も減り始め、入り口横で待機していた警備員は変な忘れ物がないか順路に添って歩き、

中央階段横の透明なアクリルボックスの前で一人身なりの良い青年に気がついた。

警備員は熱心にポスターを見ている青年に声をかけた。

「毎年恒例の行事だ。せっかくだから好きな選手の箱の中にその用紙に住所と名前を書いて入れておくといい。確率は低い但最终日まで夢は見れる」

元気を出しなさいと一言警備員は付け加えたかったが余計なお世話だと自分に言い聞かせた。

青年が暗く落ち込んでるように見えたのは消え始めた照明のせいかもしれない。

最後の締めくくりの催し、

ロッキューゼンファン投票で選ばれた二十人がチームカラーのペイントの顔で

笑っているポスターの前でルーサーは足を止めた。

壁一杯にロッキューゼンの選手がポスターの中で真剣な表情でこちらを見ている。

大画面ではカラフルなフルボディースーツが流れるように水の中に沈み崖を登る。

最初初めて競技を見た時その間中ルーサーの胸は早鐘のように打ち、一人の選手だけを見つめていた。

興味は憧れに変わり二年後には熱狂的なファンの一人になっている。

ルーサーはついさっきレイステンについたばかりだ。

トランクを部屋に放り込み窓下に見える競技場にふらふらやってきている。

フラフラの理由は先月の議会で評議会が又延期された事。

これで次年の議会まで待たされ、

議会で選考会は必要無しと判断されれば又先延ばしされる可能性も出てきた。

ゴールの見えない試験勉強がずっと続くと思うと憂鬱になってくる。

ガイネス国で生れ落ちセデル国で教育を受けているルーサーは物心ついた時から知識を詰め込みに西に東にと高名な教授に指示を仰ぎ

このままどこかの大学院で研究に勤しみたいと思ったことも二度や三度ではない。

ガイネスに帰るといふ思いを断ち切ることはルーサーについてきた侍従の希望をも断ち切ってしまう事になる。

侍従は家族を残してガイネスを出、二十数年一度たりともガイネスの土を踏まず、

彼らの役目であるルーサーを一人前にして立派な皇太子候補に仕立て上げることに邁進してきた。

できればルーサーとて皇太子になって彼らの地位を上げ一族全てに恩恵与えたい。

侍従一族といつてもとうの昔に本流から外れて何の役職も与えられていないので、

ここで奮起すれば系譜にもぐりこめ将来自分達を踏み台にして一族の名人間を他に知らしめる才能が現われる。

皇太子を選抜する評議会が後回しにされている理由は世界の国々とガイネス国のギャップ。

ガイネス国民は世界に目を向けだし様ざまなことを限られた映像の中で知っている。

知りたいという欲望は日に日に増して

書物から得た知識よりも実際に現物で見る知識の違いに驚愕している時期はとっくに通り過ぎている。

一部の者だけが特権として外遊している事実が国民にも知れ渡り

ガイネスの王族の信用度は年々低くなる一方である。

一時は世界に類を見ない試験制度で優秀な人物を選出し地位を与えているのだという説明で理解を得たが長年続く七つの部族間だけの試験制度など

馴れ合いと暗黙の了解の中、試験の結果も公表されず国民の知らないところで役職の授与式も終わることなどから不信感の芽は摘み取れない。

統制の取れていた七つの部族間の間にも貧富の差が歴然と出始め力の無い部族の代表は国の行事ですら決まった日にちを主張できず裕福な部族の言いなりになっている。

そのとばっちりがルーサーがガイネスに帰れない理由だ。

侍従の心配顔が目の前のポスターに代わると不思議と心が落ち着き勇気が胸の底から湧き上がってくる。

落胆した気持ちを奮い立たせてくれているのは実際には会ったことも無いスター選手。

ペイントが大量に塗られた顔にありがとうといって警備員に追い立てられている人混みと一緒に闘技場をルーサーは出ていった。

フォークステット

ホテルの最上階ではテットがクリスを捕まえて怒りをぶつけている。

「又キャンセルだ！これで何回目だ。好きな学問だけは寝ないでもやるくせに、やらなきゃいけないことはここ二年間、一切やってない！一体どうなってやがる！歳をとればとるほど馬鹿になってやがるぜ！」

積み上がったトランクを前にして腕組をしたままテットは突っ立っている。

「反抗期なんだよ」

小さなトランクをクローゼットに運びながら苦笑してクリスは答える。

「今頃か！今が思春期か！」
と吐き捨てるようにテット。

クリスは一番大きなトランクを前に中身を空けるかちよつと悩む。
止めて置こう。中身はルーサーの嫌い服ばかりである。

「彼は良くやってきたよ。僕等の言うことは全部こなしてきたじゃないか。そうだな、原因は評議会が延びたせいだろう。テットだって評議会が延びていなければそんなに腹が立たないだろう」

期待が大きかっただけに評議会が開かれないうちはがっかりした。
クリスもこればかりはどうすることも出来ない。

国を出たときは二十歳になったばかりのテットを筆頭に全員十代の

若者だった。

あのまま国に居れば船大工として登録し上級試験を経て処遇の良い地位を得ようとクリスは勉強に励んでいたと思われる。

思い詰めた表情のテットの父親から話を切り出されて、道場に通っていた皆の人生は大きく変わった。

プラテアド一族の外戚であると父親はテットに明かし嘘のような任務をテットに頼み込んだ。

師範代になったばかりのテットは突然降って湧いたような話しに胸躍らせ道場の若者を引きつれ見たことの無い他国へ旅立ったのである。

絶対無二の使命はサガモア王の子供の命を守ること。

テットの祖先のように一旦系譜から外れた人間が

本家に戻るのには難しいが今世紀は才能と実力が物を言い、

ルーサーと共にガイネスを後にした男達の願いは未来永劫にまで約束される地位にある。

ガイネス国に戻りたいという気持ちはあるがテット違いクリスはプラテアドの一族とは何の係わり合いも無い。

ガイネスの一般民は百年前の手工芸の世界が続いているセデル国では少数になった徒弟制度も当たり前である。

そもそも娯楽と呼べる施設は無い。

世界中衛星で会話し航空機で行き来し隣国が近く感じられる近代国家だというのに

ガイネスの通信網は百年前と同レベル。

近代通信機器や航空機は軍隊のみが使用し、

民間人の移動は最近になって復旧した電気自転車だというお粗末さ。石工が石を切り出し木の枠組みで建造物が出来上がる。

生活に電子機器が不可欠なセデルと電子機器をまったく信用していないガイアス国民には

百年の文明の開きは酷すぎる。

クリスも車の免許を取り車体の整備も免許を取得しセデル国に放られても食っていくだけの技術は身につけたがこれはガイネスでは役に立たない。ガイネスは車社会ではなく自転車社会なのである。

故郷に帰りたくもあれば帰りたくもない、故郷で育った年数よりも他国で過ごした年数が上回って離れすぎた故郷を思い出す日々は確実に減っている。

小脇に抱えた手帳を指で弾き口を結んで怒りを示す。

「そうかもしれない。だがな最後の詰めはしっかりとしていなくてはならぬ。最後に投げるとは言語道断やるべきことはまだあるのだぞ」母親のように接するクリスが悪いとばかりに顔を睨みつける。甘やかせやがってと顔で言う。

サガモア王は王に就任した日に二十二年後に評議会を開くと満場一致で決めている。

各部族それを目標に幼子の優劣を見極めこの子ならと教育をし育てていたのに裕福な部族の子供がその知識を身につけていないのか、身につけていても年齢が達していないのかは定かではないが有無を言わずに来年に持ち越されている。

ガイネス国を出てから暮らしが蘇って来ては消える国の未来を荷うためといわれてきたが、その未来が本当にやってくるのかガイネス以外の国々は国民が決起し国を変えようとしているそれを目前に見ていると小さな個人の努力で知識を詰め込んだとて国を動かす力など到底出来ない。

テットの怒りなど慣れたものだ。いつもテットはルーサーの居ない所では愚痴っている。

「教授の評価が悪かったのか？何処か身体の調子でも悪かったかな。俺達は男所帯だ少しはルーサーに気を使わなきゃ彼は繊細なんだ」

優しいクリスは待ちぼうけを喰らったルーサーが可哀相でならない。

不満顔のテットは、宥めようとするクリスに反抗的な視線を送る。

「この俺と手合わせして三回に一回お情けをかけて勝負を譲る奴など繊細な気持ちなど無いわい」

週に三回、運動もかねて道場に通うが師範のテットの腕前はさび付いたのか

成人したかルーサーに勝てなくなった。

「プツ、全敗か。テットも歳だな。わりいわりい本気じゃない！一度他流試合を申し込んでみないか俺達も鍛えないとまずいだろう。」

そうだなレイステンには何箇所か良い道場がある今夜辺り行こうや、あ、女はダメだぜこっちの女は鍛えるって事を知らない腑抜けでふにやふにやだ早くガイネスの女に会いてエ」

女の話が出るとテットは怒りが半分減る。当に嫁を貰う年齢は過ぎている。

「人通りが少ないと思ったら今日はやってないんだな」

公園にはロックイーゼン関連のグッズを売る露天が少ない。

「何を？」

怖い顔のテットは下界の事には関心が無い。

「ほんとにテットよ、遊びの一つでも覚えて帰ったほうがいいぞ。そんな顔していると女にもてないぜ」

「ルーサーのように目の色を変えろってか？出来るか！」
吐き捨てるように言うテットにクリスは笑いをこらえた。

テットが女性歌手やモデルに夢中になっている姿は想像できない。なのでいつか・・今夜にでもテットのファイル置き場に美しい女性が満載の雑誌を置いて観察してみるのも面白い。

「お前、ガキのようなことをしたらただじゃ置かないからな。あの闘技場に放り込んでやる」

テットはクリスが何を考えたの想像がついたらしい。

「え、なんで俺がああ競技場のことを考えたのか解ったんだ？すごいよなこの国は何処へ行ってもロックイーゼンの話をすれば友達になれる。俺らの国にも競技場が一個は欲しいよな」と誤魔化す。

テットは無駄に勘が鋭い。

実際にロックイーゼンと言う競技が国にあればと思う

世間からは軍事大国との評があるガイネスは軍備に関してはまったく諸国と引けはとらない。

というのも国民のから搾り取った税金を全て軍備に当てている現実がある。

ガイネス民は大虐殺の記憶を忘れずガイネスに生まれたからには自分の身は自分で守り小さな力でも二つ以上ならば兵士一人分の働きをする・・・がスローガンで

歩き始めた赤ん坊から来るべき日を想定して身体を鍛えるのである。一年の半分は働き後の半分はスポーツにかこつけて軍事訓練を行なうのがガイネス流だ。

武道は必須、幼い子供達が集められた保育機関では敵の襲撃にたしでの行動規範が叩き込まれる。

幼い子供にまで隊列を組み移動する習慣を教え込むガイネスは異常だと思うが歴史から学び教訓とし実践して続いているのはよいことだとクリスと思う。

レイステン市の通りを歩く若者見るたび

クリスが彼らを頼りないと感じるのはガイネス国の実情を知ってい

るからである。

それに絶対の自信を持ってガイネスの国民のほうに運動能力が勝っているしもっと面白い盛り上がりるレースが楽しめるのではと思っ
てしまう。

ミリーの企み

ダンジエルマイアはおっとりして勝気な性格だが、失敗したことは教訓としてしっかりと分析し同じ轍を踏まないよう回避する努力も惜しまない。

試合が終わればTVに放送されなかった映像を呼び出し繰り返し気になる動きチェックする。

特に気に入っているのはのアネルの映像。

マイアの理想とする身体の使い方がそこにある。

状況に応じて走り飛び跳ねる。気負いもなく当然のように着地し優雅にしなやかに目標物に到着する。

障害物との間には見えない空気の層が一定の距離で保たれる。

ミーティングルームのフロアーには席を一つ開けてミルレンブランドが座っている。

ミリーも研究熱心だとチラリと見えた映像を見てマイアは思う。

が、ミリーが熱心に見ているのは同じ映像でも個々の選手のくせ。

ジルは踏み切りのときに腕が開くこれは使えそうだ。

ミリーマキは大柄な割には小回りが利くがその身体の大きさを使い切れていないように見える。・他の選手との接触を嫌っているのかも。・それって使える？

ラッシは落下の時に大げさに手を回しすぎる。たぶんこれはTVを意識してのこと。

ラッシと同じに飛ぶとミリーへ注目度は低いかも、いや使える。考えを変えればいい。彼のそばで無駄に動かずに居れば勝手にカメラが激しい動きの選手を写す。OK。

映像を見ながらカメラの位置を調べるのが目的だったが今では仲間

を自分のために利用できないか研究中である。

食事が終わると皆選手はお気に入りのトレーナの元へ行ったり好きな相手とラウンジでおしゃべりを楽しんだりと自由な時間を過ごす。

ラティーフは日頃から優しい言葉をかけてくれるステイブと他の選手も交えて他愛も無い話の中に居る。

話題は地方の選手の生活と都市部のギャップ。

「雲が下に見えるって？信じられないよ四日もかかるのかい君の故郷には」

「違うわバッファローまでよ。またそこから歩くの。そんなに驚かなくてもいいわあなたをそこへ連れて行くのなんて思わないから。もう帰らないのよ誰も居ないの。皆居なくなつたのよ」

みな驚きにラティーフはびびる、特にステイブは驚いている。

「そうかそうだよね山暮らしは不便なものな」と、暮らしたことは無いが言ってみる。

「そんな高地でトレーニングできたらいいだろうな」
高地トレーニングは筋肉も含めて感覚の全てを研ぎ澄ましてくれそうだ。

「五千メートルクラスの山の上だぜ。きついだろう。酸素が五分の一か？倒れるなこりゃ」
行った事も無い山を想像している。

雑誌を読んでいたマイリーが笑う。

「あのな酸素濃度は標高五千では半分かな。違うのは気圧。酸素の摂取量で高山病になるんだ」

ステイブが聞く。

「アネルはならないんだらう?」

そんなところに住んでいたのなら高山病などなるわけが無い。

「解らないわそれって下りてもなるの?」

山を離れて数年経つ今は心も身体も街に慣れ親しんでいると感じている。

誰にでもウィンクするコーヌがアネルとステイブにもウィンクしてちよつかいをかける。

「高地で育ってるって事は順応してることだからアネルはまったく問題ないね」

アネルも笑顔で答える。

コーヌのウィンクにやきもちを焼いたヴィセンヌが

大きな声でコーヌのファッションセンスにいちやもんをつけて騒ぎ始めると、

かねてから考えていた言葉を小声でアネルはステイブに囁いた。

「ね、今週末最後のプラネタリウムに行かない?」

プラネタリウムは友達同士で行くのも良いがカップルで行くともっと親密になれる。

「あ、いいよ」

一拍置いてよい返事が返ってきた。

その小さな間が気になる。

「誰かと行く予定があった?」

振られるのは早いほうが良い。

「無いよ」

即答での返事につこりと笑うアネル。

「それじゃ待ち合わせ場所は星の王子様で」
プラネタリウムの前の彫像である。

「楽しみだね」と、ステイプ。

「ええ」

嬉しくなってアネルが答えるとアネルの笑顔に気がついたリーフが
やっかんで口を挟んできた。

「楽しそうな相談だね。で、どんな計画？休みにどこかのチームと
合流して特訓をするんだろう？僕もその話聞いたんだ乗っけてくれ
よ」

ずっと気になっていたからひそひそ話しは皆この話題だと思ってい
る。

「おい、そんな計画何処で立ち上がったんだ？」
とコーヌ。

「この間話が出たんだ。スパでゆっくりしようかって、そうしたら
話が進んじやって候補がロッククライマーの聖地バルローとか厳
しい場所ばかり皆言うからまとまらなくてさ。決まった訳じゃない
のさ」
とマイリー。

「決まったら連絡入れてくれ。あっと話が流れても連絡をくれ。頼
むぜ」とリーフ。

話の関係者を見つけて一安心する。

ミーティングルームの前ではミリーが通りがかりのアレックスに声をかけられている。

アレックスは口数は少ないが芯のしっかりした女性である。

「ミリー、あなたに一言言っておきたいことがあるの」

「ハアイ。どうしたの」

いつも笑顔が少ないわねと微笑んでみせる。

「マークにちょっかい出すのは止めてね。迷惑だから、彼が自分の口で言えないから私が変わりに言うわ」

アレックスはミリーが自分の魅力を振りまいて

あっちこっちと選手の気持ちを乱しているのを知っている。

「アラ、あなた達公認なんですもの心配はいらないわ」

それにマークになんて興味ないの・・・とまでは言わない本命はあなたよアレックス、あなたの心をかき乱したいの・・・とにっこり笑う。

一見冷静沈着に見えるアレックスを精神的に追いつめるにはからめ手が必要とばかりに

みんなの前でマークに近寄っている。

マークとミリーの仲の良い光景が何度か見かけられると噂が立つ、そこがミリーの狙い目。

これで来シーズンフィールドに出たときアレックスの見ている前で小声でマークに話しかければOK。

「外の彼氏が居るんでしょう。寂しいのは解るけど皆の迷惑も考え
てね」

ミリーが原因で喧嘩別れしたカップルの噂を聞いている。

「別れたの」

としんみりしてミリーは言う。

ミリーと整形外科医の関係は続いているが表向きは別れた事になっている。観察委員会からのイエローカードが彼に送られてきた、（赤いカードは家宅捜査が入る）それも想定内の計画。

ミリーの意外な返事に表情を少し和らげ同情心を示してアレックスは去った。

整形外科医の通帳残高がどれだけ増えたかミリーにはわからないが彼の計画通りに進んでいるから相当な大金を二人は手に入れている。

ダンジェルマイア

「どうしたの元気がないわね」

マイアがタンクトップ姿で話しかける。

どんなに暑くても首まで有る薄手のインナーを一枚必ず身につけているが

今日はちよつと事情が違う。

ロックイーズンの試合が終り選手達は暇になるどころかしっかりと個人強化日程が組まれて

好む好まざるを無視してトレーナーの指示を受けなければならない。ラティーフはマイアと同じトレーナーになったのはよいがトレーナーは器具を使ったトレーニングをメニューのほとんどに入れて非力なアネルにとっては辛い。

「そんなことないわとつても元気よ」無理して笑顔を作る。

バーベルを上げるの嫌いだけどバーベルはスティープを盗ったりしない。

「聞いたわよ。プラネタリウムの約束すっぱかされたんですって」
マイアは上腕三等筋を鍛えている

約束を反故にされる・・・ことは本人にとっては辛いことだが他人から見れば興味の対称になる。

台に片手を置き視線を一定にして鍛えている筋肉を意識しダンベルを挙げて下げてを繰り返す。

「それはいいの」

トレーナーのクールが正しく動作を繰り返しているかチェックしながら運動器具の間を歩いている。

「良くないわよ先に約束したのはこっちよ」
クルールの姿が器具のシルエットの中に隠れる。息を吐きながら話
す。

「悪いって謝っていたわ、だからそのことはもういいの」
アネルは手を止めて床の汗染みを見つめた。

「じゃなんでそんなに落ち込んでいるの？」
自然と言葉に力が入る。

「私って変？」
と、唐突に聞く。

「何がよ、何を言われたのよ言って」
とダンベルを持つ手をかえる。

「うん・・・」
トレーナーのみ回りを気にしていないアネルは曲げた腕をだらりと
伸ばし答える。

「あのね、ステイプがごめんって謝ったから、許してあげるから
結婚してって言ったの。そしたら君は頭が変わって。半分冗談だっ
たけど半分本気だったのステイプだったら優しくて素敵だからい
いなって。そのときの彼の目は・・・まったくの他人を見る目つきだ
ったわ。なぜあんなことを言ったのかしら」
と夢でも見ていたような口調である。

「ステイプがあなたとの距離を縮めたからよ」
プラネタリウムと聞いてデートの申し込みだと気がつかなかったと

は言わせない。

アネルに興味も無いくせにデートの約束までしてすっぱかし笑い者にしたステイプに無性にマイアーは腹が立つ。

「私に話して気持ち少しは収まるかしら。私でよければ食後にでもお部屋で聞きたいわ」

勝気なマイアーはこの施設の中では唯一の友人だと思っているアネルが

傷つき落ち込んでいるの見てられない。

「そんな・・・そうね聞いてもらえると気持ち楽になるかも」

マイアーの申し出は嬉しかった。

選手は越えられない壁にぶち当たると心理療法士のドアを叩く。

トレーニングルームから出ると別メニューをこなしていたミリーにばったり出会った。

ミリーはこれから自主トレで運動器具を使ってトレーニングを始めるつもりであるおまけに筋肉至上主義のクルールはミリーを気にいって熱心にアドヴァイスをくれるのだ。

「あら残らないの。時間外のほうが特別な話が聞けるわよ」

とアネルマイアーのどちらにとも取れる形で話しかける。

「あたし達の身体には十分な練習だったわ。又後でねミリー」

近寄りがたい美しい顔をミリーを見下してマイアーが笑う。

いったい何組みのカップルを別れさせれば気が済むの・・・とマイアーの目が問いかける。

ミリーはこの挑戦的なマイアーが大嫌いだ。

なんと言っても神々しいばかりに美しいなんてミリーには許せない。今もマイアーに見据えられて軽口の一つも叩き返せなかった。

この世で殺したいほど憎たらしい人間が居るとすれば後姿のダンジ

エルマイアー。

「アネルまだ落ち込んでいるのね。悪い事をしたわ」

今回は故意に仕掛けたつもりはなかった。

「何をしたんだい？」

クルールが頭板状筋から頭長筋のはり具合を見ている。

「こういうのをなんて言うのかしら早く言えば横取りかな、そんな気はなかったのに。悪いのは気持ちが変わったステイブなのに」

「三角関係かい。良くあることさ」

「ぜんぜん、違うわ。だって私ステイブが好きじゃないもの」
マイアーの彼氏だったら落としがいもあるが偶然そばにいたステイブを最後だと言うプラネタリウムに誘った、時間はラティーフとの約束よりも早い時間に。

待ち合わせ場所に少し早めに着ていたラティーフがミリとステイブが仲良く出てきた所を見てしまった。

「横突間筋が弱いな。多裂筋もだな。持久力と平行してこれは鍛えるべきだな」

「それって必要事項に書いておくべきことかしら」

「いや特別弱いわけじゃない、背骨は頸神経、胸神経、脊髄神経が集まっている場所だ鍛えて置いて損はない」

「そうね」

クルールは真っ直ぐに通った背骨を守るように

背骨よりも四センチは高い美しい盛り上がりの腸肋筋を撫でている。

「今日来ていた人の中で誰が一番素晴らしい筋肉だった？」

毎回思うがこんなに魅力的な女性がそばに居るのにまったく顔も見ないで会話を続ける男性も珍しい。

「ダメなのはいたけどね。そもそもここに来るのはイマイチの筋肉の奴が来るんだ。んんん一人だけ細胞レベルで調べたい人間が居た

けどね。合わないんだよね筋力と跳躍力やら・・僕の集めた数値の範囲に入らない筋肉があるんだね」

「じゃ、一番良くない筋肉な人って誰よ」

「わずかな数値の差だよ。突出していおるわけじゃないんだ・・」
「そっさいながらクルールは片手分の名前を上げて見せた。」

ラウンジ

ラウンジでは一冊の雑誌を前に感極まった声やため息が漏れている。ドアを蹴飛ばしてPC片手にノートンが飛び込んで来て雑誌の横に並べる。

雑誌の掲載は二十位までだがPC画面には選手全員の順位がある。

「明日の朝発売なんだろう？本当の順位かよ」と嬉しそうな声でクロンク。

「へっへっへっ。残念だなこのレイステンでは明日の朝だがトマホーク市ではもう発売されているんだ」

PC画面の順位の雑誌は手元には無い。トマホーク限定の雑誌らしい。

「わかった。日付変更線だな」

「そういうこと。トマホーク市の奴の書き込みさ」

ノートンがPCの前から押しつけられ次から次にその場に居た人間が画面を覗いては番号を確かめる。

「へー、以外だな・トップテンまでは納得できるけど二十位までは何処で選択したのかわからないぞ」

中央テーブルに集まった三十人が雑誌とPC画面を見終わると全体に騒がしい華やいだ雰囲気になる。

「誰を見ているんだ」

指先に有る名前を見て、

「うっっん、彼か」

名前はナルバントグル。

「噂じゃ、今度の美しい筋肉の一位に選ばれるとか言っていたな」
雑誌であろうと自分の名前が載るのは気分がよい。

「クールル情報か？あいつあの雑誌の監修をしているらしいな」
筋肉と聞いたらクールルと条件反射のように名前が出る。

「俺よクールルのあの目つきが嫌なんだよ人間としてみてない気がしてさ」

皆が見終わって放り出された雑誌をめくりながらもう一度確かめる。
ある・俺の名前だ。

「いつか筋肉を取り出して顕微鏡で見られるかもしれないぞ」
しかめっ面をしながらいう。隣の女性がうなずく。ありえる話だと。

「マジ、似たような事言ってた」
真向かいの男性は何度もミリールとクールルの話をそばで聞いている。

「実際に研究施設じゃアスリートに電極貼り付けて走らせたり飛ばせたりして調べているんだろう？」

半分笑いながら憶測で言う。雑誌の受け売りだ。

真ん中にいた男が立って左肩を少し後ろにずらし目を右斜めにやっ
てポーズをとる。

「君は半腱様筋が強いね。しかしそれを活かさきれていないようだ」

中央テーブルの周りだけでなく窓際の席に座っている人間にもその
真似は伝わり

ラウンジ全体がどっと笑う。

「おかつしい・・・似てるよ。悪いがクルールだけが筋肉狂だと思っ
なよ。何とその雑誌の購置数たるや
スポーツ誌のトップをいつてるんだぜ。だからよ。この二十位まで
の選手層にはマッスルマニアの票が集まっていると考えていい」
涙眼になりながら言う。

真似をした男に親指を立てて賞賛する。ナイス。

「え！一位と十一位が五十万票差ってことは・・・ほう！ファンの五
人に一人は筋肉フェチ？だな」
各国の票だけどこのレイステン市に居るマッスル狂の数を想像して
顔をしかめる。

「そうなるね」くっくくくくくと真似がつぼにはまって笑が止ま
らない。

「まともなファンが選ばれることを願って乾杯！」
お調子者が水の入ったグラスを高々と上げる。
ノリノリのよい十人が中央テーブルを囲んで立ち上がり乾杯を叫ぶ。

「嫌だクルールと同じレベルのファンが来るの？」
と女子代表のミリーの黄色い声。

「最悪」
なぜか隣に居たミリーマキも同調する。

「いないとは限らないな、以前にも変質狂といったら怒られるが、
何人が問題を起したファンはいるがね」
変質狂に当たったことは無いが過去事例で騒動が起きて禁止規約が
増えたことは確かである。

「運だよ。よいファンかどうかはわからないが有名税だと思って一日楽しく過ごしてくれたまえ」

二十一位だった男はしたり顔で真面目に思索している顔の隣の男を見る。

「私その手のファンレターたくさん貰ってるから確率高いわね」とはミリー。

「そうとも言えないね。ここを読めよ。十位以下は皆素晴らしい肉体の持ち主ばかりである。ファンはこの素晴らしい身体を持った選手達の活躍を願って票を入れたようだ、とある。」

「それじゃクールレベルは十位以下に集まっているの」魅力的な笑顔を隣の男性に向ける。

「この解説だとそうなるね」
安心して十以下の選手の名前を見る、一人まったく関係無さそうな選手も居るがこの場合どうでもよい。

話の流れを長椅子の片隅で聞いていたラティーフは青ざめた。十八位に自分の名前がある。

「ねえ、そんなファンと一日一緒に過ごせないわ」

会話は顔を見てするもので腕や足、背中を向けてなど出来ない。

「大丈夫よ選ばれた二十人には指導員がついてレクチャーしてくれるのよ。解らないことがあったら聞いて二度感謝祭には出ているから」

小声でとマイアーがうなづく。

テーブルを挟んで正面にはミリーがすねた口調で騒ぐと

取り巻きの男性陣はその笑顔に張り切って我先にと答えている様は

滑稽である。

ファンとの集い

昨夜の雨でレイステン市の空は洗い流されて
乱立するビル群に囲まれた海も白波が立ち対岸の港の船が良く見え
る。

今日も巨大な娯楽施設は花火を打ち上げて開園を宣言する。

青空が広がる眺めの良いホテルの一室では気分の良い朝が訪れてい
た。

ルーサーは浮き浮きした気分でも度々タイを閉めなおし外ではス
カーフに替えたり、
ポケットチーフの色を着と合わせて悩んだりと鏡の前で忙しい。
腕時計を気にしてもう一度全身をチェックすると駆け出すようにし
て部屋を出て行った。

ボタンと締まった扉を二人の男が見ている。

一人は手持ち無沙汰のクリス。

クリスが書棚からファイルを取り出してパラパラとめくり始めると、

「何か？人員配置に問題でもあるのか？」と湿った声でテット。

ルーサーの去ったクローゼットの収まりきれない服を無理やり戸を
押してクリスの隣にやってきた。

クリスの出したのは巨大娯楽施設の平面図、最後のページはたくさ
んのアトラクションの入り口にチェックが入っている。

今日のガードは八人を配置してある。

「別に、車を使わないようだから俺も行ってみようかと思っているだけだ」

クリスは主に車の運転を担当している。

昨日レイステンまで走ってきて今日はホテルの室内勤務だ。

「珍しいな。あんな機械のおもちゃなんぞ乗りたくないって言うていたじゃないか。まあ国に帰ったら乗れないからな。乗っておくのも話しの種にはなる」

眼下の公園の向こう側にカラフルな色調の建物がメルヘンチックに並んでいる。

お前も行ってもいいぞちょっとの間目をつぶってやるとテットがウインクをする。

テットのウインクを受けて肩をすくめる。

「見たいのはルーサーの顔だ。あいつどんな顔をしてスターと会ったろう?」

四十に届くというのに大型遊園地になどクリスは興味は無い。

「なんだそんなことか。いい年してあんなものに傾倒するとはな」
毒されている・・・とテットは顔をしかめてみせる。

「子供らしくて可愛いじゃないか。賢いだけじゃなくて感動する心も持ってるんだぜ」

テットが書き込んだメモを読みこれらのアトラクションに長時間立つて並ぶだろうかと首を傾げる。

「感動? あいつは脳みその使いすぎでおかしくなったんだ。それと

も馬鹿を演じているだけかもしれない、賢い奴は何を考えているのか解らないからな」

テットの前には国から送られてきた書類、大臣クラスの要人のスケジュールをルーサーの予定表に書き込む。

「テットはルーサーに敵しすぎるぞ・・・」

クリスがファイルを閉じてルーサーを待ち伏せできる場所を頭に叩き込むとテットの好奇心に満ちた目を無視して目立たない服装に着替えた。

といつても娯楽施設の中でグレーのスーツやサングラスで動き回るわけではない。

大きな花柄の蛍光色のシャツと水色のハーフパンツで決めて、おどけながら部屋を出て行くとテットもつられて笑顔になる。

大感謝祭と銘打った割には観客は無し。ルーサーが常宿にしているホテルから離れて三軒目のホテル、オーケーシュストグループ出資の派手で豪華なつくりのスカイラウンジが指定された場所である。

当日、ロッキューゼンの選手一人に一人の記者が付き添い

待ち合わせの場所に係員に誘導されたロッキューゼンファンが

当選したチケットを手に緊張しながらやってくるとホテルのレストランの前で選手と握手して記念撮影。撮影が終わると記者は二三質問をして次の選手のもとへ。

係員の説明を受けていたファンはレストランに入り憧れのスターと昼食。

その後は巨大な娯楽施設で半日、スターとデートが出来るといふ企画である。

ルーサーの順番は最後、緊張の面持ちでレストランの入り口を見つめて居る。

たまたま入れたあの一枚の紙切れが誰かの手の中に納まりルーサーが選ばれている。

感謝祭の企画は雑誌とのタイアップでロッキューゼンのピックアップされたスター特集号に掲載される。

もちろん選手達は競技中のように顔にペイントは無い。

普段の顔で現われるが掲載される顔にはしっかりとペイントの模様がいかにもペイントを付けたままファンとデートをしたかのように加工される。

選ばれたファンもこのデートの応募条件の中に守秘義務の誓約書にサインしてこの場所に来ている。

選手が遠征に行く道中着ているスーツに身を包んだアネルが係員に案内されて入ってくる

窓際の席から素早くルーサーは立ち上がり、ロッキューゼンのスターアネルの元へ近づいていった。

ルーサーを探していた係員は極上の微笑を浮かべ会釈をして一歩下がる。

ロッキューゼンランキング読者が選んだ上位二十人は

特別室でファンとの接し方をレクチャーされ、アネルは教えられた言葉を百回練習し口から出す事が出来た。出だしは上々である。

「あなたが抽選でめでたく当たられた方ですか。おめでとうございます。私がベルデのアネルです。競技用のお化粧をしていないのがっかりされたかもしれませんが」

ここですっかりと笑う。

「今日は一日一緒に過ごせることをうれしく思います」と握手のつもりで手を差し出す。

「僕はアルヴァー・ルーサー・フォルストロム。ルーサーと呼んでください。ミズ・アネル、食事はお済みですかよろしければ少しおしゃべりをしながら軽食でも如何ですか」

アネルの後からすぐに来た記者が二人の前に回りこみスマイルといつて一枚写真を撮って消えた。

たかれたフラッシュの光が目に入り何処を見てもアネルははっきりしない。

確か左側に立っていた・・左に頭を傾けて笑顔を作る。

ファンをがっかりさせてはいけないとの配慮だ。

「喜んで。朝から緊張していて何も食べてませんの。去年はベスト選手に選ばれなかったので、初めての経験で・・」

自然に、フレンドリーに、気さくな印象をもたれるように・・

記者を避けて右側にたったルーサーではなく

ボーイに差し伸べたアネルの手がボーイの服の裾を掴みさりげなく払われる。

右側から軽くアネルの腕を取り自分の腕に絡ませる。

アネルの腕に羽根が生えて飛んでしまいそうできつく握り締めたい衝動をルーサーは押さえ込む。

「座ってから話の続きを聞きましょうか」

ルーサーに促されて改めて違う人間に愛想を振りまいていたことに気がついた。

「そうですね」顔から火が出そうである。

ルーサーはアネルの腕を軽く握り窓際の席へ。

嫌だわ変に思われなかったかしら・・・とパンツスーツと同じ藤色のパンプスをテーブルの脚に打ち付ける。

アネルが椅子に座ると同時にルーサーが顔を近づけて、「大丈夫ですか？」と尋ねる。

テーブルの足が折れそうな大きな音がしたのだ。

「ええ」何が大丈夫なのかわからないまま返事をする。

当たったパンプスの先はへこんでいるが足先は衝撃だけで痛くもなんとも無い。

隣のテーブルの客が二人を見ているのでアネルはこの二人のうちどちらかが大きな音を立てたと思っている。

まず両手を膝の上においてナプキンを広げる・・・膝から挙げた手がテーブルの端に引っかかる。

マイアの言った様に振舞っているのに、流れるように・・・できない。

糸つきのマリオネットのように小首を傾げて窓の外の景色を楽しむ風を装う。

おもむろにファンの顔を見て微笑む。

と・・・ルーサーはメニューを広げてアネルを見ていなかった。

アネルは緊張しすぎて何を食べたいか聞かれても笑顔を作りすぎて答えられない。

ルーサーはメニューを見ながら何処を見ているか解らないアネルの瞳を覗き込み暖かな色合いに満足している。

メニューを閉じると給仕係が丁寧にオーダーを聞き取って去った。

柔らかい日差しの中、ガラス越しに見える青い空のように曇りの無い笑顔がルーサーをうっとりさせる。

天気が始まって料理の好き嫌い、アネルの近況ととりとめの無い話が二人の間で交わされ

小一時間をレストランで過ごしファン待望の娯楽施設でのデートである。

記者はとっくにトップのスター選手を追いかけてレストランにいなかったし

レストランの一部の従業員以外はイベントとして使われたこの場所にはロッキューゼンの選手は一人残らず出払ってしまい、いつものレストランに戻り仕事を始めている。

窓際の二人が席を立ってもアネルに注意を払う客は居ない。
暇な給仕係がルーサーの美貌をさりげなく見て楽しんでいる。

ファンとの集いの後

ドアをノックする音が聞こえる。

ベッドに突っ伏して持ち上がらない頭でラティーフは考えた。

マイアーが訪ねてきたと解ったが体が鉛のように重くて動けない。動きたくない。

「いいわよ」

とアネルの返事が聞こえたかは定かではないがいつもと変わらないマイアーがドアから顔を覗かせる。

「どうしたの？わかったわ！ファンの近親者がいたのね当選を自慢するとね。親や兄弟従兄弟やうんと引き連れてくるのよ。ちゃんと書類で一人って書いてあるのにアトラクションの前で待機させてるんだからガードの人が大変みたい。人ごみの中を逃げ回るので嫌ね。レースのほつがずっと楽だわ。ねえ疲れているところ申し訳ないんだけど、一つ聞いてもいいかな」

初めてファンと接したのアネルに同情しながらも、思いつた動きがあつて是非ともアネルの意見が聞きたいマイアーである。

マイアーの元気な声に顔を上げられずに、

「一人」

とだけ答える。

高い天井を見上げてうつすらと残る手形を見る。

「部屋じゃやっぱりダメよね。スポットがあると緊張感に欠けるよね。何？」

マイアーがベッドで跳ねてつけた跡である。

重たい瞼を開けて、

「フアンの方は一人しかいなかったの」

何とか頭を持ち上げようと試みる。

目を閉じてやるだけのことはやったと心の中で言う。皆のようにはうまく出来なかったけど。

受け答えは丁寧にはつきりと、答えられないことは笑って誤魔化し、思想的なことや政治的なことは口にしなかった。

他の選手の身体の調子のこと口にしなかったと思う。

あと何を注意されていたっけ・・・。

大事なフアンは子供ではなく青年だった。ここにいるマイアーとならお似合いの一对になりそうな人・・・
とにかくやり終えた。

見知らぬ人と半日一緒に過ごすのがこんなにも疲れることなのか、
まだ身体中が熱を持ったように熱い。

「うっそー。それでその疲れよう？どうしたの？私とミリーが教えたことが間違いだっただの。一人だけ信じられないわ。そんなに気をかわせる人だったの。リラックスして行きなさいって最後に言ったでしょう。ほんともうミリーの脅かしは効き過ぎよね。ガードの人がいるからさらわれたりしないのに、あの遊技場の警備員が厳戒態勢を強いているのよ。どこもかしこもカメラのリレーで追いかけてるわ。それにあなたが居なくなったら警備会社の面目丸つぶれよ。そんなに緊張すること無かったのにー」

ココロと笑い転げるマイアーにつられて強張った顔に引きつった笑顔を作る。

「そうなんだけど。パンプスが・合わなかったのかも。歩くと何か変なのよね」
靴のせいにしてみたけれどラテーフには疲れの原因がルーサーの優雅なしぐさであったと解っている。

最初二人並んで歩く時に僅かだが後ろを歩くので背筋フェチとか下腿三頭筋フェチがラテーフの頭に浮かび選んだ服がパンツスーツで顔以外は肌の露出が極めて少なくファンをがっかりさせたと申し訳なく思っている。

少しぐらいはファン心理を組んで腕や足の筋肉くらい見せて満足させなくちゃと。

暫らくするとミリーの言う選手の身体の筋肉に触りたいだけの変質狂ではないらしいとわかった。

が・椅子から立ち上がるにも手を添えられる。

ポップコーンを食べるにも、コーンのバケットに興味の良いハンカチがお手拭に登場。

階段を上がるにもルーサーの手が腰にさりげなく回り補助をする。階段が終わると添えられた手はすつと外される。

そんなエスコートなどされたことの無いラテーフは歩き出しの最初の一步から調子がずれてギクシャクして一日を終えている。

「原因は靴ね。大量生産品だからそれで半日動き回るのは辛いわね。ねっ見てるだけでいいの。お願い」

広大な施設の中をファンの子供の手を引いて子供の親や親戚から逃げて楽しいアトラクションで子供のご機嫌を伺い夕食まで入れて七時間も走り回っていたとは思えないくらい明るい笑顔のマイアーである。

「少し元気になったわ。行きましょ」
「アネルはごきもかしこも顔までも要らぬ緊張で強張って重い。」

半日デート・・・後

ロッキューゼンファン感謝祭の特集記事が載ったのは一カ月後
一番人気のスター選手が表紙を飾り美しく強い競技者達と見出しが
続き

ページをめくればスター選手の競技中の美しいアングルでとらえた
ドアップのピンナップスター。

改めて知る必要もないのに選手名とロッキューゼンに入る前の競技
暦が傍らに表示してある。

ルーサーは窓際の席に立つたままアネルと半日一緒だった遊戯施設
を背に雑誌を開いている。

「ラティーフ・セヴェール・ラティーフ、いい名前だ」

とアネルの本名を口する。二人だけに共通する秘密の名前のように
ルーサーには響く。

少し離れて暇なクリスがルーサーと同じ雑誌を読んでいる。

珍しく本を買って来いといったルーサーがどの記事を読むのか興味
津々で

同じものを二冊買ってカウンターの影で広げて見ている。

ルーサーのしているページをクリスは隅から隅まで目を通したがル
ーサーがつぶやいた名前は載っていない。

テットがルーサーの飲み物をつくりながらクリスの雑誌をちらちら
一緒に見ている。

「なあ、ラティーフ・セヴェールって何処に載っている？」とクリ
ス。

「ん？何でそんな名前をお前が気にする」

妙にテットの言い回しが気になりクリスがテットの目を覗き込む、

テットは小さく笑いながら、あごで雑誌を示した。

「反抗期少年に頼まれたんだ。今朝教えたばかりだ。で、お前の好みの女は？国に帰れば賭け事なんぞ出来ないからな今のうちに頭を墮落させておけ」

テットはロックイーゼン警備会社からコネを使ってアネルの本名を調べ上げている。

クリスの開けたページにはミルレンブランドが微笑んでいる。

テットの調べた女の本名がコケティッシュな女だと知ると

「うっくん・・・俺の好みじゃないな」と

ページをめくり最後のページで地味な紹介で終わっているアネルを見て

「俺なら顔は良くわからんが雰囲気でこの選手だな」とつぶやきすくにもとのページに。

アネルを紹介したページには写りの悪いルーサーとアネルも小さく掲載されているのには気がつかない。

テットがお茶を出して戻ってきた。

「個性的で可愛いな。このミリイって選手は地方で人気があるんだ。ちょっと顔の作りがアンバランスなのが魅力なんだそうなの」

「そうなのか。じゃこの選手は」

と、開けたページにはロサのレフティハルメスとアマリジョのダン

ジェルマイアー。

「クールビューティと・女神様だ、この完璧な美しさ。この世に女神は光臨してきたようだな」

クリスに異論は無いがあまりにも二人は美しすぎて現実からかけ離れすぎている。

付箋代わりに左手を挟んでいたページをめくろうと機会を窺っていたが

テットがキッチンを離れる前にクリスは仕事に出かける時間になる。車のハンドルを握るとクリスは雑誌のことなどすぐに忘れてしまった。

クリスの雑誌は応接間のルーサーの雑誌と一緒にテットにダスターに投げ込まれた。

「同じものを買わなくてもいいだろうに。まったく何を考えているのやら」

ため息をついたテットの心も、終わりの無い流浪の日々に閉塞感を感じ、

言わなくても良い批判的な言葉が口に出る。

広いホテルの部屋の窓から広がる空の向こうには懐かしい顔が待っている。ルーサーとのホテル暮らしは何年たっても性に合わず、不便で退屈な国の生活に戻りたい気持ちは高まっている。

テットがプラテアドの故郷を思い出すと必ずセットで出てくるのはサガモア王。

毎回王の使いがガイネスの要人の細かいスケジュールを送ってきて、数学、統計学、天文学、社会学、哲学、心理学、の高名な教授との授業を減らし、要人らの下調べした情報も取り入れて会見の順位を

つけ、ルーサーのスケジュール調整を始める。

この下準備をしておけばルーサーが帰郷しなんならかなの要職についた時スムーズに仕事が行きやすいとサガモア王は思っているらしい。

テットの見解だとサガモア王の権力は効力を失っているように思える。所有している土地は七千メートル級の岩だらけの山とプラテアド半島の一角だけである。

他の一族のように大きな産業施設を持っていないと言うことは金を産まない鶏を飼っているようなものだ。

王のバツクには気炎を吐くバラディール將軍がいると聞いているが將軍は政治の表舞台には立たない。

ルーサーのバツクグラウンドを固めるためにはモラドのバラディール將軍が一番なのだがこれはルーサーが嫌っていて話がまとまらな
いでいる。

他の半島の一族は古い産業を維持するのが精一杯で顔も見たことのないルーサーになど援助など出来ないのが現状である。

ルーサーが幼かった頃ガイネスにはプラテアドの人間が二代続けて王座に座るのを喜ばない人間が大勢居たがここ数年事情は大きく変わっている。

七つの半島の長老はガイネスという枠組みから外れて独自の権力を持つことを望み始め

ガイネスが多くは七つ、少なくとも三つに分かれるという選択肢が囁かれる中にある。

ガイネスが分裂すればテット等の帰る場所はなくなる。

昨今金銭を目的にした誘拐も毒殺者や暗殺者という刺客もルーサーが大人になると激減し、

今度は変質者、狂信者がルーサーの周りをうろつくようになり広範囲に警護が必要になってもいるが現代社会のよさは何処にでもカメ

ラが設置してありその映像の死角を補えば少人数で警護が出来るように
うになっている。

刺客に怯える日々は消えたが今度は国が分裂する不安に苛まれテッ
トは沈み込む日が多くなっている。

フォーカステット

格式あるホテルの深夜のエントランス。

昼間はソファアーに座りくつろぐ客も多いが、客の間をきびきびと働く従業員の姿も無く、照明を落とし主な通路だけにスポットをあて明るくしている。

ドアボーイが礼儀正しく深夜の客を迎え入れ、磨きぬかれた床をこつこつとヒールの音を鳴らして女性が一人入ってきた。

若い女性はフロントにも寄らずエレベーターの前に立った。

フロントのホテルマンが目だけで追って手元の来訪者欄にチェックを入れる、

指定時間より一時間遅れている。

エレベーターが最上階に止まると待ち構えていた男が女性の前に立った。

女性が遅れた理由を言い出す前に男は背中を向けて女性の前を歩き出しドアを開けた。

挨拶ぐらいしたっていいのにとむくれないながら部屋に入ると部屋の中央には夜中なお茶の支度が整っている。

「悪いね、こつちへ着たら夜中だったものでね。明日にはモーニングも食べずに出なきゃならないんだ、書類は読ませてもらったよ学歴は最高だ秘書としては申し分ないね」

部屋には男が一人大きなソファアーにゆったりと座り片手で座るように指示をする。

男の、申し分ないね・・・の後は普通褒め言葉が続く。

褒め言葉が出ないということは何か気に入らないことがあるから。

私の何が気に入らないの？止まった言葉の続きを聞きたい。

「何か問題でも、夜中の勤務が多いとか」と嫌味をちくり。椅子に深く座りすぎて飲み物に手を出せない。

大体夜の十一時に面接を指定するなど常識では考えられないと不満が心の中で爆発する。

最初は昼間の面接だったのにずれ込んでこの時間帯。遅刻したコレットも悪いが高い給料に引かれて受けに来てしまっている。

コレットの場所は泊り客の氏素性のしっかりした金持ちしか利用しない

古いホテルが面接会場ということもあって変なことはないと思っ
ているが、
乗り気だった友人は面接時間帯が変わり断念している。

確かに真夜中にお洒落してホテルに入る姿は怪しい夜の女。
しかも相手は精力の有り余っている中年男性が部屋に一人。

絶対に怪しいとドアが閉まったと同時にバッグの中のスプレー缶を
手の中に隠している。

「夜中には出来るだけ仕事はしないようにしてるよ」

と男は嘘をつく。仕事は人が寝静まった夜が大半だ。

「今は別だけどね」

と笑顔を作る。女性が警戒しているのも承知している。

「身体を動かすことは好きかね」

と足を組み替えて聞く。

「夜ですか？」

書類選考はよかったが面接では黄色信号が灯ったようだと言っ
ては感じていない。

なのでまた似たような言葉を言う。これで面接はおじやんだ。気の
強い女は嫌われる。

「勘違いしないで欲しい。運動だ何か続けているスポーツとかあ
るかね僕は社員には率先して勧めているんだ年に四回は大会にも出
てる。僕じゃなくて社員に出てもらっている。健康になって欲しい
という思いもあるが運動から何かを学び取って欲しい」

男は疲れた様子でこめかみを指でぐりぐりやる。

何かやらないと女と一緒にになって軽口をたたいてしまいそう。今は
偽者社長を演じている。

「それって強制的にやらせるって事？」

形のよい眉毛が上がる。

ワンマン社長の我が儘な方針に賛同すべきか、コレットは多少は目
をつぶることにした。

入社してしまえば断る理由は何とでも作れる。

「僕が社長だからそういうことになる」

テーブルを挟んでコレットの首から肩の肉のつき具合は大した運動
暦は無いとテットは見ている。

「どんな運動をやるの？ジョギング？ウォーキング、山登りとか・

と自分にも出来そうな運動を言ってみる。

このくらいなら許容範囲だろう。ただし一年に一度くらいなら。

テットはにっこり笑う、若い女は慎重で疑り深い。

「挑戦してもらおうスポーツが好きだね。苦しみに立ち向かう姿勢ってのは仕事に応用できる」
愛想笑は得意だ。

じゃ山登りなんかいいわね、
サンドイッチと暖かい飲み物に綺麗な景色なんて最高だわと頭の中で描いて見る。
やれそうかも・・・とコレットが想像しているのがテットには手に取るようにわかる。

「君みたいな女性はトライアスロンとかカッコイイかもしれないね。僕なら武道をすすめる。武道に興味は無いかね」
思わず本音が出る。

写真よりもずっと芯があつて勝気な感じがテットは気にいっている。
変な時間を指定したこっちも悪いが様子見に来たのだろうが
予防線を張って警戒している様は高感度がぐんぐん上がる。

「トライアスロン？武道」
フンと鼻で笑う、
「ごめんなさい運動は嫌いなもの」

世の中には運動に向いている人間と不向きな人間の二種類がいる。
コレットは後者で自分には運動など不要だと思っている。

「そうか残念だね、う・・・ん今日の結果は紹介者を通して連絡しよう。それでいいだろうか。遅くまで付き合わせてすまないね。秘書がいないと色々困ることが多いものでね」

無理強いはずまい。本人からの自発的な衝動で無いと長くは続かないものなのだ。

「ガイの声を聞きたくないの直接知らせてくれるかしら。聞いてもいいかしら私の前に何人面接を受けに来たのかしら」
従兄弟のガイは書類審査で落とされているコレットを面接にまでたどり着かせたらお礼を貰う約束が出来上がっている。仕事が決まれば別代金として請求される。

「君で五人だ九時に空港についてホテルについたのが十時近かった。遅くまでつき合わせてすまないね」

五人・・・ね、五人のうちひとりが選ばれるか全員駄目かどうでもいいわ私の就職は無さそうなもの・・・とさっぱりとコレットは興味を失った。運動すぐらいなら就職出来なくてもよいのである。

「私の携帯電話に直接かけてね」
ガイには会わなかったといっておこう、出費は抑えなきゃ。

「君の父上に知らせなくてもいいのかな」
コレットの父親は市議会議員、顔の広さをちょっとだけみせる。
子供の就職の合否を知りたくない親はいない。

「失礼ね二十歳を超えているのよ」
一人暮らしだつて始めたの・・・とは見知らぬ人間には言う必要など無い。

「今日は来てくれてありがとう。外にいる男にホテルのチケットを貰って帰ってくれ夜遅く出向いてきてくれた迷惑料だ」

コレットがスプレー缶を握り締めながら出て行くとテットは本格的に両手でこめかみを押さえる。

「学問だけの林念仁」とつぶやく、
「今の女か？そんな風には見えないが」

コレットをエレベータの前まで送り届けてクリスが部屋に入ってきた。

「よっ社長」

「馬鹿言ってんじゃねえ、これで最後だからな」

秘書募集なんぞテットとクリスの猿芝居である。

提案者はクリスだが女っ気の無いルーサーの警護に女性を入れようと容姿端麗文武両道を求めているが思うような人間が集まらず募集を繰り返すうちホテルに入る女性を見て

毎夜毎夜高級女性をルーサーが買っていると噂になっている。

堅物と思われるよりはましさとクリスは言うが

テットには国に帰るまでの暇つぶしにしか思えない。

ロッキューゼン

天井から床まである大鏡の前でいつも以上にきちんとテットはタイを結ぶ。

久しぶりに心は浮き立っている。

以前何度も鏡の前で服装をチェックしていたルーサーのことを冷めた目で見たことなど欠片もテットの頭には無い。

一週間前に面接で落とした彼女を駄目もとで食事に誘い、デートの場所はテットの思惑とは違っていて問題にならないくらいわくわくしている。

二十数年ぶりのデートである。

新聞を広げながらテットの様子を盗み見しては新聞を立てて顔を突っ込み思い切りクリスは笑う。

じっくり見ている風を装い新聞をテーブルに広げた時には真面目な顔つきに戻す。

一年又一年とセデル国の滞在期間を延ばされてテットは疲れ果てている。

四十人の部下を率いて落ち着いた風情を装ってはいても部下がいないところではぶつけられない怒りを汚い言葉を吐くことで解消しているのを何度もクリスは見ている。

テットは女性の話題でくつろぐ所を見たことが無い、誰かに義理立てしているのかと思うがそうでもない。

然らばとクリスは考えた。女性と面と向かって話す機会を作ればいいのだ。

一案を出した結果三十二番目の女をテットは気にいった。

「やってみるもんだ・・・」と後ろで扉の閉まる音を聞きながらにんまり笑うクリス。

テットは少しでも若く見えるスーツを選んだつもりだが並ぶちよつとイケテない。

コレットとは十五も歳が離れていて少々気後れしているがあいたい気持ちのほう为上回っている。

デートの場所を変えればいいわとの返事は嬉しかったが
しゃれたレストランでゆっくり会話を楽しみたいが彼女はロッキ
ーゼン狂。

待ち合わせの場所で落ち合い闘技場へ向かったはよいが今日はロ
ッキーゼンクライマックスレース。

闘技場に一步入った途端コレットの表情が一変してレースの予想を
甲高い声で話し出すのには参った。
観客が多くコレットがテットの腕にしがみついているなければ立ち去
ってしまいたい。

コレットの指定した番号の席にテットは座るが周囲はコレットも含
めて全員総立ち。

「最高！！ありがとう特等席だわ見て十二枚のモニターが全部見え
るわ。右下のスタート口はレースが終わると表彰式もやるの！アネ
ル〜私がついてるわーあなたなら絶対勝てる〜」

テットに抱きついてコレットは説明をしたが観客は巨大画像に
自分の好きなスター選手の顔が映るたび名前を連呼するのでコレッ
トの声は掻き消える。

「う、うるさい！黙れ。彼女の声が聞こえないだろう。やめる！耳元で叫ぶな！」

しばしテットはガイネス国のこともルーサーのことも心配事は頭の中から消えている。

甚平サメの口に似た

横に平たいスタート口にスポットライトが当てられるとマイクを持った男が鈴なりの席を見回す。

「さあ今期最後のレースだ皆楽しんでくれ！！」

男の声は明瞭で通りがよい。

「そしてー 最終選考に選ばれたのは・・・ナランハ3、アスル・セレステ3、アスル・マリノ3、ベルデ3、アスル3、アマリジヨ3、ロサ3、ロホ3ー！最終日いずれも残ったのはチームの精鋭たちだ！聞いてくれ。この声援を」

男はマイクを高く掲げて会場の声援を待つ。意味の無い返事に男は満足する。

「そして！ゲームをもっと面白くするために各チームの二位も参戦する！彼らだって馬鹿じゃないあの金色に輝く優勝杯を手にする最後のチャンスでもあるんだ。今期トップのチームのために動き回るかそれとも自分たち、セカンドの位置を持ち上げるために走るかは」

「神のみぞ知るー」と、一拍置いて長セリフ。

「躍動する鍛えられた身体。飛び散る汗！仕掛けられた罠を突破し水の中に空中に危険を顧みずチームのために飛び込むその勇気！誰

一人欠けること許さないゲーム！ロツクイーーゼン！！さあ号砲の後に選手が飛び出すぞ。期待して良いぜ今夜の月は満月！皆で多いに吼えよう！！まずは選手一人ひとりに俺達の熱い心を送ってやるうじゃないか！！」

扇動するアナウンサーの反対側から

蝶ネクタイの男が現われてマイク片手に選手を紹介し始めると観客席は総立ちになり自分の鼻根の選手の名前を連呼する。

両手を挙げ、選手が顔を見せ声援に答えると闘技場全体が熱気に包まれる。

「上手いなこのセリフを考えたのは誰だ。ケルニ？良いじゃないか。最初のつかみは最高だ」

とオーケシユスト。

スタート口の真上にある部屋で窓を全開にして地鳴りのような観客の声を楽しんでいる。

ビルはこの最終戦のために変更したアトラクションの数々が上手く起動するか機器の点滅に気を配る。

製作担当者は予算が足りないと訴えていたがオーナーであるオーケシユストが自分の持っている子会社のスクラップから資材を調達させて出来上がっている。

それに加えて迫力有る映像を撮るために

スカイカメラの台数を増やしホールドや壁にも穴を開けてカメラを埋め込み、

より近くに選手の息使いを感じさせるために落下地点の床にまでもカメラがある。

このレースで何台かのカメラは選手に激突されて使い物にならないだろうとビルは思っているが口には出さない。

カメラとか器具類の損失はすべてTV局持ちだからである。

だが選手の怪我は別だ。

見た目ばかり奇抜に作っても選手に大怪我でも負わせたらと思うと始まってもないのに早く終わってくれと願っている。

嬉しそうに強烈なライトの中浮かび上がる装置を見回しているオーケシユストに比べ

口数が極端に減るビルである。

こっそりビルはドア側に近寄り電気技師を呼び出した。

「ロブ、電源の供給量はまだ余裕はあるか？OK。もうすぐ天井を半分開けるスタートの空砲が聴こえたら明かりを半減してくれ。うん夜間使用のカラーガラスをしようあれなら光源はあまり要らないだろう。そうだ。うん仕方がないんだ。クレーンを使っのての高画質のカメラが増えて。頼むぜ」

観客席を減らしてクレーンを取り付けカメラを乗せたお陰で必要以上電力の消耗が激しい。

最終戦が日曜日の午後でしかも晴れてよかったとビルは感謝した。

レース 1

「いくぜっ」

今ではチームベルデ3のキャプテンを務めるジリアスクの声に答えて、高さ十五メートルのスタート台から勢いをつけて七人は飛び出して行く。

ナランハ3、アスル・セステ3、アスル・マリノ3、ベルデ3、アスル3、アマリジョ3、ロサ3、口ホ3、これに加えてチーム成績二位の同色チームも一緒に出走する。

左右のライトが、スタート地点から飛び出した選手の姿を綺麗に浮かび上がらせると観客席の応援は凄みを増す。

「これをそのまままで伝えられないなんて、もったいないよね」とオーケシユスト。

放映される画像を思い描いて酔っている。

選手がばらばらと水面に吸い込まれ、設置された八つのスクリーンに観客の目が注がれる。

ライトに当たって水しぶきがきらきら輝く。

水中に白い気泡と黒い人影が交差しながら天井を岩に模した洞窟をくぐり抜けると白い砂地が現われる

濡れ鼠になった選手たちが息を整える暇もなく砂地を走り抜けて直立に切り立った崖をよじ登る。

「早いぞ！早いぞ！これまでの記録を塗り替える勢いだ！」

実況アナウンサーは手元の時計を見ながら解説を続ける。

「先頭に行くのは口ホ。槍投げから総合十種に変えて成績を残し、今このロツクイーゼンでトップスターに躍り出ているビーレル。素

晴らしい跳躍！素晴らしい筋肉の運動をご覧下さい！」

ムスカツドの壁は二番目に来る最も大きい高さの有る壁である。頂上だと思える一段目の壁の向こうに又聳え立つ壁を見ると、水の中から出て重たくなつた身体で壁を登り詰めその先に見えるムスカツド壁を選手達が見ると大幅に気持ちがダウンしてしまう。

「カル。大丈夫？ビツクウエーブは私が下になるわ」とカスティルの隣で声をかける。

「悪いなアネル」

チラリとアネルを見て安堵の気持ちがよぎる。

「どうしたのよう？カル？肩が外れたの？」

足の速いヴァンニアがアネルの後ろから移動して苦しそうに腕を握っているカスティルの横に陣取る。

「入れられると思うが・・・よし入った」

苦痛に歪んだカスティルの顔に何が起きたかをヴァンは理解した。

スタート位置でヴァンニアの前にはミリ。その前にカスティルが居た。

体の大きいカスティルはスタートの位置からの蹴り幅が少なく遠くに着水できずに後から落ちてくる選手の誰かに踏みつけられたのだ。水深はあつても百人以上の人間が十二メートル四方のプールに飛び込むのである。

手前に落ちるか対岸近くに目標を定めるかで少しは選手同士のぶつかる衝撃を軽減できるが少しでも目測を誤ると速力をつけた人間がかかとからぶつかってくる。

ラティーフは一番危険な対岸壁近くに飛んでいる。そこなら落ちてすぐに洞窟に逃げ込めるからである。

それでも同じ場所に目標を定めている選手も多くいち早く水中を移動してもすぐにわずかの差で着水した選手の足がラティーフの足にもぶつかっている。

事故はスタートラインから落ちていく選手の間隙をぬってぶつからない場所に落下したが

息を大きく吸い込み潜った瞬間にヴァンより後に落ちてきたミリーの足がカステイルの肩を直撃した。

ぶつかれたカステイルは泳ぐことだけを考えて洞窟を脱出したが使えたのは左手だけで完全に右手は肩甲骨から外れて肩先は尖っている。

確かにミリーのかかどが直撃したが、偶発的な事故である文句が言えない早く潜らなかつたかカステイルが悪いのだと、ヴァンは唇を咬む。

ビククウェーブは足の速い三人が先に行き後から来たチームメイトの土台になり反り返った壁を乗り越える障害である。

いつもなら土台カステイルとアネルの二人で持ち上げるのだが、今の会話だと土台はアネルとヴァンでカステイルはその上に乗っていることになる。

二人で持ち上げるのだが体重の重いカステイルを引き上げることが可能だろうかと一抹の不安がヴァンにある。

ドンガの壁をカステイルはどうかスピードを落とさず登りきる。

アネルとヴァンの目がカステイルの肩の辺りを見つめて空中に浮かぶきのこにジャンプした。

今はレースの真っ最中なのだ仲間のために良いポジションをとらな

ければと身の軽い二人は他のチームのえり抜きの選手と競いあつて次の空中きのこの取り合いに参戦した。

ドンガの壁を登り、モメンセの河を空中きのこを利用して飛んで渡り終えハンマー海峡。

落ちてくるハンマーと狭い橋幅を行きつ戻りつ進み中央まで行けば闘技場の真上に開いた穴から外の風が無節操に吹いてくる。

「うわあああー」と声を上げてばらばらと七名の選手が落ちていった。

落ちた選手たちの体重が橋からなくなると橋のたわみが大きく上下に震える。

カスティルは橋の上で歩みを止める。

「クツ」

バランスをとるために上げた腕が傷む。

「大丈夫よ、もう少し！」と後ろからアネルがカスティルに声をかける。

ラッキーなことに橋の中央まで先に行っていた選手は風で落ちてしま
まい

谷底から必死で這い上がってきている。

もっと手前で落ちていれば最初の砂地まで戻らなければならなかったからアネル達もかなりビビっていたがハンマーが風を遮り落下を免れている。

「先に行ってくれ」腕の痛みで足の進まないカスティルが叫ぶ。

「OK。アネル、スピードを上げるわよ」渡り終えたヴァンが答える。この先を二人で乗り切らなければとの決意が顔には現わられてい

る。

五本ある橋の上をゆっくりと選手たちが渡り終え始める。

レース 2

次のアトラクションはビックウエーブ。高さが三メートルから五メートルの反り返った岩の波が横幅四十メートルある。

目指すは三メートルの低い波の先。

高低差が激しくあるため最初のポジション取りが大事な場所である。先を行く口ホの三人の内一人はすでに波の屋根に上っている。

「アネル、勢いをつけていくわ。お願い」とヴァン。

立ち止まったヴァンを置いてアネルはウエーブの下、口ホの選手の隣に両手の指をかさねてヴァンを待つ。

「いいわ！」一か八かだ。この役はいつもカスティルの得意技。助走を軽くつけてヴァンは利き足をアネルの両手に乗せると、アネルも懇親の力をこめて波の上にヴァンを跳ね上げる。

反転してヴァンを放り投げた方角をアネルは見る。

「やったわ！私たちでも越えられるわよ」
体の軽いヴァンは一回転して波の屋根に上っていた。

そこへ遅れてやってきたのがカスティル。

青ざめた顔に安堵の笑顔が浮かぶ。

「やったなアネル、ヴァン、頼むぜ俺の肩」
カスティルの後からベルデのメンバーが走ってきている。

細いアネルの肩にその倍はあるカスティルが立ち両手を組む。

「あれ今日は逆？」ミリーはそう言いながら走ってきてアネルの両手に右足を、左足をカスティルの両手に置いて、踏み台にした。

「そおれー」とカスティルとアネルの掛け声と同時にミリーは上へ放り上げられる。

飛び上がった波にミリーが手をかけるとそこにはヴァンが待っていてミリーを波の先から引き上げる。

ヒーリー、ホイ、フックス、ジリアスクと踏み台の二人を使って波に駆け上がると

ヴァンが悲壮な顔つきで下に居るアネルを見る。

「さつさと来て！」二人を信用してはいるものの自分の疲れ具合からカスティルの身体を心配している。

痛む腕を気遣いながら助走をつけてアネルの両手に足をかけカスティルが飛ぶと

ヴァンとジリアスクがカスティルの着地した波の先っぽから倒れこみながら受け止める。

最後はアネルだ。

助走を長くするためビクウェーブから離れて駆けだす、波の内壁に垂直になるまで足で登りつめ身体を限界まで持つて行き

波の先に手をかけてぶら下がりがらついた波岩の上を指でじりじり登り詰めて宙に浮いていた身体を完全に波の上に乗せると待っていたヴァンがにつこりと笑う。

「急ぐわよ」

近くにはベルデのメンバーはヴァンしか残っていない。

次のアトラクションは全員でないとこなせない。

坂を下りると丸太がかかった橋がある。

くるくる回る丸太の上を苦も無く軽やかに駆け抜けて二人が通過していく。

隣では丸太がぐるりと回り通過中の選手三人が慌てて丸太にしがみつ়く場面が展開されている。

丸太橋を渡り終わると恐怖の峡谷越え。

鳥の巣状の大きな穴だらけの球体の中に入り込み

緩やかだが起伏の有る床面を八人一丸となって球体を抱えて八人全員で立ち木の間を走る。

ベルデ3全員そろつと重い球体を持ち上げてリーダーの合図で走り出す。

穴から出した足並みを揃える。

「右にヤシの木、クリア。十メートル先に左にヤシの木。いいか！ジグザグに走る！左！右方向一步左へ真つ直ぐ。右に五歩移動。次に左に二歩移動。修正一步右。ギリギリ行くぞ真つ直ぐ！ヤシの木を通り越したらすぐに左五歩いや六歩。口ホに先に行かせるな！体当たりだ」

とジリアスク。

右方向からヤシの木の林を一番早く抜けるルートを

別な林からやってきた口ホも球体と同じ幅に広がっている間隔に目をつけて向かっている。

口ホはベルデを確認し速度を上げる。

ベルデと口ホの速度が同じになりヤシの木の間に突っ込む。

刹那、拮抗していた力はぶつかり合い口ホは三メートル後退し、ベルデはというとゴムボールのように弾け何度もヤシの木にぶつかり転げて止まった。

「立ち上がれ！口ホに先を越されたぞ！それ」
とジリアスク。頭を上げた先に口ホの球体が見えた。

天と地が逆さまになった選手達は一人が穴に両足を入れると練習と同様に決まった位置に転がって這って戻り立ち上がる。

「前進！」

「何で負けたのよ！踏みとどまってよ！」
怒り狂ったミリーの声。

「そんなことを言ってる場合じゃない！足並みを揃えるぞ」とジリアスク。

涙眼になったミリーがホイジンガー、フックスベル、カスティルを睨み付ける。

ミリーの声にカスティルが唇を震わせて抗議したが何も言わない。勝ちたいのはカスティルも同じだ。

ここで勝てば来シーズンの契約時有利な立場で更新が出来るのである。

肩に不安を抱えていてもこの勝負に参加し勝利さえ勝ち取ればオフシーズンに肩の手術をし完治させて競技に望める。

何よりも一位であることにこだわって来たカスティルだけに肝心の右手に力が入らないのは悔しいのである。

「行くぞ！」

後方からアマリジョとナランハが追い上げてきているのが見える。

「フンツ！」とカスティルは痛む腕に力を入れて球体を持ち上げる。「負けてたまるか！」ホイジンガーが両腕に力をこめて声を張り上げる。

軽いヴァンニアが持ち手ごと浮き上がりそうになる。

「GO!GO!GO!」

ベルデ3は真つ直ぐに走りこんできたアマリジヨのそばをかすりながら曲がり

ヤシの木の間に駆け込む。

緩やかな下り坂に勢いがついてぐんぐんスピードが上がる。

「右に三步又右だ。五歩左に二歩。今度のヤシの木の数は半端じゃないぞ」

「ロホが引っくり返っている。今のうちよー」

「軌道修正!右の大きなヤシの木を回るぞ」

「OK」

「くっそ。奥に小さい木を置いてやがる」

必死の形相で球体解除ラインまで走りこむと

ゴム製の檻はばらになり汗びっしょりの選手の姿が飛び出てる。

「最後だ泳ぎきれ!走り抜けろ!」

ジリアスクの声をメンバーは走りながら聞き、

個人の加点ポイント地点、落差四十メートル、パールの滝つぼに向かう。

高さに足がすくむが美しく飛べばボーナスが入る。

縁に立って片足で蹴る者、両手を挙げポーズをとって両足で蹴る、助走をつけて上に遠くに飛ぶ者と様ざまだ。

崖縁から飛び出した後腕を身体に巻きつけるようにして飛び込み、力強く足先から入水し浮き上がる。

技の無い選手はそのまま万歳をして飛び込む。

落下中ひねりや回転と如何に自分の技が美しいか観客席に見えるよ

うに工夫して選手達は次から次に入水する。

もちろん滝つぼでは先に飛び込んだ選手は落下してくる選手を避けて水中を必死で潜って移動する。

泳いでたどり着くのはスタートライン近くの砂場である。スタートラインの壁を右に見て濡れた体で壁をよじ登る。

余力を残していた選手がぐいぐいと疲れきった選手を抜き捨てていく。

この壁からはもう色で分けたチーム行動ではなく個人の力にかかっている。

砂地を走る間に電光掲示板でチームの点数を見ていた選手らは最後の踏ん張りを見せ、

先頭集団にいる数人はチームのことを考えピラミッドの天辺の押しボタンを押して下りた。

壁を登りきり骨組みだけのピラミッドに選手は入り込む。

タイムだけを考えればピラミッドの天辺にタッチしなくとも良いのだが持ち点の少ないチームは是非とも欲しい。

レース 閉幕

副調整室ではオーケシユストが満面笑みで

TV局のディレクターを無視し大声で命令している。

「おい、早く下からのアングルに切り替えさせる！よおーし。よおーし。いいぞ。これでなきゃ面白くない。そうだろうビル？」

ディレクターも慣れた態度でスイッチャーにウィンクして合図を送る。

「ええ、そうですね」と

生半可な返事をしてオーケシユストとは別の画面を食い入るようにビルは見つめる。

こぶしを振り回してレースを楽しんでいるオーケシユストとは大違いである。

ボルトできつちり止めたホールドが弛んで落ちたのをビルは見ている。

平時は足場を組んでホールドを設置するが急遽コースを変更したため緑の羊歯を描いた壁にロープでぶら下がりホールドやエッジを取り付けている。二人目の確認作業を省いたのだ。

選手がその後走る障害物にも問題がある。

高さ一メートルの岩は球体の素材と一緒にゴム板が多く使われている。

体重七十キロまでなら何とか持ち堪えられそうだがそれ以上は未知数である。

モニター画面では選手が墜落もせず岩の上を豹のように四足歩行でしなやかに

岩から岩へと飛び移る様が床面からだろう選手の影が瞬時に飛んだのを綺麗に写している。

近距離での撮影からスカイカメラに切り替わる。
空からのカメラはごつごつした岩場の全体像を俯瞰でとらえ
いわに埋め込まれた小さな窓からの映像ではトップの選手を脅かす
後続の選手の動きが映し出されている。

大きな岩に片手を置いて飛ぶ、小さいな岩を跳び箱変わりに飛ぶ。
幸いなことに身体の大きな選手は
ジグザグに走ることを選び起用に岩と岩との間をぬって行った。

明るい夕空に花火が上がりロッキューゼンの最終ゴールを祝った。
立見席を入れて六万の観衆が見守る中華々しくロッキューゼンのレ
ースは終幕である。

興奮して席を立ったオーケシュストの隣で深く椅子に背もたれてピ
ルはほっと一息つく。

ビルが見た限り四つ気になる点があったがどれも訴訟や公的機関に
説明を必要とする事故はない。

そそくさと席を立ったオーケシュストを見送り放送された画像を呼
び出して食い入るようにビル見つめる。

会場ではクレイン車がスタート地点にくっつき赤い敷物と表彰台を
係員が設置し、
スタート口からぞろぞろと出てきたのはラフさを装いながら一番上
等なスーツに身を包んだ市長が
有力者の中で機嫌よく愛想を振りまいている。

そこへオーケシュストがひし形になった山高帽子をかぶり登場する。
フロアーディレクターが観客に拍手を要求する。

スタジアム発表六万の観衆の千人がまばらに拍手をする。

汗だらけの選手はステージに一人もいない。

「さあ今日の最終レース素晴らしい熱線でした。そしてあらゆる所で観客のためにスポーツの美しさを追及した選手達の登場です!!」
ゴールを切った選手達は暗転の中スポットライトを浴びて出てくると拍手の波が響き渡る。

仰々しく司会者がその拍手を手を挙げて止める。

「そして加点されるポイントは!」

ドラムロードが鳴り響きスタートラインの真上の電光掲示板がポイントごとに点数を光らせると観客の視線が注がれ一瞬間がありたため息とも歓声ともつかない声がスタジアム中にうなり続く。

「良くやった!マイアー」

「立派な戦いだったぞー」

口々に覇風の選手にまたは大金を稼がせてくれた選手に祝福の言葉が多く飛び交う。

司会者は両手を挙げて下げ又上げてスタジアムの真ん中に向かって叫ぶ。

「今年度優勝チームはアマリジヨ3!!」

怒涛のように罵声やお祝いの言葉が観客の口から出てくると司会者の声などまったく聞こえなくなる。

アマリジヨの八人が一位の台に上がり手を振ると用意してあった金色の紙ふぶきが天井から舞い落ちた。

「二位は大健闘ベルデ3 - -!! 三位は口ホ3、四位は口サのセカ

ンド。この番狂わせは来シーズンにどう影響するのか？楽しみですねー」

鳴り止まない拍手の中したり顔の司会者は負けじと声を張り上げる。

「たった一人にだけ送られる殊勲選手賞の発表！皆さんの期待通り！美しい！あまりにも美しすぎるダンジェルマイアー！マイアー選手です！！」

「オウ。拍手の要求はいらないうですね。では市長よりメダルと賞金の授与です」

デフォルメされた女神像がマイアーに手渡されると、表彰台から笑顔と投げキッス。表彰台が肉眼で見えないファンは大写しにされた画面のマイアーに感嘆の声を惜しみなく送り続ける。

スクリーンから魅力的な投げキッスが送られるとハートのついたため息が会場中に聴こえる。

お役ゴメンとなったオーケシュトや来賓はスポットライトの当たらない暗がりへ戻っていく。

中央に当たったライトを浴びて何度もアンコールにこたえて手を振っていた選手達も消え。

会場にある画面に今日のハイライトシーンが映し出されると興奮冷めらぬファン達が高揚した面持ちで席を立てて見上げる、緩やかに人の波が出口へと移動し始める。

賭けに勝ったファンはチケットを持ってに払戻機に向かう。

いつもはポスターやパネルで隠してある払戻機の前にはロックイーズンの人気を計れる長蛇の列。

副調整室に戻ってきたオーケシュストは一斉に揺れる人波を笑いな

がら見ている。

「すごいねこれだけの人が換金してるよ。皆さん予想通りだったのかな」

国に納めるのが十一%ロツクイーゼン協会が二十%、配当金七十%、それ以外がオーケシュストに入る。

解雇

興奮と感動の決勝戦が行なわれた後

丸一日だけ安全点検のため競技場は閉鎖される。

それと同時に選手たちが住む建物の一階部分、

エントランスの隣の応接室では契約内容を更新するために一人又一人と選手たちが呼び出されている。

呼び出し係はポール。一切契約の中身になど口出し出来ないが身分であるが選手の成績はレースを見ていて予想でき契約を終えた選手の顔色も判断の一つになる。

ポールの呼び出しに役員部屋に入った選手が
ドアが閉まった途端抱きつき握手までもやるのは契約内容がよかったからである。

厳しい顔つきの選手がでてきた場合は最悪の契約内容だということ。

来シーズンに出走できない選手は後見人が呼び出されることもしばしばある。

選手呼び出しも目立たぬよう平常心を保っているがドアから出てくる選手が優しい笑顔で応じてくれたらと胸の内願っている。

ポールが会議室のドアを開け中に声をかける。

「ラティーフ・セヴェールです」

「いいよ」中からの声。

「アネル、君の番だ。今日はとてもいい日になるよ」とポール。

「ありがとう」

部屋に入ると空いた椅子が一つ
その前には大きなデスクを囲んで一番奥からオーケシユストが座る
ように指先を動かす。

周囲には山済みの書類を前にオーケシユストの腰巾着の役員が五人
顔を並べている。

会議室の主導権はいつもオーケシユストにある。

「ベルデはいつも活躍しているね。いいレースをすると市民からは
喜ばれているよ。嬉しいだろうファンがたくさんつくと、走りがい
もあるってもんだ。そう思うだろうアネルも」

とにこやかに正面のアネルを見る。オーケシユストの頭の中ではも
う金額は決まっている。

「ええそうですね」

アネルの返事など期待していないオーケシユストは
うつむきかげんのアネルから目を離してコンピューターが出した数
字を見る。

「で、君の成績なんだが一年目、二年目と結構頑張っていたみたい
だけれど今年はどうしたのちょっと元気がないみたいだが」

地味な選手は嫌いなオーケシユストはコンピューターがはじき出し
た数字が気に入らない。

「そうですね」

「何かあったのかい？僕等で解決できるような問題なら是非とも話
してくれないか。まだまだ君は活躍できる選手だからね」

優しい声でオーケシユストはアネルの口が開くのを待った。

がアネルは黙ったままオーケシユストの手元のファイルを見ている。「疲れているのかね」

少々選手に気を使いすぎだと思うが役員達の見ている前では派手な言動は慎む。

「そつだと思えます」と口数少なくアネル。

この契約更新の場ではマイナーな言葉は禁句。オーケシユストには渡りに船。

「君ほどの選手を休ませたくないが。一年ほど休んでみるかね。なあに元気になつたら連絡をくれればいい。最初からテスト受けなければならぬが。君なら心配する必要などないさ」

イマイチの選手は数多く要らない。どの角度からでもTV映りが悪いと心の中でだけでいう。

沈んだ顔を上げてアネルが尋ねる。

「ほんとに辞めてもよろしいですか。ずっと考えていたんです。田舎に帰ろうかと。私にはこの競技は向いてないんじゃないかと」と口からため息。

「君が居なくなるとカスティルやジリアスクが寂しがらるだろう。何シーズンが始まればそんなことは言ってられないからな。残念だ」と他の役員の顔色を伺う。意義を申し出るほど発言権を持った役員はここにはいない。

「アネル、部屋を引き払う時に必要な書類をボールに持たせる。急がせるように悪いが更新手続きがとられない場合、君はここをすぐ

に出て行かなければならないんだよ」
とんとんとテーブルの資料を指で弾く。嬉しい時のオーケシユストのくせだ。

「ええ、最初の契約に書いてありました。覚えてます。夕方までには部屋を空けます。それでいいでしょうか、では失礼します。お元気で」

ほんのわずかだけれどラティーフの心は軽くなった、

「ああ君も、アネル・・・」

辞めていく選手になど興味など無い。

次の選手との更新にオーケシユストは頭を切り替えている

こんな所には居たくないというオーケシユストの返事も終わらないうちにラティーフは部屋から出て行った。

四階の部屋に戻りこの三年間で増えた荷物を簡単に分けて二つのトランクに詰め込む。

一つは自分の服もう一つはファンから貰った贈り物。

ポールがどうしてこうなったんだ目で訴えながら書類のファイルを置いて

次の選手の呼び出しに去った。

契約更新は二日にかけて行われる。

掲示した契約金に不服がある場合、又次の週に持ち越される。

その不服契約で残っていたマイアーが荷物を持ってエントランス下りてきたラティーフの腕を掴む。

「どうして！居てくれないの。これ！これ！私の住所、母が居るの

手紙をちょうだい。連絡をちょうだい！すぐには返事は出来ないけれど。お願い！」

辞めた選手と現役選手同士の連絡は取れない。

さまざまな理由が規約では上げられているが根本は八百長を疑われる要因をすべて排除しているというのが理由だ。

「うん、ありがとう」

それ以上ラティーフは答えられなかった。出来れば今すぐ話を聞いてもらいたい。

「アネル・絶対よ私が引退したら。連絡を取ってね・・・」

ビールルが言葉に詰まって立ち止まるとラティーフはその手を握って最後の別れにした。

宿舎のエントランスから五分ほど歩いて警備事務所で通公証を渡して高い門から表へ出た。

ごろごろと二つのスーツケースを転がしてタクシーを止める。

「ポーターミナルまで」

「ハッ？目は開いてるかい。何処を見て歩いてるんだよ。道を渡って二分だよ。まったくもう」

怒って急発進して行ったタクシーの姿を目で追って運転手に言われた場所を見る。

確かに駅の入り口を示した矢印が道向こうにはある。

ラティーフが出て行くのをポールはエレベーターの手前で見送った。オーケシユストに最後のベルデチームの選手を引き渡しもう用事はないかと尋ねて競技場修理の進み具合を見てくると宿舎を離れる。

競技場の売店やラウンジには工事用の資材やペンキを持った作業員がロックウィーゼンの話題で盛り上がっている。

TV放送されていた実物のアトラクションが
目の前に有ると言う事が作業員のテンションを上げさせている。

闘技場を観覧席から見て回りラウンジに戻ると

作業員に交じって立食テーブルでサンドイッチをかじりながらメールを作成した。

メールの相手はビル。

アネルの解雇をどう伝えるか何度も書き直して結局短い文でため息をつけて送信する。

ビル 驚く

ビルがアネルの解雇を知ったのは夕方。

市の監査役に調査が必要と決定された人間の外部との接触、会話を収録したディスクと資料を持って役所まで来ている。

ロッキーズンに関する収支報告は大型コンピュータが計算して競技が終わると同時に市に送られているからビルは一切金銭面のことにはタッチしていない。

主催者でオーナーでもあるオーケシユストが市まで出向くのが筋だが市から細かい説明を求められる監査会を嫌って代理でビルがロッキーズン発足から今日まで出ている。

タクシーを降りると時計を見ながらオーケシユストの行動パターンを思い出す。更新契約が済んだ選手の資料を見ながらPCの前で悦に入っているはずである。

金銭に関してはゼネラルプロデューサー、オーケシユストの担当だが選手の解雇となれば話が違う。

役職ではチーフディレクターのビルが個人的な見解で選手の契約金に異論は唱えられないが

シーズンベストテンに入った選手を簡単に解雇するなどありあえないのである。

選手宿舎を突ききり左へ左へ木立の中を走るようにビルは歩く。

「オーケシユスト、話がある。アネルの解雇は本当のことか？」

応接間のお気に入りの椅子で嬉しい楽しい選手の組み合わせ表を作っては

湧き上がってくるイメージに浸る。これぞ最高のシヨーの見せ場・

に水を差すようなビルの登場。

流石は役所、五時には追い出すのだなとビルを見る。

「アネル？アア、あの年増ね。人気はあっても年齢的に体力の限界に来て居たんだよ。本人も休みたいつて言っていたらしい機会じゃないか。最高に調子のよいときに辞められて。あの歳でこれから体力を維持するにもきつだろう？性格も暗いしここが潮時だぜ。そう思うだろう？」

ビルなら文句を言うだろうと思っていたから外しておいて大正解だったと薄ら笑いを浮かべ真剣な顔のビルに向ける。

生真面目なビルが怒っている。

「僕は残念ながらそうは思わないよ。僕等のシナリオ次第で彼女はもっと伸びたと思う。人間性を見たらどうだい？個性とか運動能力もいいけどその先の人間性を観客は求めていると思う。解雇を撤回してくれないか」と思いのたけを言う。

普段は決して本音は言わない。言った所で何も変わらないからだ。

困ったものだ・・・とオーケシュストは眉間に皺を寄せる。この皺はかなり効果がある。

「ビリー。君に彼女の解雇の相談をしなかったのは悪いと思うよ」としおらしく言っただけを見る。

「でもあの程度の人間性なら探せばいくらでも居る。いや発掘するんだ。それと新しいライターを雇ってくれバイトの使いっぱしりの男を今度面接に回す。いいだろう？もう居ないやつのは。選手の活性化だと思えば。おっと我々のチームも活性化しなきゃならんよろしく頼むな」

腹を立てたと思わせてねこなで声に変えてみる。

オーケシュストを怒らせたくないビルは口を結んで黙ってしまふ。

次は少々威圧的にここでのボスはこのオーケシユストなのだということをお知らせする。

「それとアネルは故障者リストに入れておいてくれ。これでファンは納得するだろう。そのうち忘れるさ。広報には俺が知らせておく。聞かれたら療養中だと答えてくれ。解雇したなんて言われたらファンがうるさい。暫らくはアネルが辞めた事は内緒だ」

屈託のない笑顔でウインクして話は終りだとオーケシユストは手元のパソコンに目を戻す。

悪気のないオーケシユストにあきれて言葉を返せない。

権限を持たないビルはすくすくこと応接間から出て行った。

十年前地方の競馬場を取り仕切りビルの采配で働く職員の動きにオーケシユストは感動しロツクイーゼンのためにヘッドハンティングをした。

田舎でマッチレースを楽しんでいたビルは騎手兼馬主でもある。

賭け事好きの父親がオーケシユストと仲が良く、信用して一緒に仕事を始めることにした。

ロツクイーゼンの構想を練ったのはオーケシユストだが細かい取り決めや基礎固めはビルが案を作る。

オーケシユストの最初の構想では実力はあるながら練習に打ち込める環境が整っていないアスリート、受け皿としての機能を発揮するのが目標であった。

故障している選手には休養と強化訓練と金銭的バックアップ。

これらは一年から三年の短期間の契約でアスリートは本来の自分のスポーツに戻るのが原則だったが

実際には集まりすぎたアスリート達を選別し良い選手は何かと理由をつけてレースに出して人気取りに使い本来の競技に戻す事はしなかった。

途中から受け皿をやめロッキューゼン専用の選手の公募も始め
選手がロッキューゼンを辞める時だけ本来選手の所属していた競技
に引き渡すが

後、引き渡された選手が活躍した記録は無い。

ビルが辞めた選手のことを気にかけることを嫌味に思うオーケシュ
ストは面白く思っていない。

大事な会議もビルが留守にしているときを狙っている節がある。

後日会議内容を見せられて問題点を突くと慌ててオーケシュストは
ビルに修正をさせる

この繰り返しが多くなっている。

オーケシュストの行動を大人気ないと思いつつも発足時の仲間が辞
めていく中

巨大化したシステムと選手たちの体のことを考えるとビルが口を出
さないといけないことは山ほどある。

オーケシュストの子供じみたビル外しにも慣れた。

この一年、仕事手手が止まり

男のプライドをかけてむきになってやっていたマッチレースを思い
出し

ぼんやりすることが多くなった。

「俺も歳だな・・・」

馬と一緒にになって喜んだり悔しい思いをした記憶が鮮明に蘇る。

ポールが送ったメールのもう一通はテットの携帯に届いている。

正確にはルーサーがメールを読んで顔色を変えている。

駅

「信じられない・・かこの鳥が・・出てきた」
ルーサーは嬉しくてはじけ跳びたい気分である。

「テット・・今夜の夕食会は腹痛でキャンセル。サニ・ドクターの予約を入れてくれ」
持っていた本を放り出し専用のトランクを見つけると動きやすい服装に着替える。

それから・・テット。君の情報網にラティーフ・セヴェールを入れて所在を追って欲しい。急げ。まだ遠くには行ってない」
携帯電話を握り締めルーサーの目は何度も短い文章を読み返している。今何処に居るのだろうか？

常宿にしているホテルに荷物を搬入し所定の位置に積み上げようと右往左往している最中、
手を止めてクリスとテットはルーサーの言葉を聞いている。

ルーサーの命令に無表情になったテットの革靴を蹴つてクリスは作業する手を動かしつつ、瞬時意固地になったテットに言う、
「やってやれよ」
重苦しいルーサーの雰囲気agaraりと変わったのをクリスは見ている。

「冗談じゃない。遊びで使われてたまるか」と小声でテット。
自分の仕事を軽く見られるのはごめんだ。

「初めてじゃないか。気晴らしだと思えばいい。たまには気晴らし

もしなきや浮かばれないぜ」
とこれまでを振り返るように言う。

クリスの説得をうらめしく聞き、作業の手を止めテットはPCを立ち上げる。

まずチェックリストにラティーフ・セヴェールの名前を打ち込み馴染みの警備会社に承認してもらおう。

犯罪歴にストーリーカーと記入。

警備会社の情報網にアクセス。

「何処にも通過記録がないですね。まだ周辺を歩いているのではありませんか？」

又くならない熱が出てきたと無表情の顔は言っている。

テットの読みどおりに

ラティーフ・セヴェールはポーターターミナル駅の階段で見知らぬ男に話しかけられていた。

大きな荷物を一段一段降ろしているラティーフを見て男は直感的にカモだと思って近寄っている。

「荷物を一つ持ちましょう」

男は持っていたショルダーバックを反対側に持ち替えて素早くラティーフの大きなトランクを持ち上げる。

軽くなったトランクに驚いて即座に、

「いいえ結構です」と答える。

「あなたの手には余っているようだ。大丈夫です私も同じ場所に行きますから」

と階段を下りながら、トランクをひきつけ先に降りる男性。

「あ、いいのに」
といいつつもトランクを持って余っていたのでそのまま男の後を追って広い地下に下りる。
待合室を見つけて椅子に座ると親切な男も隣に腰掛けている。

男の額の汗を見てちょっと可笑しい。

「ありがとうございます。助かりました」と礼を言う。

男は息を整えると、

「良い旅行でしたか」と気さくに話しかける。

「この駅をご利用だとロッキューゼンの最終戦を見に来られたのでしょうか。嫌ですね楽しい事はあつという間に終わる。オールシーズンやれる競技なのにもっと試合数を増やしてくれてもいいのにな」
この駅を利用する人間は誰もがロッキューゼンを知っていると言う
大前提で話をしている。

「そうですね」

ロッキューゼンと聞いて身体が強張る。

ロッキューゼンの話題で乗ってこないと知ると男は会話の内容を変
える。

「どちらまで帰られんですか」

と男に聞かれて正直に、

「バッファローまで」と答えたが、

男はバッファローをパウロー聞き間違え。

「バルニエ行きはさつき出たばかりだ。パウローね、あれはもっとも長い距離があるな。遠くから来られたんですね」

女性の荷物と人相、服装から地方出身者だと思っている。

男に言われて刻々と変わる電光掲示板を見、
バツフロアロー行きの電車は出たばかりなのだ。ラティーフはがっかりした。

「そうですね」

他に何か別なルートは無いだろうか。と掲示板を見ているがどの名前も知らない地名ばかり。

「何かをお探ですか」

「いえ、ちよつと」

「私でよければ何かお手伝いをしましょうか？」

田舎の女は親切な言葉使いで相手を信用すると笑顔を作る。

「いえ、その・・・電車に乗るにはチケットが必要だと思っんですけど」

「販売機なら・・・アアここからは見えませんね。よければ私が買ってきて差し上げましょうか、私もセージクまで必要ですから」と誠実にこやかに言う。

一瞬チケットの買い方が解らないラティーフはこの男性に頼ろうと思っただが

ブラウスの内側に下げているカードを思い出し止めた。

カードには三年間ロックキーゼンで稼いだ契約金の全てが入っている。軽々しく渡せない。

「そうですね・・・でも結構です。自分で買いますわ」
ラティーフが断ると、

男はあっさりと引き下がり、

「それじゃ私が荷物を見張っていきましょう。大事なものが一杯入っているのでしょうか」
と優しい笑顔。

「そうなんです。この小さいのは大したものを入れてないんですけど大きいのは大事なものを一杯詰め込みすぎて重くなってしまいました」と大きなトランクを触る。

「とても高価なもの？」笑い顔の目が真剣である。
金目の物は大きなトランクに入っているらしい。

「ええ私が一生働いても買えないくらい」
誰も買うことが出来ない宝物。ファン手作りの品物が一杯詰まっている。

「早くチケットを買ってらっしゃい。宝物はしっかり見張っておきましょう」

そ知らぬ顔で周りを見渡す。警備員は通り過ぎ誰も二人の会話を気にしている様子はない。

立ち上がったラティーフが小さなトランクを蹴飛ばすと
軽いトランクはくるくる回って教えられた方向に滑っていく。

「あ・・・」

トランクを捕まえて恥ずかしそうにそのままチケット売り場にラティーフが姿を消すと

待合室のトランクと男の姿も消えた。

駅 2

列車に飲み込まれては消えて行く大勢の人波を見つめながら
いつになつたらこの場所から

この駅から、レイステンという都市から

離れる事が出来るのだらうと哀しい目でラティーフは眺めている。

「ええ、そんなんです大事な荷物なんです。とても親切な人で荷物を
持ってくれてチケット買っている間見張ってやるって言つて、
そのまま持つて行っっちゃったんです」

小さな椅子に座り何度も同じことを駅員に訴える。

駅員はラティーフの書いた名前を見て胡散臭いと表情に出している。
ラティーフだつて変な名前だと思う。

「トレーダー・バクロン・さん。確かに待合室でその時間トラン
クを持った男が去っていますけど。これ以上探すとするとあなたの
身分証を提示していただかないと」

トレーダー・バクロンと名乗る目の前の女性は不安げな様子で駅員
を見ているが嘘をついているように見えてかなり怪しい。

「そんな・・・」

胸元の身分証には選手としての名前がある。

辞めて一年間は些細なことでも問題を起した元選手は違約金を払わ
なければならぬ。

トレーダー・バクロンはロッキーズン選手が問題に直面した時に
使用する名前。

ファンや記者などに悟られないようロッキーズン顧問の弁護士が

処理をすると契約書に書いてある。

「会社に連絡してください私の身分を証明してくださいわ。それで早く荷物を取り返してください」
事故を起した時の対応は最初に教えられた。
書きたくなかった住所と名称を書く。

駅員は保安部を呼び出しラティーフの書いた住所を照会する。
競技会施設館内事務員として名前と顔写真がモニター画面には現われた。合っている。

「その男が最寄の駅にいたら？まえますけどね。構内から出ていたら難しいかと」

身分確認が取れたのか別な仕事で忙しくなったのか駅員はトレーダー・バクロン（ラティーフ）の存在を忘れたように仕事を始めた。

ラティーフは駅員室から出て暫らく駅員から見えるところに居たが諦めて

地図を求めて大量のパンフレットを旅行会社から仕入れ見よう見真似でチケットを買い長い列車の旅に出た。

「それで！彼女は何処へ行ったんだ！ポート駅からバルローまでのチケットを買って。バルローからの足取りは？あの駅は四方八方何処にでもいける」
後部座席で腕組をしたルーサーを車内ミラーでクリスはチラリと見る。

いつもの冷静なルーサーと違いむき出しの感情が伝わってくる。

バルローと彼女の接点は身上書に無い。

バルローはただの乗換駅だろう。

「ええ彼女のカードの番号を追っていますですがまだ使用された形跡がありません。電話も使っていないようですし」

助手席でPC片手に状況を説明するテット。

特急列車を車で追いかけるとは無謀なと思いつつハイウェイを滑る様に走る車の速度を見てぞっとする。クリスは絶対にルーサーの願い叶えてやりたいのだろうと苦々しく隣を見る。

運転席ではハイになったクリスがスポーツカーと抜きつ抜かれつのカーチェイス。

「テット。君の情報網も大したことないな」

イライラの極致に達し言っては行けないことまでルーサーは辛らつに言う。

テットはルーサーのために法を犯してラティーフのカード番号を追っている。

ラティーフの解雇の情報の仕入れ先はポール。彼とは三年前から金で情報を買っていて

確認を取るため二人の警備員にも聞いている。

資格評議会開かれることになり身辺整理もかねてレイステンに来て
いるが

ルーサーは以前にも増して神経質で些細なことで突っかかってくる。

ガイネス国の皇太子を経て王になると思っているから

青二才のルーサーの悪口雑言皮肉も聞き入れてはいるがときに我を
忘れて拳を上げたくなる。

腹に力を入れて肩の力を抜く、視線を景色から手元のPCを見る。

ラティーフのカードが使われた。バルロー駅からシャプイまで旅券

を買い乗車している。

「彼女の目的地はシャプイだな」
シャプイは観光地で有名な場所である。

「ではクリス。ここでユーターンしてもらおうか。このままシャプイに行っても夜中だ。我々は明日の朝人に会わなければならない」
しっかりと後ろのルーサーに聞こえるよう声を大きくする。

「よろしいですねストロム様」

ボスツと助手席の背もたれをルーサーが蹴る。

予期していたテットは背中を浮かして蹴りを回避。

PCを畳みながら名前の知らないランプを車は降りて桁下をくぐり再びハイウェイに戻る。

「解った。だったら明日の午後の予定は全部キャンセルだ。いいな
っ」

口惜しげにルーサー。

今度はテットがドアを叩く。了承の印……らしい。

シャプイ

レイステンから千キロ北東にカヤンデル山脈の麓、

野山の向こう側に小波が打ち寄せる海岸線が美しい観光地シャプイ。

ホテルのモーニングコールで目覚めたラティーフは窓から見える遠い青い海を見る。

明るい日差しと明るい海の色はラティーフの暗く重い気持ちとは正反対。

「綺麗な色・・・」

生まれて始めての海。

レイステンにいる間一人物思いにふける時間は皆無。

今が物思いにふけるチャンスだと思うけれどよくよく考えて自分自身を否定しても何も進みはしないと気持ちを明るい方向へと切り替える。

「そうよ。誰も頼れる人はいないんだから」

明るい方向といっても望みの薄い明るい方向・・・である。

十歳の時に生き別れたとラティーフは思っている・・・母親を探す目的でこのシャプイを選んだ。

ラティーフの母親はある日突然帰ってこなくなっている。

周りにはおばや従姉妹たちが大勢住んでいたお陰で母親の失踪後孤独に過ごした記憶は無い。

村では失踪として扱わず山の亀裂に挟まり落ちて遺体が見つからないまま死んだと処理している。

子供同士の会話では大人たちが出稼ぎ行く場所シャープイの名前が

良く出ている。

ラティーフの母親はシャープイで働いていて元気であるけれど何か事情があって村に帰って来れないと子供らしい発想。

恋に破れて傷心を抱え選手生活にピリオドを打ち、

駅で待たされている間に思いついたのが遠い記憶の母親を探すこと。ともかく街を出る理由が欲しかったのが真実。

シャープイがシャープイであろうと無かるうと目的になる。

写真もないのにどうやって探すのだろうと自問自答し、女の子は母親に似るものと自分の顔に似た人を探せばいいのと心を奮い立たせている。

ホテルを一步出ると観光客が大勢闊歩している。

行き過ぎる顔は誰もラティーフをロックウイゼンの選手だと気がつかない。

顔に塗った緑のペイントは強烈だがTV放映されるラティーフの露出度は低く一線を退いても誰も騒がないのはとてもありがたいことだと思っている。

大きなホテルが立ち並ぶ温泉街を人波の流れるまま歩いていくと道幅が狭くなり岩肌が左右に迫る。

門のような木の下を潜り抜けるとパンプレットの表紙にもなっている有名な白い峡谷が見える。

手前のわずかな傾斜地には土産物屋の軒が連なっている。

みやげ物など関心がないラティーフはゆったりと動く人の流れに少々奇立つ。

二百メートルほど歩いたら前方の平らな岩の上で人の流れも止まってしまう

立ち止まった人達が揃ってみている方向をラティーフも見ただが何も

ない。

段々になった平たい岩のみ。
たくさんの人々が何かを待っている。

黄色の雨合羽を着た係員が大声で叫ぶ。

「下がって下がって!!」

係員の声で一歩程度観光客は下がる。

がこれから始まる自然のショーを近くで見たい気持ちに逆らえず大きな動きにはならない。

「来た!」「ワァー!」「キヤァー!」

最前列の観光客が嬉しそうに悲鳴を上げる。

平らな岩のあちらこちらに穴がありそこからお湯が二十メートル前後吹き上がる。

お湯柱は風に吹かれ曲がりぼとぼと係員の身体に落ちてきた。

係員の近くに居た観光客は濡れた濡れたと言って大喜びである。

間欠泉の向こう側には青い海を臨む白い石灰岩の段々畑が広がる。

人の流れが動き始めるとラティーフは店の前にテーブルと椅子を出した店に足を向けた。

咽の渴きを覚えたのである。

飲み物を買って求め顔の向きを変えると後ろから声をかけられた。

「やあ、久しぶりだね」

その声思わず振り返るラティーフ。

ロックイーゼンの誰かが迎えに来てくれた、と期待したが間違っていた。

斜め後ろに見覚えの有る男の顔。感謝祭で半日一緒に居たフアンの一人。

ベルデのペイントも薄いボディースーツも、ラティーフがロッキイーズンの選手だったとわかるような外出着も着ていない。髪の色も染めかえている。

宿舎を出てシャプイまで誰もラティーフをアネルと呼んだ人間は居ないので男の視線を外して無視する。

素早く観光団体の人混みに紛れ込みその場を離れる。

上手いことに間欠泉を見ていた観光客の中にもぐりこみあの男性フアンの前から逃げ出せた。

早足で歩きながらみやげ物屋のショーウィンドウに映る自分の姿を確かめる。

ジャケットは配給された薄いベージュ。パンツスタイルに大事なカードはチェーンをつけて首からポケットに入れてある。

他の観光客との違いは手荷物を持っていないのと会話しながら歩く同伴者がいないだけである。

しかもここはレイステンから千キロ以上離れて居る。

足早に白い峡谷に入りその奥の小さな土産物屋の中に駆け込む。

店の主人はぶら下がったカードを見て首を横に振った。ここではカードで物が買えないんだと。

ポール

ポーターミナル駅に降り立ったビルは足は重い。人の流れの中足を止めて改札口を見る。

電車から降りた人々がビルを避けて改札口を抜けて通り過ぎる。

「どうかしたんですか？気分でも悪いのですか」と今年最後の監査会に一緒に出かけたポール。

今日のビルはちょっとおかしい。何がおかしいかと聞かれてもポールにはわからないが何か変なのは確かである。

「ポール言いにくい事なんだが」自分の事を言うのは照れくさい。

まだロツクイーゼンに未練があるビルは手助けしなければいけないことをあれこれ思い描く。

魅力的な選手一人の顔が浮かぶと心は切り裂かれるように辛くなる。

「何ですか。こんな所で改まって、ちょっと端に避けませんか」人の流れがぶつからない場所を選んで一息をついた。

ポールはビルの様子からとうとう自分の秘密を知られたと覚悟した。小遣い稼ぎに選手の情報を売っている。優しいビルは雑踏を選んでポールに注意をするつもりなのだ。

ポールにとっては訴訟沙汰になるような大事な情報は洩らしていないと思っっているが

金銭のやり取りをしているので偉そうに弁解も出来ない。

ビルの口から言われる前に先に自分から謝るべきかしらを切つて通すか迷い

ブリーフケースの取っ手を握り締める。

「俺はもうロックイーズンには関わらない」
唐突にビル。

行き過ぎる人の流れが一旦収まり二人のそばには誰も居なくなった。

「この書類を事務所に渡しておいてくれ。オーケシユストには事務所のイレーヌから連絡が行くだろう」

ビルは視線を床に移し冷めた目つきでつぶやくように言った。

シヨルダーバックの口を開け分厚い封筒をポールに渡す。

踏ん切りのつかない気持ちをかくして強気に笑ってみせる。

「ご冗談を、あなたはロックイーズンの創始者だ。そんなことって出来ないじゃないですか」

ぽかんと開いた口でポールは尋ねる。自分の悪事はぶっ飛んだ。

オーケシユストはTVや雑誌に繁盛に顔を出してはいても、実際にロックイーズンを動かしているのはビルである。

「ロックイーズンの権利に関する書類にも全部サインがしてある。

俺は手を引くよ田舎で馬の世話をしているのが性に合っている」

やりたいことはまだまだあったがここらが引き際だと自分に言い聞かせる。

ビルの強い意志を感じて止める言葉を見つけれられずポールは又焦る。

「メソド八に帰られるのですか」
メソド八は有名な古い競馬場がある。

「そうだ。今期のロックイーゼン競技は大盛況だった。俺も思い残すことは無い。荷物は業者を手配するから俺はこのままメソド八に帰る」

改札口がビルにおいでおいでと呼んでいるようではいたたまれない。帰りたいたいのメソド八ではない。闘技場にあの選手達の下に降りたい。

ここで戻れば又ずるとオーケシユトの尻拭いに走り回る自分に戻る。

「こんなことを言っではいけませんけど。僕も馬の仕事できますか牛でもいいです」

オーケシユストの率いるロックイーゼンに自分の場所は無いとポールは思う。

「その場の感情で言うんじゃないよ。来たけりや来い。まずは俺が帰って地盤固めをしといてやるよ」

無理に気持ちを明るくしてみせる。別れは苦手だ。

「ここから直にメソド八に？」
真剣な目で聞く。

「うんまず親父に手土産を買って帰らねえとまずいから、ロジエで一旦下りる」

ロジエの市場で両手一杯のみやげ物を調達するつもりでいる。
ポールに全てを話したら気が楽になる。

気が楽になると急に腹が減ってロジエで食事でありつこうと食い物

のことだけをビルは考えている。

「解りました。預かった物は事務所に置いておきます。イレーヌが寂しがると思いますよ」

「頼むな」

ポールに片手を振って市内行き電車にビルは乗って消えた。

ビルに渡された封筒とブリーフケースを抱えてロッキューゼンの事務所にポールは駆け込むと、

書類の確認作業を終えたイレーヌが明日からの休みを楽しく過ごすか他の事務員と話が盛り上がり事務所全体が華やいでいる。

「これ中身を確かめてチェックしておいてくれよ」と笑顔で頼む。

机の上に置かれた分厚い書類の束を見てイレーヌは缶切り声を上げる。

「打ち込み作業は終わっているのよ」

他の事務員も不満げな顔で書類を見ている。

「就業時間内には終わるって。あ・ともう一人分。十分後に持つてくるからそれも頼むね。僕の方は大丈夫、簡単さ。就労年数が少ないから」

とさつさとイレーヌのそばから離れる。

これ以上話しているとイレーヌの仕事が進まない。

ブリーフケースの中身を金庫にぶち込み、二三枚の書類を片手にポールは自室にかけ戻る。

先に退職願を書いて更新契約書破棄願いにサインをする。

部屋のパソコンにメソッド八行きの電車の時刻表を出し

旅行かばんに荷物を詰め込み事務所によると封筒の中身を見たイレーヌが呆然としている。

「このサインビルの名前がある。何よ全部の権利を譲歩するって・・・
嘘」
そつとイレーヌの机の上にポールの書類も置いて事務所を出た。

シャプイの夜 1

土産物屋で立ち話を繰り返しているうちに、

感謝祭の男性と偶然であったことなど忘れてしまい日が暮れている。

母親の消息など見つかるとは期待してないが

バッファローの地名すら知らない人も多く

シャプイが村人の出稼ぎ場所では無い事はわかった。

白い峡谷から人混み紛れ駅に寄りこれからの予定を立てるために
新しい観光パンフレットをホテルに持ち帰っている。

人間の多さで疲れた頭を切り替えて

パンフレットとの地図を睨み要所要所を丸で囲みルートを考える。

どのパンフレットも観光地までおおよその時間しか書いていない。

このシャプイもメインの白い峡谷まで

何箇所も小さな白い峡谷があつて商売をしたいみやげ物店と

宿泊客の欲しいホテルの策略に乗って小さな段々畑を歩きまわっている。

「人でいっぱい・・・」

広げたパンフレットを眺める。

ホテルの部屋は小さなテーブルと椅子

その向こう側にベッド、大きな窓はあるが隣は又ホテルの壁である。

椅子に座り込みペンを持つが一向に明日の予定が立たない。

腕組をして考え込みぼんやりしているとドアをノックする音。

すっかり暗くなった部屋の明かりをつけてドアチェーンを確かめる。

「はい、どなた？」

沈んでいた気持ちが伝わらないように声を出す。

「やあ、アルヴァー・ルーサーだ」

の聲に思わず顔をしかめる。

華やかな観光地から離れて奥の住宅街に足を向け、
そこでもたつぷり時間を使って歩き回っている。

何処で見つかって後をつけられたのかがわから無い。

「？何の御用かしら」とドアを開けずに返答する。

昼間土産物屋で声をかけてきたのはアネルだとわかって挨拶をして
いた。

たまたまラティーフがこのホテルに入るところ見ていたのかもしれない。

それともホテルの従業員がアネルと気がついて誰かにおしゃべりを
して噂が広まったとか・・

とっさに色々考えたがここまでラティーフをロッキーズンで走り
回っていた選手だと

判った人は誰も居ない。

この場は顔を出さずに知らぬ顔で追い返してしまうのが一番・・。

ドアの前で追い返す方法をあれこれ考えていると、

「ここはラティーフ・セヴェールの部屋かな？あのロッキーズン

のスターアネル・・・」

追い返す口実がまとまらないうちにアネルの名前がルーサーの口から出る。

「やめて！」

チエーンをつけたままドアを開けて確かめる。間違いない昼間見た男である。

「入れてくれないか。話がしたいだけなんだ。困らせるつもりは無い」

廊下のライトを背後に受けて

自分の魅力は誰にでも通じると思っているのかルーサーには一切悪びれた様子はない。

黙ってラティーフは男を睨みつける。

「アネル元氣そうだね」

そんな人知らないと言下まで出てきていたが押し通す気力は無い。

半日素顔のラティーフと一緒にいた男である。

諦めてチエーンを外しドア前から退くと

ルーサーと一緒に優しい香水の香りが狭い一室に広がる。

ルーサーは床、テーブル、椅子までもパンフレットで一杯の部屋を見回し

優雅な物腰でパンフレットを二三枚拾って眺める。

「次に行くのはジャンプの泉かい。綺麗な場所だ」

と腰掛ける場所を探して狭い部屋のベッドの上に座った。

シャブイの夜 2

「ごめんなさい場所が無くて。あ、まって。椅子を一つ運んで貰えばいいわ」

部屋に入ったルーサーがベッドに腰を落ろすと

慌ててラティーフは電話口に行こうと三歩歩いて立ち止まる。

最寄の駅ごとにパンプレットを集め路線図どおりに置いたところだったのに崩したくない。

「ここに座つたらどうだい」

ベッドの上にもパンフレットが散らばっているが

ルーサーはそれらをまとめて隅に追いやりラティーフ一人分の座る場所を作った。

落ち着いた物腰のルーサーに気負っていた気持ちが沈み本音がぼろつとが出る。

「色々と考えていたらこんなになっちゃった」

ベッドにラティーフが座ると身体の向きを変えてじっとルーサーが見つめている。

「ずいぶん疲れているね。ここは広い観光地だから一日では周りきれないよ」

表情の乏しくなったラティーフを気遣っている。

「そうなの」

確かに何も考えがまとまらないのは疲れているから。

「横になっただらどうぞだ。座っているのも辛そうだ。横になれば動かすの口だけでいいよ。どうぞ」
とルーサーが枕を整えラティーフを促すと疲れ切っていたラティーフはちよつとのつもりで横たわった。

「寝ないでくれよ話をしに来たんだから」と陽気にルーサー。

心臓の鼓動がガンガン耳元でうなっている。

感謝祭で会った彼女の隣にすることが嬉しくて、狭いホテルの部屋も地味な壁紙も質素なベッドもルーサーには見えない。

「大丈夫よ、話ぐらい出来るわ」
騒がないでくれるのなら少しぐらい話をしたっていい。
どうせ今は華やかな選手では無いのだから。・・・そう思うと気が楽になる。

「じゃ聞いてもいい？どうしてロッキューゼンを辞めたの」

「え？そうね。・重なつたの」

何が重なつたのかラティーフは目を閉じて考える。

重なつた。・重なつた。・重なりすぎて身動きできないくらいに。・

「ねえあなた、女性に振られたことある？」

澄ましてこちらを見ている男性は女性に振られる要素は何処にもない。

「その顔だとあまりないようね」
チラリと端正な顔のルーサーを見る。

どっちかというラティーフのような平凡な女性は相手にしないだろうと思われる。

付き合う相手に不足が無いのはマイアーぐらいのものね・・・と
思い出したマイアーの最後の顔は哀しい表情だった。
きちんと別れをしなかったことをラティーフは後悔した。

「私好きな人に振られたの。それで競技に集中できなかった。一度
や二度じゃないの三度よ。同じ男性に三度振られたわけじゃないわ。
皆別々、年齢もタイプも違うわ」
まだ生々しくジリアスクの言った言葉がよみがえって哀しくなる。

「幸運だと思ったの。周りは皆素敵な人ばかりで、皆努力家で素晴
らしい才能を持ってて、私が有頂天になっていたのね・・・」

「焦る気持ちはわかるけど、近くに居る男なら誰にでもそうやって
声かけるのは、かなりみつともないぜ」

君はいい人だけど付き合った男に病気みたいに結婚してくれって言
うの。有名だぜ。止めなよ。みつともないよ」

病気なんかじゃない、本気でこの人となら一生暮らしていけると思
ったから言ったのに・・・と心の中で反論する。

ジリアスクにはもっと言い訳したいことがいっぱいある。

「ステイブはね、他の女性に盗られたの。ローランドは結婚なん
か考えられないって。ジリアスクは一番付き合いが長かったし優し
かったから絶対大丈夫だって信じてた・・・」

振られた男の名前とその理由をルーサーに説明しているうちに目頭

が熱くなり涙が溢れ出てきた。
頬を伝わって涙が耳に入る前にルーサーのハンカチが涙を拭う。

二年前のローランド、一年前のステイブ、三ヶ月前のジリアスクとの会話を思いつくまゝルーサーに話す。

ラティーフの口が閉じるのを待つて落ち着いたのを見計らいルーサーは口を開いた。

「ラティーフ。ステイブは十八だ結婚を考えるには早い年齢だよ。ローランドは君じゃなくて君の隣の人が目的だったのだろう？ジリアスクは誰にでも良い顔ばかりする奴さ。君の話だと僕には煮え切らない奴に思えるよ」

目を閉じて黙ってルーサーの慰めの言葉を聞く。

「マイアーと同じ事を言うのね」
ルーサーのハンカチを取り上げて自分で涙を拭って握り締める。

「私って男を見る目が無いのね」だからこの歳まで結婚が出来ないのだと思うと又涙が溢れる。

「自分を責めてはいけないよ誰も君を否定し居るわけじゃない。君はとても優秀な選手だよ」

ラティーフの目じりの涙をポケットトチーフでなでる。
声を聞いているだけでルーサーの新しい未来が見えるようだ。

「あなたはどうかなのよ。女性に振られたことはないにしろ。楽しい事はあるわよね。ね、素敵な人に出会ったときに振り向いてもらえる方法ってあるかしら」

捨て鉢な気持ちで聞いてみる、この部屋に一緒にいるのがジリアスクだったら

どんなに楽しいだろうと閉じた瞳の中で想像している。

優しいジリアスクは星空を見ようと誘うかもしれない。

夜の海を散歩しようと肩を抱いて歩いてくれるに違いない。

でもそれは勝手なラティーフの想像で実際は優しく拒絶されている。

ジリアスクではない優しい声が答える。

「素敵な女性に出会ったら・・・誠実に自分を見せるよ。隠し事は嫌いだからね」

「そうなの。意外だね。あなただったら魅力的だからすぐに素敵な彼女を捕まえることができるわよ」

半日一緒に行動したことを思い出している。ルーサーの行動が読めずラティーフは焦ってばかりいた。

「そうだね・・・」

素敵な女性はもう見つけている、

?まえることができるかはこれからの会話次第。

「選手するとき何を食べてた。好きだった食べ物ってある?筋肉増強剤が主食で後はビタミン剤がおやつになんて言われてるの知ってる?」

と話題を変える。

彼女の嗜好品、日用品、どんな些細な事に愛情を注いでいたかをルーサーは知りたい。

辛い内容ばかりを彼女には口にさせている。

下世話な話を入れてリラックスさせる。

「おやつ？それちょっと当たっているかも。でも一部の人のだけよ。ほとんどの人が食堂で出された食事を食べているのよ。私はね野菜と果物が好き。夕食は皆と同じに食べるとおなかが重くて眠られないの。だからトレーナーからいつも注意を受けていたわ」と思い出して話す。なぜか自分のことを聞かれると嬉しい。

食堂ではトレーの上の料理に足りないものが上乘せされる。動物の内臓は極力嫌いで細切れにして食べていた。

涙目のラティーフの口元がうっすらと笑うと言葉を忘れてルーサーは見とれてしまう。

「普段はどんなファッションで過ごしてる。スポーツウェアが多いの」

これからラティーフと一緒に歩くとなると持っている服を見直さなければならぬ。

「私はそうよ。皆は違うわ、色々な服で個性的よ」

ミリーの自己主張が強いファッションと、センスの良い着まわしでおしゃれを楽しむマイアーの二人は選手達の憧れの的だった。

ミリーのファッションを見て驚いていたらマイアーからさりげなく注意を受けた。

競技中は身体のラインが丸見えでも集団の中では目立たず身体の線が見えても平気だが日常にそれを取り入れることはラティーフにはない。

肌を露出しない服装を好む無頓着なラティーフに

マイアーはいつも気を使ってアドヴァイスをしては服装にアレンジを加えてかつこよくしてくれたものだ。

アアそうか・・・私に足りないものは性格の地味さだけではなくて

地味さが服装にも現われていたのかと又落ちこんでしまう。

「私ってマイアの引き立て役かもね・・・」

マイアと離れて初めてマイアの美しさを感じている。

「マイアって？さっきも出てきたね。ダンジエルマイアの事。君の友人？」

「そうよ。一番仲良かった。彼女がいなかったら私の選手生活はもっと寂しいものになっていたかもしれないわ」

マイアと過ごした時間は楽しかった。彼女の周りには彼女が動くと同時に人の流れが出来たのには驚いてるがそれら全部を含めて良い思い出である。

「ダンジエルマイアに恋人は。大丈夫、誓ってもいいよ。僕はこの話を雑誌社売りこまない」

と宣誓のまねをしてふざけてみせる。ラティーフが口にする個人名は要注意。

「居ないわ。誰にでも親切で優しいけれど特定の人とは付き合ってたかったの。きつと選んでいたのよ慎重な女性だから」

私ももっと慎重に男性を見て居ればよかったとまたまた落ち込む。

とりとめの無い話をラティーフにさせてはしっかりとその内容をルーサーは吟味している。

友人マイアはルーサーの印象ではアネルを恋人のように思っているようだ。

極めつけ彼女を振ってくれた三人の男性達が居なければ

ルーサーにチャンスは巡ってこなかったと思うとに彼らに感謝したくなる。

シャブイの朝

目覚めは突然やってくる。

カーテン越しの朝の光がラティーフの顔に注ぎ隣に眠るルーサーの顔を直視した。

アラこの人自分の部屋に帰らなかったんだと思ったが頭の中はなぜかすつきり

遅くまでグダグダと話していたかと思っていたがいつの間にか二人とも寝込んだらしい。

昨日まとまらなかった観光地巡りの計画案がはつきりと思い描ける。そつとルーサーを起さないようにベッドを離れるとトランクの中に荷物を押入れ要らなくなったパンプレットをゴミ箱に入れる。

「やあお早う。疲れは取れた？」

さわやかに起きたラティーフにざわざわと嬉しい胸騒ぎを覚えるルーサー眠っているラティーフも可愛らしかったが活き活きと動き回っているほうが更に魅力的である。

「え、あらごめんなさい。起しちゃったわね。私は元気よ。あなたは部屋に帰らなくても良かったの。きつと心配しているわよ」とルーサーへの返事はかなり儀礼的。

優先順位は自分の支度とばかりに、

「私はえーつとね、これから駅に出るわ。お別れね」

につこりとルーサーに笑いかけて洗面所で身だしなみを整える。

ジリアスクに振られて以来鏡を見た記憶が無い。

あーあ、やけで染めた髪の毛はちつとも似合っていないしまだ二十

五歳だというのに十は歳をとって見られるわ目の下のくすみはもう取れないのかしらとしみじみ自分の顔を見る。

「朝食はどうするの」
「ラティーフの中ではもう帰ったはずのルーサー。」

今日の計画は昨日決まっっていて、
「朝食は電車の中でとるわ。急がなくなっくちやヤンプーに昼には着きたいの」
鼻歌が出るくらいに予定が頭の中に入っている。

「それじゃ夕食を一緒にどうだい」
部屋の鏡で身だしなみをチェックし洗面所から出てきたラティーフをみて頬が緩む。

「あら素敵。でも約束しないわよそれじゃお先に」
軽いトランクを片手にさっさと部屋を出て行った。

「予約しておくからね」
の声が背中に聞こえる。

「変な人、でもなんかすつきりして気持ちがいいわ。さあー行くわよ。いっぱいいろんな所に行つて見て回るわ」
フロントでカードで支払いを済ませて意気揚々とラティーフはホテルを出て行った。

ラティーフが出て行くと同時に黒いフロントガラスの車がエントランスの前で止まる。
そこへ手ぶらのルーサーが現われ乗り込むとゆっくりと車は発車して行った。

「今日の予定はご存知ですよね」とテット。

「知っている」

「テット、飛行場へ向かったらどうだ。そのほうが早く着くだろう」
嬉しい気持ちで声に出ている。

「準備してございます」胡散臭げに後ろに目をやるとクリスも見て
いる。

「うん」

と上の空で軽い返事。

車は駅とは反対方向へ走り出した。

バックミラーで見る限りルーサーの様子は上機嫌だ。

後部座席に座ると同時にいつもの分厚い本を広げたが

ページをめくりながら見慣れない動作が入っているのをクリスは見
逃さない。

信号機の変わり目を利用して注意深く見ていると携帯電話の画面を
ちらちら見ている。

隣のテット同じ行動である。

テットもパソコンで部下の仕事の状況をチェックし命令を変更した
りしているが

合間手が止まり携帯電話の画像を呼び出しては表情を和らげている。
盗み見した画像はコレットとのツーショット。

テットはレイステン市では警備会社の社長、主にルーサーの警備を
しているがガイネスからの要人達の警護も受け持っている。

田舎国ガイネスから出てくる要人たちはとっかえ引返して引き連れ
てくるお供は半分観光旅行気分の団体様を立ち回り先毎に警備を変
えて守っている。

社長としてのテットの立場を利用してコレットを誘っているが誘われるコレットもテットを金のなる木と心得て付き合っているようである。

数日後には二人はセデル国を出てガイネスに戻る身分である。

テットは歳の差のあるコレットを本気で国につれて帰るつもりであるし

ルーサーはといえばやっと二度目のデートが出来てクリスマスとしては人間らしいルーサーを見られて嬉しいがテットの手帳のリストを半分も消化できていない。

テットがメールの着信履歴を見てにやりと笑う。それを横で見ているクリスはコレットからの良い返事だと推測する。四十路の春である。

「良いニュースです。今夜ドラドのブラース様が予定を変えてレイステン市においでになる」

「明日の予定だったろう」それもイクラル市のホテルでラウンジでの約束が取り付けてある。

「セデル国の外相が南海の嵐に出立を遅らせたせいでしょう。予定を見直しましょう」

「変えなくて良い」

「それは出来ません。ブラース様は評議会の委員の一人です。出来ればもつと繁盛にあって印象つけるべき人間の一人です」

「変えなくても良いといっている。外相は天気で予定を変えたのだ

ろう。南海の天候などすぐ変わる。ブライズは外相と会談するつもりだ言っているが目的は別だジプトン社の会長も孫の誕生日にレイステンに居る。ジプトン社の系列会社の社長も集まっている。僕になど会う暇もないくらいに忙しいはずだ」

ブライズの行動予測などすぐに計れるとテットをたしなめる。

予定を変えらてはたまらないそれでなくとも
幾つかのキャンセルをテットには飲んでもらうつもりでいる。

昨夜から今朝までのラティーフの顔を画面に出しては何度も見ている。

雑誌と違って初々し印象である。

どちらも大事なことを話し合っているというのに
少し浮ついた会話になっているとクリスは一人聞きながら思う。

この土壇場に来て恋に燃えている二人が切ない。

ヤンブー

白い峡谷シャプイから五十キロ内地に入り込みヤンブーに着いた。標高二千メートルの台地には美しく澄んだ湖が広がっている。シャプイを早く出たのはヤンブーの探索時間は多く取るため。美しい湖を取り囲む森の間に村や町、ホテルが点在している。

パンフレットどおりに歩いていくと小さなコテージが道路の横に立ち並び先に賢者の泉といわれている小さな泉まで歩いて登りラティーフは一息をついた。ここもまたたくさんの観光客で溢れかえっている。

流石にここまでシャプイの硫黄の匂いは漂ってこなかったがおしゃれをした婦人の香水がどぎつく鼻にまとわり付いたのには困った。湖を半周し遠くの山並みに太陽が傾きはじめている。

土産物屋にバッファローから嫁いで着た夫人は居ないかと尋ねると答えはここもシャプイと同じでバッファローの地名を知って居る人間に出会えなかった。

「ここも素敵な場所だけど、人で一杯だわ」

水の上に吹く風に心地よさを感じながら夕暮れの湖がピンク色に染まるといつ時間を心待ちにしている観光客を後にしてホテルにとラティーフは足を向ける。

疲れる前にホテルに戻り明日からの予定を組みたい。

穏やかで神秘的な風情の湖を離れて緩やかな坂道を登り詰めるとシャプイで泊まったホテルと同じ名前のホテルが建っている。

神秘的な湖に合わせてたくさんの木々が建物を囲みエントランスを隠している。

ホテルの玄関の手前で一台の車が静かに止まったまま動かない。坂道を登って来たホテル客の車やタクシーが慌ててハンドルを切つて避けて中を覗くが運転手も車内も見えない。

止まった車の助手席にはパソコンに拳を置いているテット。目は後ろのルーサーを睨んでいる。

「もう遊びはお終いですよこのまま帰りましょう。連絡が入りました。明日の朝トレジャーホテルで待っているそうです」握った拳が青い。本気で腹を立てている。

ヤンプーまで不承不承しているがついさつき連絡が入った予定の要人のアポが取れたのだ。

大事な人間だとわかつているのにルーサーの答えはつれない。

「今日の予定は全部クリアした。どんなことをしたか教えようか。卿の娘は誰を連れてきたと思う大統領の娘だ、歳は聞かなくても良いか？婦人は五十を超えている孫娘は十三だ。彼女等とお茶を飲んで花を見て回った。これの何が楽しい！」
他にも世話になった教授に挨拶をした。

「ブライズと会ったところで何も変わらない。評議委員会は彼の意見を聞く所じゃない。国の未来を決める場に個人的な意見を通そうものなら彼自身が失脚する。無駄な顔つなぎはやめる。僕はこの見てくださいね。スポーツは？では今度一緒にプレイしましょう。行けば女子供ばかりが集まっている。昨日もそうだ今日も同じだ」
最後までいしつかりと専門書を読んでいたルーサーは子供や女性にキヤーキヤー騒がれるのに辟易している。

「フン、それに朝だと。ランチでもなければディナーでもない、出

発間際のホテルの朝。彼が僕に会おうと思ったのは、僕が現在王座にいる男の血を引いているという理由だけだ！僕個人に一片の興味も無い。奴とて同じ万が一・万が一僕が皇太子になったらあの時はこうでしたと言い逃れを作るためさ。もうすぐ試験だというのに何をあいつは隣の国でうろろろしている」

ルーサーの怒りが何処の誰に向けられているか推し量る。

「それはタラカテル国が民船を装って領海侵犯をしたからでしょう。今朝のトップニュースでは嵐で沈没と書いてあった奇跡的に船員は全員無事という。南海で嵐に遭い生き残れる確率は低い。

「将軍が追い払った」

ルーサーもニュースを見ている。

「表向きは、実際は船員を皆殺しにすると脅かして船を沈没させ戦闘の様子をタラカテルに送りつけています」

ガイネスからの伝達事項でテットは前からこのニュースを知っている。

タラカテルとは国交が無い国交が無い国との会見は秘密裏に行なう。ドロドのブラーズは運輸関連の話し合いでセデル国に訪れているが裏では外交交渉の駆け引きに飛び回っている。

「バラディール将軍のやりそうなことだ。タラカテルはどう出ると思う？」

ガイネス国内の要人達の動きはすぐに政治情勢に関連する。

これから帰国しようとするルーサーに要人の情報は不可欠である。

「表向きは激しく抗議するでしょうね。セデル国が介入して宥めているのが実情だと思いますが」

「わが国は損害無し」

「ええ、わが国は追い返すだけで海の向こう側まで砲弾を撃ち込み

「ませんかからね」

「ではドラドのブライズに伝言を。気疲れしているだろうからわずかな時間だがゆっくり休めと言っておけ明日は僕も休みだゆっくりとヒースコートの前を散策するよ」

と言いついて嬉しそうな笑顔を口元に浮かべて出て行った。目の前をラティーフが歩いている。

「ストロム様！」 テットの声が閉まったドアに吸い込まれる。

ルーサーは歩道を歩いているラティーフのそばに駆け寄り

パーティにでも行くようにぴったりと寄り添いホテルの緑深いエンランスに入ってしまった。

「まったくもう！ いったい何があったんだ！」

要人の話でルーサーの怒りが冷えたと思ったら予定通りの行動。

「あれが普通の男だと思いますね。今までが異常で……。俺今のストロム様のが好きですね親しみやすい」

運転手クリスは鳶の絡まったエンランスの明るい照明を羨ましく眺める。

「ばか者！ そんな事言ったら試験は迫っているのに。このままでは今までの苦労が水の泡だ」

クリスを叱り付けながらキーボードを打つ。最後の最後で追い込みの勉強もせずに女の後を追うルーサーが信じられない。

「ストロム様、試験を放棄するなんて無いですよね」

とちよつとだけ心配をする。確かにこの瀬戸際に休みをとって女性とデートは考えられない。

「そんなことさせるか！ギリアンに詫び状を書かせる」
達筆な文章のギリアンは主にルーサーの身代わりに見知らぬ人達に熱意のこもった文章を書く。

「もうレイステンはお払い箱っすね」
ルーサーが視界から消えるとクリスの笑顔も無くなる。

「規模を縮小するにも王の命令が必要だ私の一存では動けない」
せわしく指を動かしながら答える。

「サガモア王は本気でストロム様を望んでいるんでしょうかね」
手持ち無沙汰の腕を組む。明日の俺達はいったいどうなるのだろうか
と思えばぐねても帰国する以外に道は無い。

「わからん」
今日の予定は決まった。

「このホテルの見取り図は、よし従業員通路は把握しているな。通気孔と配管図。よし。出入り口には二人組んで一時間交替で明日の朝までヒースコートへの下調べを。レイステンの警備体制はそのままで」

ルーサーの我が儘も後二日で終わると思うと張っていた気持ちが萎みそうである。

「了解」
「クリス最後だ。この場はお前に任せる俺はブライス様に付く。俺の身の回りも片付けなければな」

「了解」

二人は少しの間前を真っ直ぐ見て黙っていたが

クリスが発車準備を始めるとテットは寂しげな顔を窓ガラスに向け

た。

ヤンブーの夜

濃い緑色の蔦のカーテンを掻き分けて歩いている歩道を登り詰め
やっと見えたホテルのエントランスの磨き上げられたガラス越しに
遅く到着した観光客が奥の受付で会話をしているのが見える。

予約無しで来た観光客だとその夫妻に同情した。
きつと断られている。

ラティーフもそうだ、ホテルなんて飛び込みでもすぐに泊まれると
思ったら大間違いで予約客でいっぱいですと受付で断られ荷物を抱
えて駅まで戻り駅から予約をして泊まることのできたのである。

あの夫婦とすれ違ったら声をかけて教えてあげようと歩幅を広げる
と後ろからルーサーの声。

「やあ」
いかにも顔見知りの二人が示し合わせて出会ったように声をかける。
「なんで？」

振り向きざまに上ずったラティーフの驚きの声。
頭の片隅にもルーサーはいない。綺麗さっぱり忘れている。

「夕食の時間に遅れそうだったんだけど間に合ったみたいだ。行こ
う。おながが空いている」

子供達を作ったという焼き菓子を食べ過ぎて口の中が気持ち悪い。

「どうやってこのホテルだとわかったの？」
一言も泊まるホテルの名前は言わなかった。

「受付のカウンターからここを予約したんだろう？」
そうだったかしら？確かにチェックインしたカウンターで予約した。
あのとき周囲に人がいたか思い出そうとしたが

にこやかな表情のボーイがルーサーに話しかけてボーイの案内でレストランの窓際の席に座る。
本当に予約していたらしい。

ルーサーの人目を引く容姿が気になるがガラス越しの美しい景色と一緒に食事をする相手がいる嬉しさにラティーフは顔がほころぶ。
食事が終わるとラティーフは感謝の言葉を心から口に出した。

「ありがとう。とても美味しかったわ」

他の客の目はルーサーに注がれていて
そばにいるラティーフはちょっと恥ずかしいけれど
別れて部屋に入ってしまえば気にする必要は無くなる。

「どづいたしまして。喜んでいただけ嬉しうよ」
直接部屋に昇るエレベーターの前でやんわりとラティーフの腕を取る。

「あ、君の部屋はこつちだよ。僕の部屋に荷物は運んでもらっている。旅は道ずれというだろう。まだ色々聞きたいことが残っている。パンフレットを広げる場所ならいくらでも有る。一人寝を希望するなら

最初に部屋を選んでくれ。西とか東とか朝日を浴びたい？夕日が見えるはんたいの部屋を選べば良いよ」
と、ラティーフにしか聞こえない声音で意気揚々とルーサーは説明する。

「あ・・・どうしてそんな勝手なこと」

狭いエレベーターの中で他の客の視線を気にして
大声で反論したいのに隣の女性と目が合い言葉が続かない。

「昨日のお詫びさ。僕は無作法だったいつもそんなことばかりして

いると思われたくないからね。それと君の予約した部屋はキャンセルした。行こうか」

エレベーターが開くと優しく腰を押されて前に歩くしか選ぶ道はない。

ルーサーに説明された後、

ふとあのご夫婦がキャンセルが出た部屋に泊まれるのではと思うと悪い気はしない。

「ベッドが二つあるの？それともこれから部屋を決めるのかしら」
ルーサーの説明を頭に描くと建物の端から端まで歩くことになりそうである。

エレベーターのドアが開いた先には大きなドアが一枚開かれている。

「私始めてよこんなに広いホテルの部屋って見たことがないわ」
中を覗きドア横に立つグレーのスーツの男性にこんにちはと声をかけると

にこやかに会釈をして男性は立ち去った。

「どなた？」兄弟の方かしらそれとも一緒に旅行を楽しんでいる友達のかしらと色々詮索する。

「テット。執事兼護衛イコール教育係」と短く的確に説明する。
広いリビングから分かれた五つの部屋を一つ一つ灯りをつけてラテイーフに見せる。

「忙しい方なのね」

昨夜止まった部屋の三倍はある寝室にただ驚き選ぶことが出来ない。

中でも一番小さな部屋を見つけるとここがいいわとトランク一個置くと
ルーサーがにこやかにここはクローゼットだと教えてくれその隣の
広い部屋にラティーフの寝室は決まった。

リビングに戻るとテーブルには温かなお茶が待っている。

「色々見て歩いて、お勧めの場所なんかある？」

地上の暗さとは相反して空には太陽の明るさが僅かに残り美しい星
が灰色の空に瞬いている。

窓辺の小さなテーブルにお茶を移動させてラティーフを長椅子に座
らせる。

高い位置から見る湖とその周囲の景色は広く大きいがどこか物悲し
い。

「景色は何処を見ても綺麗だったわ」

でもヤンプーもシャプイも一生その景色を見て過ごしたいとは思わ
ない。

村を出て三年、

町に出れば仕事はあるとオババに言われ出てきたが

ありついた仕事は狭い範囲内ではしか動くことしか許されない生活で
ある。

選手生活の中で友人もたくさん出来たというのに規則の壁に隔てら
れ誰にも会えず相談も出来ない。

もし競技の関係者にラティーフから声をかければ

調査委員会から声をかけられた人間が呼び出しを受ける。

調査委員会の判断が悪ければ出場停止のペナルティが待っている。

本戦にでていない選手は失業する。

そんなハンディを分かって連絡を取るとはラティーフには出来ない。

最後のお別れにマイアーが来てくれたのでさえ心苦しかった。

マイアーの実家の住所までラティーフに渡している。

喜んでその実家にでも連絡を入れればマイアーの選手生命を短くする可能性もある。

点点と浮かび上がる湖の周囲の灯りが暖かな色合いに変わり始める、
気がつけば空には満天の星。

やっとロックイーゼンの選手ではなくなったとの感覚がラティーフ
に戻ってきている。

ルーサーの心はガラスに映るラティーフの顔に震えが来るほど感動
している。

上弦の月

カーテンの無い窓ガラスの向こうには

暗い湖と遠くに瞬く光。天空高く上っているのは弓なりになった月。

広いベッドの中央に小さな灯りが一つ

昨日に引き続きラティーフとルーサーは顔を寄せ合ってベッドに横たわっている。

遠い昔話をするように

オーケシュストのキャラバン隊と一緒にレイステンに運ばれ
競技に参加したことを細々とルーサーに話して聞かせている。

聞き手はアネルの大ファンである。

ルーサーの穏やかな口調で尋ねられて何時とはなしに良い雰囲気になり

次から次へとお互い質問を投げかけては

返事とも説明とも取れない受け答えでベッドの中の会話は続いている。

「君の美しい村の思い出は全部友達結婚式に繋がるんだね」

少し茶化すように抑揚をつける。

楽しい雰囲気は演出しなくてもルーサーの身体中からあふれ出している。

「そうよ。女の子はねその儀式に憧れているのよ」

「君も憧れているの・・・」

ラティーフが照れて笑うと暖かいと息がルーサーの胸元にかかる。

村で同じ歳の女の子は皆結婚している。年下の女の子の式にもたくさん出て寂しい思いもいっぱいした。

「そうよ、女の子ですもの」
ルーサーと濃密に言葉を交わしているラティーフはお酒に酔った気分が続いている。

「そうだね、こんな所で言う言葉じゃないけど結婚しないか・・・と違うね。結婚式を挙げないか。綺麗な景色の場所で結婚式を挙げたら素敵だと思わないか。思い出はいつも美しい景色と共に有る。いいだろう?」

淡々と今までと変わらない甘い声音で尋ねる。

「結婚?」

きよとんと口に出し言ってみる。結婚とは何か?

「違う結婚式だ。結婚式。女性なら理想の結婚式があるのだろう。どんな結婚式がいい? 式服は君に合わせるよ素敵なお思い出にしよう」
いかにも結婚と結婚式が区別された違うもののように言う。

「思い出作り・・・旅の思い出に結婚式なんて考えたこと無いわ」
ときらきらした目がルーサーを見上げる。

ミリーが言っていたっけファンは一生に一度の思い出を選手と作りたがると

ファンの送ってきた結婚申請書を見せびらかしていた。

結婚に憧れて三度も振られ
もう駄目とあきらめた時にまたもや結婚の話題が出るとゾリアスクの顔が思い出される。

「それじゃ今から考えてくれ。君の望むままにやってあげるよ」

ルーサーの言葉でラティーフの口元がほころんでうつとりと回想している表情はルーサーを満ち足りた気分させる。

「結婚式・・・」

幼い頃の記憶が鮮明によみがえり

ラティーフの心は一気に村へ戻り友達の結婚式に出た感激に浸る。

ユリーンは満面の笑顔で、モクゾンは笑いながら泣いて・・・皆素敵で可愛らしかった。

ルーサーの手がラティーフの腰から背中上がり肩を優しくなでる。

「一度・・・やってみたい結婚式があるの。とても簡単なお式なの、あつというまに終わるわ」

ちよつと興奮して早口になる。

ルーサーの手の位置が変わったことなどまったく気にならない。

「いいよ。明日の朝準備をしよう」

なんの銜いもなくラティーフがルーサーにしがみつくるとルーサーは至福の時間に浸る。

「ええ」

ルーサーの耳元でラティーフの返事が心地よい。

閉じた目の中にジリアスクが浮かび上がり

しがみついたルーサーのぬくもりをジリアスクに置き換えてラティ

ーフは幸せに浸った。

カヴァンナの丘 1

翌日の朝は快晴を約束するように
ひたひたと湖には白い霧が揺らめいている。

太陽が中空高く顔を出すと霧はたちどころに消えて水辺の草の上に
朝露だけを残している。

二人はホテルから椅子を二脚借り花屋で二人が持てるだけの花を購
入した。

「車を使おう。合理的だろう」

「だめ、歩くの。式場には歩くって決まっているのよ」

椅子の足にも花を巻きつけている。美しく開いた花をつぶさないよ
うに持つのは難しい。

早起きした観光客の好奇の視線を無視してラティーフはずんずんと
湖と反対側に向かう。

一時間も歩くと湖などまったく見えなくなっておおよそ観光地とは
無縁の集落に二人は入った。

静かな家並みの間を歩いていけば軒先に出てきた婦人が立ち止まっ
て二人をみている。

「ここらでもう一度聞いたほうが良いかもしれないわ」

ホテルの従業員に一通り道順は聞いて歩いているが
四方に伸びた家の間の道はどれも同じ幅である。

「何を聞くの」

「式場よ」

「？」

暫らく歩いて庭に出ていた婦人にラティーフは声をかけた。

「カヴァンナの丘はもつと奥かしら」

「ああ、その先で道が分かれている。右の小さな道を行きなさい」
「ありがとう」

にこやかにラティーフが答えると花だらけの椅子を持った二人を村人は黙って見送った。

道は婦人の言うとおりで二手に分かれて

右への道はちよつとルーサーが躊躇するくらいに鬱蒼とした草で覆われている。

ラティーフは気にならないのか汗を拭きながら歩いていく。

古い石垣や道とは思えない笹の原を越えて

木々の茂った中を登り突然足元には丸石が敷き詰められた山道に入る。

「着いた！」

人が手を入れた後である。

「ここ？」

「うん、この先」

丸石の続く坂を登り詰めると山の頂上。

見晴らしの良い丘の天辺は樹木を切り払い視線の先には遠くに山並みだけが見える。

「ここがカヴァンナの丘。カヤンデル山脈に向かって式を行うの。世話人や介添え人が居なくても山が見守ってくれるのよ。手入れされてるからまだ使われているのね」

とラティーフは二つの椅子を短い草の上に並べ花束を抱えて頂上の周囲を回って一本ずつ置いた。

「これでいいわ」

と天辺の上にも又こんもりとした土山の上にルーサーを呼ぶ。

「来て、素敵な花婿さん」

椅子の前に二人で立ちにはかんだラティーフが目を閉じる。

「空に住むもの、地に住むもの。山々の精霊たち。ここに居ますは太陽の子ラティーフ・セヴェール」

「月の子アルヴァー・ルーサー・フォルストロム」

「空蝉の花と誇り高いカヴァンナに誓って二人の営みをその懐で行ないます」

お互いの胸に花を飾ってラティーフが唇に指を置く。

誓いのキスをするのだなと察して軽くラティーフの唇に触れると電気が走ったように全身が痺れる。

「風の神よ受け取って!!」

さわさわと吹いていた風がラティーフの声で強く吹き上げ
投げた花を空中に運ぶように浮かした。

風が薄い雲を追い払い丘の上に強い太陽の光が降り注ぎ
刈り取られた草が陽を受けて金色に輝き
草や木がいつせいに葉をこすり合わせ拍手をするようにざわざわ音
を立てている。

風の神様の祝福を受けたラティーフは恥ずかしそうに大きな声をだ
した。

「これで終りよ。立会人はカヤンデル山脈。参列者はお花たち。苦
勞して歩いてきた甲斐がないでしょう?」

「いや。いい式だったよ」

「ごめん。十代の子供じゃないのにね。一度ねカヴァンナの丘に立
ちたかったの。さあ椅子を返さなきゃ」

昼も過ぎ空は高く澄み渡りカヤンデル山脈が遠くに見えている。
来た時よりも身軽になったとはいえ敷石が無くなった荒れた道を椅
子を持って下りるのはきつい。

丘を降りて家並みが見えると、

「降りてきたよー」

と何処からか子供の声。

道幅が広くなり汗と草まみれの二人を夫人が家の前で手に何かを持
って待っている。

門の前の前まで二人が来るとニコニコ顔の女性が、

「ハイご祝儀だよ。おっとお返しはこの花を貰おう幸せにね」

「ありがとうございます」

婦人は干物を椅子の足にくくりつけ代わりに椅子の背中の花を抜き取る。

道筋の軒先には老人から子供まで待っていて手に手に鳥の羽やビ―玉、紐、干物と

花をとっては代わりに乗せていく。

「わしの分がないじゃないか！」

汚い老人が足つきの箱を手に二人の椅子の周りをうろろして邪魔をする。

「ええい、これを貰おうかの」と干物を抜き取ると満足げな笑みを浮かべる。

「陽のあるうちに帰りつきなされや」

「ありがとうございます」

飛び出してきたばかりの老人は裸足のまま家屋の中に戻っていく。

「これはこういう風習なのか」と怪訝そうなルーサー。

椅子の背柱から足の支柱にまでくくりつけられた祝いの品物。

一見ゴミにも見える。

「そつみたいですね」

椅子を持つ手が貰った物の重さで震えるがなぜか楽しい。

ラティーフも解らないがヤンプーではカヴァンナで式を挙げたカツ

ブルに

祝儀を渡すのが当たり前らしい。

カヴァンナの丘 2

椅子に積まれた祝儀の品物を落とさぬよう
来た道を辿り帰路に二人はついている。

曲がりくねった道を抜けて

コテージやホテルが樹木の間に見え始めると
さわやかな風が湖から吹きつける。

行きと同じにびっしりと汗をかきホテルの前では

一人のドアボーイがロビーを走っていくのが見えた。

椅子を持って出た二人が今度はその椅子に訳の解らないものに乗せて帰ってきたのである。

「途中で捨てればよかったな」

くだらない祝儀の数々をルーサーは持て余している。

「あらもつたいない。全部私が貰うわ。でも椅子は困ったわね。汚れたし変な匂いもついてるわ。私がこの椅子買い取るわ、あとで支配人に謝らなきゃ」

「支払いは気にするな。僕がやる。まずはシャワーを浴びなきゃ話にならない。この手でホテルの壁やなんかを触ったらその代金まで請求されそうだ」と笑う。

「本当」

残っていた一人のボーイが荷物を持ちましょうかと近づいてきたが二人は断ってエレベータに乗った。

まずは草の汁や泥汚れをシャワーで落としてご祝儀にと送られた品物を床一杯に広げてみる。

その作業はラティーフが全部担当した。

「何人から貰ったのかしら。たくさんあるわね」と嬉しそうである。

ファンからの贈り物を失くしてがっかりしていたからこの品物はラティーフの気持ちを明るくさせる。

そこへノックの音、テットがドアを開くとホテルの支配人が立っている。

「ごめんなさい、まだ椅子は綺麗にしていないわ」慌ててラティーフが椅子についた葉っぱを落とした。それは葉っぱの形をした大きな染み。

「そのままです。そのまま結構でございます。いえ椅子のことは後で結構でございます。ちょっとその先ほどボーイが知らせてきたのですが、カタラの箱を見かけたと騒いでいたので。よろしかったらじっくりと見せていただけませんか？出来ればその箱を写させて頂いてロビーに飾りたいのですが」と、

もみ手を繰り返し真剣な様子の支配人の後ろに三人のボーイがちよろちよろと中の様子を伺っている。

「カタラの箱とは何か説明してもらおうか」と椅子に座って足を組みルーサーは支配人を見る。

「は？あのお客様はセデル国の方ではありませんのか。フォークステット様はセデル国には多い名前ですのでつい・・・」支配人は神妙に言葉を選んで居るがだらだらと要領を得ない。

「わかった。そのカタラの箱はイアコブというマイスターが作った物だ言うのだな。本物か？」

支配人の説明を大まかにまとめてその後ろに声をかける。後ろからボーイが首を縦に大きく振る。

「本物かといわれましても私どもはカタログとかコピーでしかこの目で見ることがないので。マイスターの創作活動はこの地域の誉れです。ここで作られた新作ならば是非ともこのホテルに飾っておきたいのです」これで一つ他のホテルより抜きん出る事が出来るとその顔は輝いている。

支配人の言葉を受けて老人が置いていった小箱を手にとつて見る。確かに細かい細工が要所要所に施され込み入っている。

「そうですか。そんなにすごい物なのですか。私にはその価値はわかりませんから大事にしてくださいさるなら差し上げ・・・」

ラティーフの言葉を手を握ってルーサーが止める。

「貸し出ししましょう。テット契約書を作ってくれ。貸し出し期間はこちらが必要になったときにも返して下さればよい」

凜とした声音でラティーフの声を消し飛ばして主導権を握る。

「ルーサー私は構わないわ」

と小声で言う。ルーサーは何か考えがあるらしい。

「やってしまえばホテルが金銭的に困った時や、つぶれたときに売り払われてしまう。貸し出ししておけばむやみに粗末に扱われないだろう」

と手早く説明する。

「あ、そうね。あなたにお任せするわ」と納得する。

ラティーフの声は支配人の耳に届いた。

「ヒエーーーーー」

「へエー、あ、」

一瞬思考が止まった支配人は何度も瞬きをしてテーブルの上にある縦二十センチ横幅三十センチ高さ十センチに満たない箱を見つめている。

「支配人、何か言つて・・・」
と、後ろからボーイ。

「本気でございますか？」と支配人。

「違う、違う、そうじゃないつてば・・・」
と後ろのボーイ。

「期間は限定しない。貸出料金も無料にしよう。テット、契約書を支配人に渡してくれ」

にこやかにラティーフを見て手を握り締める咄嗟に出して握ったけれど離したくない。

「は？では見栄えの良い額縁を・・・はいえロビーにガラスケースを置いて展示してもよろしゅうございますか？」と気を落ち着けて尋ねる。

「そうそう・・・」
と後ろのボーイ達。

「地元の有名人の作品なのだろう。展示の仕方はそちらに任せる。こちらに返してもらおうとき破損などせぬよう気をつけられよ」

テットが契約書を支配人に渡すと珍しいものでも見るように内容を確かめる。

「ほう、この印は王家の紋章。は？へ？真にぶしつけなお願い事をしましたお忍びであるとも知らずに・・・」

ゆつたりと構えて座っているルーサーに対して支配人は一歩後ろに下がり

こんな時どんな態度で接したらよいかいまさらながらに必死で考える。

「かしこまる必要など無い」

と片手を振られて会見は終わったと知るとカタラの箱を抱えて支配人は後ずさりして出て行った。

「支配人！大事に持ってください！！！」

とエレベーターの前でボーイの声。

「だめだ・・・手が震えて力が入らない・・・」

「支配人！」

壁に寄りかかった支配人を支えエレベーターに乗せ騒がしい男達は去っていった。

支配人が部屋を出て行くと、

「出立の時間が来ていますが」とテット。

昨日の夜から今日の午前中まで全ての予定をキャンセルしている。

二十三年間待つていた日が来たのに感慨深くなるどころか不安ばかりが先行して落ち着かない。

「分かっている、ロビーで待つていてくれ」
反対にルーサーときたら試験を放棄したのか妙に清らしい顔つきである。

軽く頭を下げてテットが部屋から居なくなると
ラティーフは慌ててヤンプーの人から頂いた干物以外の品物を綺麗に並べてトランクに詰め込む。

余裕のあったトランクはパンパンに膨れ上がりそれでもラティーフは満足している。

三年間の競技生活よりも充実した一日、なんとと言っても人の笑顔がラティーフの心に残っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0997x/>

Caesalpinia sappan (蘇芳)

2011年11月5日08時16分発行